

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

平成 30 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和元年 8 月 1 日



## はじめに

平成 30 年度の外部評価書をお届けします。平成 30 年度の外部評価に当たっては平成 29 年度の外部評価委員会の提言を受け、ヒアリングを実施しました。ヒアリングでは外部評価委員会委員の質問を受け、国語研の置かれている状況、現在の研究内容をその方法や目標を含めて、理解していただける機会を得ることができたと思います。

平成 30 年度は、基幹研究プロジェクトを第三期中期計画に基づいて忠実に実行していくのと並行して、29 年度の外部評価書で指摘を受けた何点かの問題点の改善に努めました。例えば、日本語学・言語学のパイオニア的論文を 8 点英語に翻訳しました。これらの論文の英訳に際しては、当該分野を専門とし、英語を母語とする言語学者に依頼しました。30 年度中に完成した英訳論文は 7 点が国語研のリポジトリで公開されています。この作業は 31 年度も継続され、4 点の翻訳が進んでいます。そのほかにもフォーラムや NINJAL シンポジウムの動画を作成して、一般向けに加工し、公開するなど、国語研の活動をより広く知っていただく努力を続けています。平成 30 年度の外部評価書ではこのような点を評価いただき大変好意的な記述となっています。来年度の 4 年目終了時評価に向けて、このような評価をいただけたことは国語研としては大きな力になります。今後も外部評価委員会の客観的評価を踏まえた、国語研の活動の改善に関する提言に対しては真摯に対応していきたいと思えます。

外部評価書作成に際し、坂原委員長をはじめとする外部評価委員会の委員の皆さまの労を多したいと思います。所員一同この評価と提言にこたえるべく誠心誠意、国語研のより一層の発展のために努力を重ねていきたいと存じます。

令和元年 8 月

国立国語研究所長

田窪 行則

## 目 次

1. 評価結果報告書	1
1. 平成 30 年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価・センターの研究活動」 に関する評価結果	2
2. 平成 30 年度「管理業務」に関する評価結果	92
2. 資料	99
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	100
2. 国立国語研究所平成 30 年度業務の実績に関する評価の実施について	101
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧	102
4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	103
5. 国立国語研究所外部評価委員会ヒアリング【平成 30 年度実績評価】	105
国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】（第 1 回）	106
国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】（第 2 回）	107

# 1. 評価結果報告書

平成 30 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

- 令和元年 5 月 14 日 国立国語研究所外部評価委員会ヒアリング【平成 30 年度実績評価】
- 令和元年 5 月 31 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】（第 1 回）
- 令和元年 8 月 1 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】（第 2 回）

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会  
委員長 坂原 茂

## 国立国語研究所平成30年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の平成30年度分の実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) 総合評価(中間評価報告書)、(2) 6つの共同研究プロジェクト(「対照言語学」、「統語・意味解析コーパス」、「消滅危機言語・方言」、「通時コーパス」、「大規模日常会話コーパス」、「学習者コミュニケーション」)、(3) 2つのセンター(コーパス開発センター、研究情報発信センター)、(4) 「管理業務」である。

平成30年度の総合評価(中間評価報告書)は「順調に進捗している」であり、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値すると判断された。共同プロジェクトの評価は、A(計画を上回って実施している)が4、B(計画どおりに実施している)が2であり、各プロジェクトの積極的研究姿勢と研究の進展が高い評価を受けた。センターの評価は2つともA(計画を上回る成果を上げている)であり、センターの多方面の活動と成果が高く評価された。管理業務については、A(計画を上回って実施)とB(計画通り実施)がそれぞれ2で、全体的にきわめて良好な業務運営が行われていると評価された。

今年度の外部評価について特記すべきことは、かねてより要望の高かったヒアリングを実施し、充実した議論をもとに正確で公正な評価ができたことである。ヒアリングは正確な評価にきわめて有効であるので、これ以降も是非とも続けて欲しい試みである。また、今年度はプロジェクト開始より3年が経過したことで、基幹研究プロジェクト評価委員会による平成28年度～平成30年度における進捗状況の中間評価が行われ、「順調に進んでいる」と評価された。

以上のように、外部評価委員会は、平成30年度のプロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、きわめて順調であると判断した。本プロジェクトは、種々のコーパス開発を始めとして、これ以降の日本語研究の指針となる可能性を秘めるきわめて重要なプロジェクトであるので、外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを強く意識しつつ、これ以降もこの順調さを維持して、プロジェクトの完遂に励むことを希望する。

令和元年8月  
外部評価委員会  
委員長 坂原 茂

## 機関拠点型基幹研究プロジェクト 中間評価報告書

### 評価に関する総括

#### 《達成状況の評価》

順調に進捗している

#### (判断理由等)

以下のように、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信、のいずれにおいても計画通り順調に進んでいる。

### 【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

#### (1) 研究成果・研究水準について

30年度までの3年間の研究成果・研究水準はきわめて高い評価に値する。国内での公開研究発表会・講演会・シンポジウムは59件、国際シンポジウムは27件、論文は466件、図書・報告書は64件、発表・講演は1470件と多数に上り、期待以上の研究成果を上げている。コーパス作成についても、統語・意味解析コーパス、通時コーパス、大規模日常会話コーパス、アイヌ語口承文芸コーパス、日本語諸方言コーパスを始めとしてさまざまなコーパスの作成・公開が着実に進展している。それ以外のデータの蓄積にも目を見張らせるものがある。

研究水準は最先端のきわめて高度な研究であり、いずれも学界をリードするものである。研究成果は学界を始めとして、研究誌、新聞、ラジオなどでも取り上げられ、高い評価を受けている。たとえば、Kubozono, H. (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants*, (2017年4月, Oxford University Press) は、国際誌 *Phonology* の書評で高い評価を受けた。また、本基幹研究プロジェクトで作成されたコーパスは、すべてこれ以後の研究遂行に大いに役立つことが期待されており、たとえば、日本語歴史コーパスは『日本語の研究』学界展望で、日本語史研究にコーパスが重要な位置を占めることを感じさせる画期的なものであると評価された。『基本動詞ハンドブック』は、「コーパスに基づいた先進的な取り組みとして一見の価値がある」と評価された(『英語教育』(大修館書店))。

#### (2) 研究体制について

研究は6つのプロジェクト(「対照言語学」、「統語・意味解析コーパス」、「消滅危機言語・方言」、「通時コーパス」、「日常会話コーパス」、「学習者のコミュニケーション」)により推進されている。各班は、国内外の研究者を共同研究員として組織し、研究者ネットワークを構築して、それぞれの研究を行っている。3年間の共同研究員数(6プロジェクトの合計)の総数は1253名であり、その内、PD・大学院生は100名、海外機関所属研究者は193名である。共同研究員の総数、PD・大学院生の数、海外機関所属研究者の数は、いずれも年を追う毎に増加している。また、3年間で海外の大学等14機関を含めて合計22の大学・研究機関等と新規の交流協定を結び、共同でデータ公開や研究を行った。

各班の研究の進捗状況を管理するために共同研究プロジェクト推進会議、自己点検・評価委員会を設置し、研究情報の共有化、班同士の連携、合同シンポジウムの企画、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。

各班は、それぞれの研究テーマに沿って研究を推進すると同時に、相互に連携して6回の合同シンポジウムを開催した。30年度は全てのプロジェクトが参加するNINJALシンポジウムを開催し、これをもとにした書籍を31年度に出版する予定である。また、5年目の32年度にも全てのプロジェクトが参加するシンポジウムを予定している。

「対照言語学」班と、「統語・意味論コーパス」では、海外機関所属の研究者を含むアドバイザリーボードを設置し、国際シンポジウムや研究成果の公表にアドバイスを反映させた。他のプロジェクトでは、アドバイザリーボードを設置していないが、国際シンポジウム等に海外の研究者のアドバイスを反映させた。

以上のように、研究推進のための合理的でバランスの取れた研究体制が構築されており、これに関しても高い評価が与えられる。

### (3) 教育・人材育成について

大学との連携による教育については、一橋大学大学院で毎年3名が、東京外国語大学大学院で毎年2名が大学院教育を行った。一橋大学大学院では、博士号審査に主査8件、副査10件を担当した。「危機言語・方言」班では、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy3 と協定を結び、特任助教1名を雇用して共同研究を推進した。また、方言調査において島根大学（隠岐島方言調査）、愛知県立大学（木曾川町方言調査）、弘前大学（むつ市方言調査）と連携した。

教材開発については、従来の日本語学教材とは異なる教材の開発を進めた。日本語学教材に関しては、29年度にジャワハルラール・ネルー大学とインターネット大学院 e-PG Pathshala の日本語学講座教材を開発し、30年度にこれを活用して南アジア（インド、スリランカ）・東南アジア諸国（ベトナム、ミャンマー、カンボジア）において日本語教師・研究者を対象とする日本語学講習会を実施した。また、アクティブ・ラーニングに対応した日本語学教材『日本語を分析するレッスン』を29年3月に刊行した。その他、コーパスに基づく教育プログラム、および言語のフィールドワークに関する教育プログラムを開発中で、31年度に刊行する予定である。

若手人材の育成では、博士学位を取得した若手研究者をPDフェローとして雇用、また、若手研究者を非常勤研究員として雇用し、プロジェクト研究をとおして専門的研究指導を行った（3年間合計で138名）。JSPS 特別研究員や大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、国際シンポジウムや研究発表会において発表の経験を積ませた。また、若手研究者に対して、調査や学会発表のための旅費を支援した。方言調査に参加する学生・大学院生を全国公募し、隠岐島方言調査（28年度）、木曾川町方言調査（29年度）、むつ市方言調査（30年度）に参加させ、実践的な指導を行った。

チュートリアル、講習会の開催については、大学院生を主な対象とするチュートリアル・講習会を28年度に4回、29年度に18回（うち海外4回）、30年度に31回（うち海外9回）実施した。29年度からは、海外（台湾、韓国）でも実施している。

社会人の学び直しへの貢献については、日本語教師を対象とするセミナーを28年度・29年度は国内、海外で各1回、30年度は国内で1回、海外で2回行った。30年度は、南アジア（インド、スリランカ）・東南アジア諸国（ベトナム、ミャンマー、カンボジア）で日本語教師・研究者を対象とする日本語学講習会を実施した。

以上のように、大学との連携や教材開発を通して積極的に研究成果の教育的普及を推進し、また若手研究者の育成や社会人の学び直しなどにも多大な貢献をしており、この面についても高い評価が与えられる。

#### (4) 社会連携・社会貢献について

地方自治体との連携では、宮崎県椎葉村、鹿児島県和泊町・知名町と連携協定を締結し、地方自治体と共同で方言語彙集の作成や言語復興活動を実施した。また、27年度から毎年、文化庁、地方自治体、琉球大学等との共催による「危機的な状況にある言語・方言サミット」を開催し、全国の危機言語・方言の保存・復興活動に携わる人たちのネットワークを定着させた。地元、立川とも、立川市歴史民俗資料館との連携による講演、立川市スタンプラリー等をとおして連携事業を実施した。

産学連携では、(株)小学館・(株)ネットアドバンスとの連携による歴史コーパスと「新編日本古典文学全集」本文とのリンク、ワークスアプリケーションズ徳島人工知能NLP研究所との共同による日本語形態素辞書UniDicの整備、IBM・NTT CS研・NII・NAIST・京都大学との連携によるUniversal Dependencies（言語横断的な係り受け構造を設計する世界的試み）への参加等、産業界との連携を積極的に行った。

研究成果の社会発信では、一般向けのNINJALフォーラムや講演会、子ども向けの「ニホンゴ探検」、研究情報誌『国語研 ことばの波止場』、SNS、ツイッター等をとおして、研究成果を分かりやすく社会に発信した。29年度以降はフォーラムや講演会のビデオ録画をウェブで公開している。また、フォーラムや講演会の内容を分かりやすくまとめた啓蒙書や各種コーパスの公開をとおして、研究成果や多様で大量の言語資源を社会へ発信した。

展示を通じた研究成果の公開では、「え、ほん？」展（29年度）や可搬型展示ユニットによる言語の展示、それに合わせた大学生・一般市民向けの講演会（30年度）を実施し、展示という新しい手法で言語・方言の研究成果を社会に公開した。

以上のように、社会連携・社会貢献についても、地方自治体、産業界との連携、一般・子供向けの研究成果の発信などさまざまな工夫と努力がなされており、これに関しても高い評価が与えられる。

#### (5) 国際連携・国際発信について

国際連携については、ヨーク大学言語学科(英国)「統語論等における対照研究を主とした研究協力」など、3年間で14件の海外の大学・研究機関等と国際連携協定を締結した（28年度4件、29年度4件、30年度6件）。また、共同研究員として57人（28年度）、63人（29年度）、71人（30年度）の海外の研究者が参画し（表12）、共同研究を行ったほか、海外からの外来研究員を19人（28～30年度新規）受け入れた。

国際発信については、国際シンポジウム・国際学会等を 28 年度 3 件、29 年度 10 件、30 年度 14 件企画・開催した。特に、30 年度は国際シンポジウム・国際会議を 14 件開催し、研究成果の国際発信を行った。国際学会等での講演・発表（445 件）、海外出版社からの書籍の刊行(12 件)も活発に行われている。

ホームページでの英語による発信については、プロジェクトホームページの英語による開設、危機言語データベースの英語での発信、『日本語歴史コーパス』の英文ホームページの作成等により、データの国際発信を行った。また、これまでの画期的な日本語研究の成果を国際的に発信するために、30 年度に 7 件の論文の英語訳を行った。これらは 31 年度にホームページで公開する予定である。

以上のように、国際連携・国際発信についてもきわめて活発に行われており、ホームページでの英語による発信を含めて高い評価が与えられる。

#### **(6) その他特記事項**

特になし。

#### **【31 年度以降の研究推進に向けた意見】**

研究の推進、コーパス作成・公開、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信はいずれに関してもきわめて高い水準で順調に進んでおり、次年度以降も高いレベルの研究継続が期待でき、現在の研究体制は機能的で効率のよいものになっている。したがって、大きな変更は必要ないと考えられる。

## 各プロジェクト・センターの評価

### 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窪菌 晴夫

#### I. プロジェクトの概要

##### 1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

##### 2. 年次計画（ロードマップ）

###### ● 全体計画・研究組織

音声研究班と文法研究班は研究成果発表会や研究文献リスト作成などの日常的な活動をそれぞれ独自に行う一方で、「対照言語学の観点から日本語の特質を解明する」という共通の目標に沿って国際シンポジウムを定期的で開催し、その成果を英文論文集などの成果刊行物として公刊する。また、日本語や言語類型論に関する国際会議を合同で誘致し、プロジェクト全体で日本語研究と国語研の国際化を推し進める。

対照言語学	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度
シンポジウム等	オノマトペ国際シンポジウム, NINJALフォーラム「オノマトペ」開催	「プロソディー」に関する国際ワークショップ開催	「プロソディー」「移動動詞」「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウム開催	「プロソディー」に関する国際ワークショップ開催, 国際認知言語学会共催		NINJALフォーラム開催, NINJALチュートリアル開催
刊行・出版		NINJALフォーラムの成果の刊行, 音声関係の啓蒙書刊行	論文集の編集作業	「プロソディー」「名詞修飾」「とりたて表現」に関する各研究論文集刊行	論文集の編集作業, 「移動表現」に関する研究論文集刊行	「動詞の意味構造」「移動動詞」に関する各研究論文集の刊行
データ		言語地図の作成				公開

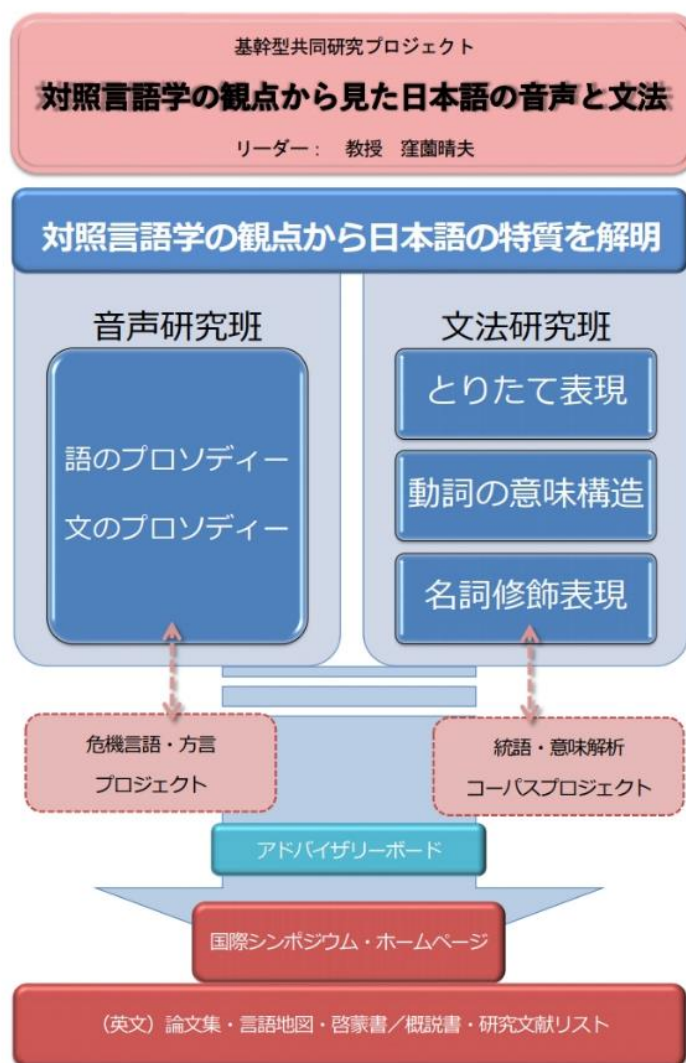
《研究組織》

リーダー：

- ・窪園晴夫

班リーダー：

- ・窪園晴夫（音声）
- ・野田尚史（とりたて表現）
- ・松本曜（動詞の意味構造）
- ・プラシャント・パルデシ（名詞修飾表現）



## ● 年次計画

### 平成 28 年度（研究プロジェクトの始動）

- ① 日英語によるプロジェクト HP を開設し、以後、随時更新する。
- ② 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員 (PD) 2 名に対して研究指導を行う。
- ③ 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
- ④ 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
- ⑤ NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese Korean Linguistics Conference (JK 24) (10 月 14 ~16 日) とオノマトペ国際シンポジウム (12 月 17~18 日) の 2 つを開催する。またその成果の取りまとめ (論文集の編集) に着手する。
- ⑥ オノマトペをテーマに一般社会向けの NINJAL フォーラムを開催する (平成 29 年 1 月 21 日)。
- ⑦ 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』, Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics の巻), The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
- ⑧ 言語地図の立案を開始する (項目・言語の選択, 刊行方法等)。
- ⑨ 大学院生向けのチュートリアル (国内) を開催する。
- ⑩ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

### 平成 29 年度（研究プロジェクトの展開）

- ① 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会特別研究員 (PD) 1 名に対して研究指導を行う。
- ② 研究班ごとに研究成果発表会を年数回開催する。
- ③ 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
- ④ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
- ⑤ Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics および Syntax の巻), Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
- ⑥ 前年度に開催した NINJAL 国際シンポジウム 2 件と NINJAL フォーラム 1 件の成果を取りまとめ、それぞれ論文集、啓蒙書として編集を行う。
- ⑦ 『移動表現の類型論 II (仮題)』の編集作業を行う。
- ⑧ 音声関係の啓蒙書を執筆する (1 冊目)。
- ⑨ 言語地図の作成を開始する。

### 平成 30 年度（研究成果の中間とりまとめ）

- ① 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
- ② 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
- ③ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 3) を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

- ④ 音声（プロソディー）と文法（移動動詞、動詞の意味構造）に関する国際シンポジウム・ワークショップをそれぞれ開催する。
- ⑤ 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際ワークショップの論文の編集を行い、出版社に入稿する（公刊は1年後）。また「とりたて表現（和文）」「移動表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各論文集の編集作業を進める（公刊は1年後の予定）。
- ⑥ 引き続き言語地図の作成用のデータ収集を行う。
- ⑦ 大学院生向けのチュートリアルを国内と海外でそれぞれ開催する。

#### 平成 31 年度（研究プロジェクトの拡充）

- ① 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
- ② 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
- ③ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 4) を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
- ④ 「プロソディー」に関する国際ワークショップを開催する。また、国際認知言語学会を共催する。
- ⑤ 前年度に開催した「移動動詞」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集（英文）として取りまとめる（公刊は 1～2 年後）。また「動詞の意味構造（和文）」に関する論文集の編集に着手する。
- ⑥ 「プロソディー（英文）」「とりたて表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各研究論文集を刊行する。
- ⑦ 引き続き言語地図の作成を行う。

#### 平成 32 年度（研究成果のとりまとめ）

- ① 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
- ② 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
- ③ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 5) を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
- ④ 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際ワークショップの成果を英文論文集として取りまとめる（公刊は 1～2 年後）。また「移動表現（和文）」に関する研究論文集を刊行し、「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」に関する各論文集の編集作業を完了する。
- ⑤ 言語地図の取りまとめを行う。

#### 平成 33 年度（研究成果の公刊）

- ① 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
- ② 一般社会向けの NINJAL フォーラム（第 2 回）を開催する。
- ③ 大学院生向けのチュートリアルを開催する。
- ④ 「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」の各論文集を刊行する。
- ⑤ 言語地図を公刊（公開）する。

#### 【3 年目までの成果物】 【編者】

- ① Sequential Voicing in Japanese Compounds (John Benjamins). 2016 年 6 月. [バンス]
- ② 赤瀬川 史朗, プラシャント・パルデシ, 今井 新悟 (著) 『日本語コーパス活用入門: NINJAL-LWP 実践ガイド』 (大修館). 2016 年 7 月. [パルデシ]

- ③ Mouton Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (De Gruyter Mouton). 2018年2月 [パルデン]
- ④ The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants (Oxford University Press). 2017年4月 [窪菌]
- ⑤ Tonal Change and Neutralization (De Gruyter Mouton). 2018年3月. [窪菌]
- ⑥ Japanese Korean Linguistics 24 (CSLI). 2018年 [船越・窪菌]
- ⑦ 『オノマトペの謎』2017年5月 [窪菌]
- ⑧ 音声関係の啓蒙書『通じない日本語』2017年12月 [窪菌]

**【5年目までの成果物】上記に加え次のものを刊行する。**

- ① 『日本語と世界の言語のとりたて表現』くろしお出版, 2019年 [野田]
- ② プロソディー関係の英文論文集 (The Linguistic Review 特集号), 2019年 [窪菌]
- ③ 名詞修飾関係の和文論文集, 2019年 [パルデン]
- ④ 『移動表現の類型論と第二言語習得』2019年 [松本]
- ⑤ Broader Perspectives on Motion Event Descriptions 2019~2020年 [松本]
- ⑥ 『動詞の意味と百科事典的知識 (仮題)』2021年 [松本]
- ⑦ Typology of Motion Event Descriptions 2021年 [松本]

## II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,500千円

### 30年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

対照言語学研究を推進するために、国内外の研究者13人を共同研究員として追加し、合計133人の組織で事業を遂行した。4つの研究班ごとの公開研究発表会を計11回（国内学会でのシンポジウム・ワークショップ4回を含む）、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 3)を1回、国際シンポジウム・ワークショップを3件開催した。これら15の企画において計129件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの23件）、計795名（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者30人、大学院生を含む学生153人）。

またプロジェクト全体で図書4冊、論文27編（ブックチャプター9編含む）、学術発表・講演94件（一般向け除く）を公開・刊行した（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。このうちプロジェクトの所内メンバーは4冊の図書（研究論文集2冊、教材2冊）、論文12編を刊行し、さらに5冊の研究論文集・概説書の編集を行った。

また韓国日本語学会・韓国日語教育学会と連携してNINJALチュートリアルをソウルで開催したほか、大学との組織的な連携を深めるために、神戸大学大学院人文学研究科と学術交流協定を締結した。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

通時コーパスプロジェクトと合同でNINJALシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研

究・通時的対照研究を中心に一」を開催したほか、国語研主催のNINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」においてワークショップ「多角的な視点から見た日本語のモダリティ」を企画した。

前年度に続き言語地図の作成に取り組み、29タイプの名詞修飾表現のアンケート調査に基づき現在10言語のデータを提供し、言語地図作成用のデータベースを設計・構築した。また、諸言語の移動動詞に関して1700件を超える文献の目録（英文）を作成し公開した。

この他、国際シンポジウムICPP 2018を開催するにあたってアドバイザーボードのメンバーに意見を求め、その意見をテーマと招待講演者の選定に活用した。

### 3. 教育に関する計画

NINJALチュートリアル「日本語複合動詞の意味論」を東京・一橋講堂と京都大学で実施し、大学院生を中心に合計66人の参加を得た。また韓国日本語学会および韓国日語教育学会と連携して、NINJALチュートリアル「日本語の音声と文法」(30年6月30日、7月1日)を韓国の中央大学校で開催し、大学院生30人を含む合計90人の参加を得た。

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、また学振PD1人を外来研究員、海外の大学院生1人を特別共同利用研究員としてそれぞれ受け入れ、研究指導を行った。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。

さらに大学院生6人、学振PD3人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内/国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ23人の大学院生(筆頭発表者)に発表の機会を与え、若手研究者13人に対して発表旅費を支援し、加えて計1名の若手研究者に対して方言調査の旅費を援助した。

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計8件、それ以外の講演を3件行った(プロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。このうち所内メンバーは鹿児島県薩摩川内市と連携し、同市の離島・甕島の1ヶ所で島民向けに、また島内の4中学校で中学生を対象にそれぞれ方言に関する講演を行い、また東京都杉並区、国立市、九州グローバル人材活用促進協議会、鹿児島県女性教員管理職の会、京都市中京歯科医師会等からの依頼を受け、それぞれ日本語に関する講演を行った。

社会人の学び直しとして、ソウルの中央大学校で開催したNINJALチュートリアルにおいて、60人の社会人(主に現地日本語教師)に対して「日本語の音声と文法」の講義を行い、また東京と京都の2ヶ所で実施したNINJALチュートリアル「日本語複合動詞の意味論」では受講生のうち25人が社会人であった。この他に現役教師を対象とする講演をプロジェクト全体で21件(うち所内メンバーが19件)を行った。

### 5. グローバル化に関する計画

プロジェクトの所内メンバーが1冊の英文研究論文集(特集号)を刊行し、対照研究の成果を海外に向けて発信した(Haruo Kubozono (ed.) Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean, 国際誌The Linguistic Review Vol. 36, No. 1)。また国内外において合計11件のイベント(国内3件、海外8件)を開催し、合計684人の参加を得た。このうち国内ではInternational Workshop on Frame Semantics and FrameNet(慶應義塾大学)、International Conference on Phonetics and Phonology(国語研)、Motion

Event Descriptions across Languages (国語研) の3件の国際イベントを開催し、海外ではNINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」(韓国中央大学校) と計7回の「日本語学講習会」(ベトナム, スリランカ, インド, ミャンマー, カンボジアの5ヶ国) を開催した。また人的交流として海外の研究者2人を外来研究員として、大学院生1人を特別共同利用研究員として受け入れた。

加えてプロジェクト全体では40件、国際会議で研究成果を発表した。このうち所内メンバーは国際会議 The 26th Japanese/Korean Linguistics (UCLA), The 7th International Conference on Phonology and Morphology (ソウル大学), 北京日本語研究センター公開講座, 北京大学創立120周年記念国際シンポジウムにおいてそれぞれ招待講演・基調講演を行った。

## 6. その他

該当する活動なし。

## III. 項目ごとの状況

### 1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
<p>1. 対照言語学研究を推進するために、4つの研究班(下記)ごとの公開研究発表会を計7回、国内学会においてシンポジウム・ワークショップを4回、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 3)を1回、国際シンポジウム・ワークショップを3回開催した。これら計15件の企画において計129件の研究発表が行われ(うち学生が筆頭発表者のもの23件)、計795名(延べ)の参加者が得られた(うち海外機関研究者30人、大学院生を含む学生153人)。</p>	
<p>① このうち、班ごとの研究発表会および国内学会シンポジウム・ワークショップ計11回の内訳は音声研究班が5回(平成30年6月9日, 9月17日, 11月18日, 平成31年2月28日, 3月5日)、とりたて班が1回(平成30年6月9日)、動詞の意味構造班(以下「意味構造班」)が3回(平成30年6月9日, 9月22日, 11月18日)、名詞修飾班が2回(平成30年7月21日, 11月10日)であった。これらの発表会に合計478人の参加が得られた(うち海外機関研究者4人、大学院生を含む学生74人)。発表数は合計44件であった。(国内学会シンポジウム・ワークショップの詳細については下記2を参照)</p>	
<p>② プロジェクト全体の統合を図るために、平成31年2月16-17日に、2つの公募型共同研究プロジェクト(「日本語から生成文法理論へ: 統語理論と言語獲得」「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」)も加えた合同の研究発表会(Prosody and Grammar Festa 3)を開催し、131人の参加者を得た(うち海外機関研究者1人、大学生を含む学生27人)。この合同発表会では「日本語と言語類型論」と題するシンポジウム(発表6件)と9件の口頭発表により、対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。</p>	
<p>③ 国際シンポジウム等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ The 5<sup>th</sup> International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2018)を開催した(国語研, 平成30年10月26-28日)。また前日の10月25日に pre-ICPP colloquium を開催した。参加者は異なりで119人(うち海外機関研究者19人)、発表件数は36件(口頭14件, ポスター発表22件; う</li> </ul>	

ち海外機関研究者による発表 16 件，学生が筆頭発表者の発表 20 件）であった〔音声研究班〕。

・ International Workshop on Frame Semantics and FrameNet を開催した（慶應義塾大学，平成 30 年 5 月 8 日）。参加者は 17 人（うち海外機関研究者 2 人），発表件数は 3 件（うち海外機関研究者による発表 2 件）であった〔意味構造班〕。

・ Motion Event Descriptions across Languages を開催した（国語研，平成 31 年 1 月 26-27 日）。参加者は 50 人（うち海外機関研究者 4 人），発表件数は 31 件（口頭 26 件，ポスター発表 5 件；うち海外機関研究者による発表 4 件，学生が筆頭発表者の発表 1 件）であった〔意味構造班〕。

2. 国内学会において下記の 4 つのシンポジウム・ワークショップを企画した。

① 関西言語学会第 43 回大会（平成 30 年 6 月 9-10 日，甲南大学）において，シンポジウム「文構造の核と周辺—従属節のタイポロジー—」を企画・開催した。参加者は 155 人であった〔とりたて班〕。

② 同上学会においてワークショップ「日英語の移動表現における経路表示の多様性と第二言語習得」を企画・開催した。参加者は 52 人であった〔意味構造班〕。

③ 日本言語学会第 157 回大会（平成 30 年 11 月 17-18 日，京都大学）において「日本語の呼びかけイントネーション」と題するワークショップを企画・開催した。参加者は 49 人であった〔音声研究班〕。

④ 同上学会においてワークショップ「移動経路の種類とそのコード化：通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」を企画・開催した。参加者は 43 人であった〔意味構造班〕。

3. プロジェクトの所内メンバーが合計 4 冊の書籍（研究論文集 2 冊，教科書 2 冊）を刊行し，さらに 5 冊の研究論文集・概説書の編集を行った。

① 音声研究班は前年度に開催した国際ワークショップの成果の編集を進め，国際誌 *The Linguistic Review* Vol. 36, No. 1 (De Gruyter Mouton 社)の特集号 Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean (H. Kubozono ed.) を当初の予定より半年早く刊行した（平成 31 年 2 月刊）。また，くろしお出版より『鹿児島県甑島方言から見る文法の諸相』（窪菌晴夫，木部暢子，高木千恵共編，計 304 頁，平成 31 年 2 月刊）を出版した。さらに言語学の概説書『よくわかる言語学』（ミネルヴァ書房）の編集を進めた（平成 31 年 3 月入稿，平成 31 年 7 月刊行予定）。

② とりたて班は論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』（野田尚史編，くろしお出版）の編集を進めた（平成 31 年 3 月入稿，平成 31 年 10 月刊行予定）。

③ 意味構造班は，*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*（John Benjamins 社から平成 31 年度出版予定）の編集を行った。また『移動表現の類型論と第二言語習得』（くろしお出版から平成 32 年出版予定）の原稿執筆を進めた。

④ 名詞修飾班は対照言語学的視点による日本語学習教材 Minna no Nihongo prathamik bhag I: bhashantar wa vyakaran (Marathi edition of ‘Minna no Nihongo, Shokyuu I: Translation & Grammatical Notes’ by 3A Corporation, Tokyo) と Minna no Nihongo prathamik bhag II: bhashantar wa vyakaran (Marathi edition of ‘Minna no Nihongo, Shokyuu II: Translation & Grammatical Notes) (Pardeshi et al. eds.) を平成 30 年 12 月にインドの Sachi Prakashan から出版し，また論文集『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデシ・ブラシャント，堀江薫 編，ひつじ書房）の編集を進めた（平成 31 年 10 月入稿，平成 32 年 3 月刊行予定）。

4. プロジェクト全体

プロジェクト共同研究員の研究成果も含め，プロジェクト全体で図書 4 冊と論文 27 編（ブックチャプ

ター含む)を刊行し、発表・講演を94件行った(いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。

#### 5. 方言調査

- ・音声研究班ではプロソディーの対照研究を推進するために平成30年6月に宮崎県小林市で、同年8月と平成31年3月に鹿児島県薩摩川内市で、平成30年9月と12月に鹿児島県甕島でそれぞれプロソディー調査を行った。
- ・名詞修飾班は平成30年12月にインド・プネーで名詞修飾表現に関する調査を行った。

6. 音声研究班が平成29年4月に刊行した *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Haruo Kubozono ed., Oxford University Press)は、国際誌 *Phonology* (Cambridge University Press)5巻の書評欄 (pp.523-529)において”The book is excellent… the papers here are of high quality, and most of them could be published in excellent linguistics journals…The underlying theoretical issues at play here make it a worthwhile read for anybody concerned with the structure of, and relationship between, phonetics and phonology” (by Professor Jonah Katz, West Virginia University) と評された。

#### (2) 研究実施体制等に関する計画

1. 韓国日本語学会および韓国日語教育学会と連携し、NINJAL チュートリアルをソウルで開催した (詳細は「3. 教育に関する計画」(2)-5参照)。また国語研と韓国の両学会との学术交流協定締結に尽力した (平成30年7月に締結)。
2. 神戸大学大学院人文学研究科と対照言語学・理論言語学をテーマにした学术交流協定を締結した (平成31年3月25日)。
3. 対照言語学研究を実施するために、国内外の研究者13人を共同研究員として追加し、合計133人の組織でプロジェクトの事業を遂行した (うち大学院生6人、海外研究機関に属する研究者16人)。また海外から2人 (ともに米国) を、国内から1人の研究者を外来研究員として受け入れ共同研究を行い、1人の大学院生 (オランダ) を特別共同利用研究員として受け入れ、研究指導を行った。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</b>	
1. 言語地図 [名詞修飾班] 平成30年10月に29タイプの名詞修飾表現のアンケート作業を完了し、12月現在10言語のデータを提供している。平成31年1~3月に言語地図作成用のデータベースを設計し構築した。	
2. 文献目録 [意味構造班] 諸言語の移動動詞に関して1700件を超える文献の目録 (英文) を作成し、平成30年12月に公開した。	
3. 音声研究班が平成28年度に公開した甕島アクセントデータベースは、方言アクセントの研究に使用されており、年間550件のアクセスがあった。	
<b>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</b>	
1. 国語研主催のNINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」(平成30年12月15-16日)においてプロジェクト紹介を行い、またワークショップ「多角的な視点から見た日本語のモダリティ」を企画し	

た。

- とりたて班は通時コーパスプロジェクトと合同でNINJAL シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」(平成 31 年 1 月 13 日)を開催した。参加者は 98 人(うち海外機関研究者 2 人)、発表件数は 7 件(いずれも口頭発表)であった。
- 音声研究班は国際シンポジウム ICPP 2018(平成 30 年 10 月 26-28 日)の立案に際し、テーマの設定および講演者の選定についてアドバイザーボードの意見を求め、それを活用した。

### 3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b>	
1. オランダのユトレヒト大学より大学院生(博士課程)1人を特別共同利用研究員として受け入れ、実験の支援と研究指導を行った。	
<b>(2) 人材育成に関する計画</b>	
1. 若手研究者を育成するために、PD フェローを 2 人、非常勤研究員を 6 人雇用した。	
2. 大学院生 6 人、学振 PD3 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。	
3. プロジェクトが企画したイベント(研究発表会、シンポジウム・ワークショップ他)において合計 23 人の大学院生(筆頭発表者)に発表の機会を提供した。	
4. 若手研究者 1 人に対して調査旅費を、13 人に成果発表の旅費を支援した。	
5. NINJAL チュートリアル「日本語複合動詞の意味論」を東京・一橋講堂(平成 30 年 8 月 9 日)と京都大学(30 年 9 月 18 日)で実施し、大学院生を中心に合計 66 人(8 月 35 人、9 月 31 人)の参加を得た。また韓国日本語学会および韓国日語教育学会と連携し、NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」(平成 30 年 6 月 30 日、7 月 1 日)を韓国の中央大学校で開催し、対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法について窪菌と野田が各 4 コマ(90 分 x 4 コマ)の講義を行った。大学院生 30 人を含む合計 90 人の参加を得た。	
6. 外来研究員として受け入れた富岡諭氏(米国デラウェア大学)に依頼して「Scalar Implicature」と題する講習会を実施した(平成 30 年 7 月 4 日)。大学院生を中心に 41 人の参加者があった。	
7. Leonard Talmy 氏(ニューヨーク州立大学)を招いて、「標的設定のシステム:直示と照応の統合」と題する特別講義を実施した(平成 31 年 3 月 22-23 日)。大学院生 11 名を含む 37 名の参加者があった。	

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b>	
1. プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を 8 件行った(プロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。所内メンバーの主な実績は次のとおりである。	
・鹿児島県薩摩川内市と甕島方言の保存・調査・啓蒙活動について連携を深め、島内の中学校(全 4 校)において「甕島方言の大切さ」と題する講演を行った。また同市の甕島ツーリズム委員会の会合におい	

て「方言とツーリズム」と題する講演を行った〔音声研究班〕。

- ・東京都杉並区（すぎなみ大人塾）と国立市（図書館のつどい）からそれぞれ依頼を受け、日本語のオノマトペと言葉の地域差・世代差について講演を行った〔音声研究班〕。
- ・九州グローバル人材活用促進協議会から依頼を受け、Work in Kyushu シンポジウム「グローバル人材の採用・就職に求められる日本語のちから」において、基調講演「グローバル人材の日本語能力」を行った〔とりたて班〕。

## （２）研究成果の社会への普及に関する計画

1. 上記１の社会連携による講演および下記５の現役教師向けの講演とは別に、プロジェクト全体で一般社会人向け講演を３件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。いずれも所内メンバーによる講演である（鹿児島県女性教員管理職研修会（「方言とコミュニケーション」）、京都市中京歯科医師会（「日本語のオノマトペ」）、大学共同利用機関シンポジウム 2018（「日本語の多様性」）〔音声研究班〕。
2. 「ニホンゴ探検 2018」（平成 30 年 7 月 14 日）において、『「コップ、それともカップ」 単語の意味について考える」と題して、意味論と言語対照について小学生向けに講義を行った〔意味構造班〕。
3. NINJAL チュートリアル
  - ・NINJAL チュートリアル「日本語複合動詞の意味論」を東京と京都で開催した（詳細については「３．教育に関する計画」（２）-5 参照）。66 人の参加者のうち、25 人が社会人であった〔意味構造班〕。
  - ・NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を韓国・中央大学校で開催した（詳細については「３．教育に関する計画」（２）-5 参照）。90 人の参加者のうち、60 人が現地の高校・大学の日本語教師であった〔音声研究班、とりたて班〕。
4. 現役教師向け講演会等  
上記 1～3 の講演とは別に、現役教師の学び直しのための講演・講習をプロジェクト全体で 21 件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。所内メンバーの主な業績は次のとおりである。
  - ・講演「日本語母方言から始める英語教育」（東京言語研究所主催『教師のためのことばワークショップ』、「オノマトペの謎」（名古屋 YWCA）〔音声研究班〕。
  - ・講演「さまざまな日本語を分析する」（長沼スクール東京日本語学校、日本語教師夏期集中セミナー）〔とりたて班〕。
  - ・東南・南アジア 5 ヶ国計 7 ヶ所で開催した日本語学講習会では受講者の中に日本語教師が多数含まれていた（詳細については「５．その他：グローバル化（２）-1-⑤」参照）〔名詞修飾班〕。

## ５．その他の目標を達成するための措置

### （１）グローバル化に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
<b>（１）国際的協業に関する計画</b>	
1. 海外の研究者 2 人（ともに米国）を外来研究員として、またオランダの大学院生 1 人を特別共同利用研究員として受け入れた。	
<b>（２）国際的発信に関する計画</b>	
1. 下記の 11 件の国際イベントを開催し（①～③国内で開催、④～⑤は海外で開催）、合計 684 人の参加者	

を得た。

- ① ICPP 2018 (International Conference on Phonetics and Phonology)およびPre-ICPP colloquium (国語研)を平成30年10月25-28日に開催した〔音声研究班〕(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。
- ② International Workshop on Frame Semantics and FrameNet を開催した〔意味構造班〕(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。
- ③ Motion Event Descriptions across Languages を開催した(国語研,平成31年1月26-27日)〔意味構造班〕(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。
- ④ NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を韓国中央大学校で開催し, NINJAL チュートリアルの国際展開を図った〔音声研究班, とりたて班〕(詳細については「3. 教育に関する計画」(2)-5参照)。
- ⑤ 海外の日本語研究者(日本語教師・日本語学習者を含む)向けのNINJAL 日本語学講習会を以下の5ヶ国,計7ヶ所で開催し,合計408名の参加者を得て研究成果の国際発信を図った〔名詞修飾班〕。
  - ・ベトナム:ベトナム国家大学ハノイ校,日越大学(平成30年8月11-12日,参加者数:36名);ベトナム国家大学HCM 人文社会科学大学(平成30年8月14-15日,参加者数:50名)。
  - ・スリランカ:交流協定を締結しているケラニア大学(平成30年9月9日,参加者数:76名);ペラデニア大学(平成30年9月11日,参加者数:50名)。
  - ・インド:交流協定を締結しているTMV 大学日本語学科および現地の日本語機関と共催, Maharatta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture (平成30年12月22-23日,参加者数:106名)。
  - ・ミャンマー:セドナ ホテル ヤンゴン(平成31年2月23日,参加者数:56名)。
  - ・カンボジア:プノンペン大学(平成31年3月16-17日,参加者数:34名)。

## 2. 国際出版

プロジェクトの所内メンバーが1冊の英文研究論文集(*The Linguistic Review* 36-1, De Gruyter Mouton 社の特集号 *Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean*)を計画より半年早く刊行し,また対照言語学的視点による日本語学習教材(*Minna no Nihongo prathamik bhag I & II: bhashantar wa vyakarana*)を2冊(I&II),インドの Sachi Prakashan から出版した。さらに英文研究論文集(*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, John Benjamins)の編集を行った(詳しくは「1. 研究に関する計画」(1)-3参照)。また同じく所内メンバーが9編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表した。

## 3. 国際発表

共同研究員を含めたプロジェクト全体で40件,国際会議で成果発表を行った(プロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。所内メンバーの主な業績は次のとおりである。

- ・国際会議 The 26<sup>th</sup> Japanese/Korean Linguistics (UCLA) と The 7th International Conference on Phonology and Morphology (ソウル大学)においてそれぞれ基調講演を行った〔音声研究班(窪菌)〕。
- ・北京日本学研究中心公開講座と北京大学創立120周年記念国際シンポジウムにおいてそれぞれ講演を行った〔とりたて班(野田)〕。

## 4. 文献目録(英語)の公開

移動動詞に関する文献目録(英文)を公開した(「2. 共同利用・共同研究に関する計画(1)-2」参照)。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

国内において国際シンポジウムを3回開催したのに加え、海外において日本語学チュートリアル（韓国）を1回、日本語学講習会をベトナム、スリランカ、インド、ミャンマー、カンボジアの5ヶ国で計7回開催した。これらの11の国際企画において計684人の参加者を得た。いずれも計画を大きく上回る成果である。

また前年度に開催した国際ワークショップの成果を国際誌の *The Linguistic Review* (De Gruyter Mouton) の特集号として編集し、当初の計画 (H31年夏) より半年早く刊行したのに加え、対照言語学的視点による日本語学習教材2冊 (*Minna no Nihongo prathamik bhag I & II: bhashantar wa vyakarana*) をインドの Sachi Prakashan から出版した。また同じく所内メンバーが9編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表した。いずれも計画を大きく上回る成果（もしくは当初の計画になかった成果）である。

## 6. その他

該当する活動なし。

## 平成30年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

本プロジェクトは、日本語の研究に基づいて一般言語学・言語類型論研究に貢献する「内から外を見る」視点と、一般言語学・言語類型論研究の観点から日本語の分析を考える「外から内を見る」視点の両方を重要視する。その結果、国際的な評価を受ける研究を行うとともに、その研究内容を書籍にまとめている。研究の刊行および啓蒙活動ともに、全体的に、計画を上回る成果を上げていると評価できる。

### 《各項目別》

#### 1. 研究について

研究発表会や国際シンポジウムの開催も積極的に行なわれており、研究成果の刊行についても順調である。独立で研究発表会を開催するだけでなく、学会の定期大会においてもシンポジウムやワークショップが行われており、より広範囲の参加者を得ることに成功している。研究論文集や概説書などの書籍も続々と出版されており、研究の実施状況は計画を大きく上回っている。方言調査や研究実施体制の整備も順調に行なわれている。

#### 2. 共同利用・共同研究について

言語地図作成のためのデータが収集されたのは計画通りであるが、計画を上回って、実際にデータベースが構築された。移動動詞に関する文献目録も公開され、平成28年度に作成された方言ア

クセントデータベースについても、十分アクセスされ、広く活用されていることが示された。共同利用・共同研究についても、計画を上回って実施されたとみなされる。

### 3. 教育について

連携大学院以外にも、当研究グループでは、着実に大学院生や若手研究者を受け入れ、積極的に発表の機会を提供し、旅費の補助も行なっている。また、国内外でのチュートリアルや、海外から講師を招いての講習会にも、数多くの参加者を得ている。国内の大学の機能強化に対して、大きな貢献をしていると言えよう。教育に関する実施状況についても、積極的な評価に値する。

### 4. 社会との連携及び社会貢献について

当初の計画を上回り、地域社会と連携した講演が8件行なわれた。また、一般社会人向け講演や小学生向けの講義、NINJALのチュートリアルも行なわれた。特に注目されるのは、現役教師の学び直しのための講演・講習21件である。いずれも、研究成果の教育的普及に大きく貢献したと考えられる。

### 5. グローバル化について

海外研究者の受け入れも順調であり、国際イベントも多数開催された。また、海外のジャーナルや英文の研究論文集・国際会議においても、多数の研究が発表された。移動動詞に関する文献目録も英語で公開されている。海外の大学との提携こそ進まなかったが、海外の大学における講演も多く、グローバル化に関する実施状況は順調であると認められる。

### 6. その他特記事項

特になし。

# 統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究

## プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

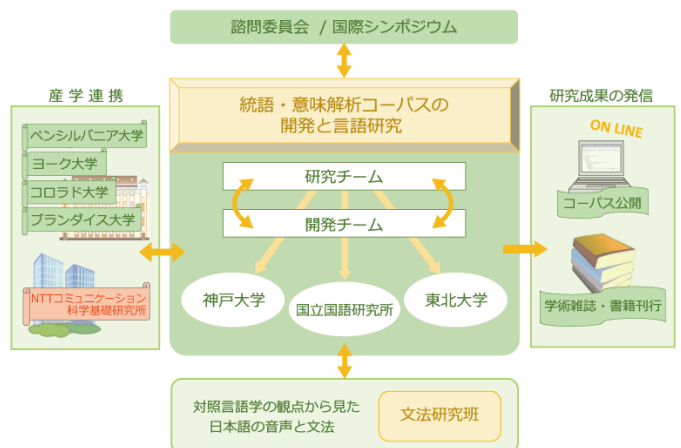
### I. プロジェクトの概要

#### 1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用推進の一環として、最終年度までに5~6 万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインタフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、右図に示すように、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。



#### 2. 年次計画（ロードマップ）

##### ● 全体計画

- ・コーパス開発：6年間で5~6 万文規模の統語・意味解析コーパスを完成させ、一般公開する。
- ・日本語に堪能でない海外の研究者も本コーパスを利用できるようにローマ字版も提供する。
- ・コーパス使用の利便性を図るために複数の検索ツール（インタフェース）を提供する。

・統語・意味解析コーパスに基づく研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

● 年次計画

**平成 28 年度：研究プロジェクトの始動（1 年目）**

- ① プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回、国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
- ⑦ インターネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
- ⑧ 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
- ⑨ 日英版のユーザーフレンドリーなインタフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1 万文）。
- ⑩ 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
- ⑪ 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

**平成 29 年度：研究プロジェクトの推進（2 年目）**

- ① プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) を企画し、実施する。研究成果の編集を開始する。
- ⑦ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 2 万文のデータを公開する。
- ⑧ 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
- ⑨ 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

**平成 30 年度：研究成果の中間とりまとめ（3 年目）**

- ① プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。

- ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計3万文のデータを公開する。
- ⑦ 大学院生向けの統語コーパス利用講習会(チュートリアル)を2回開催する(内一回はNINJALチュートリアル)。
- ⑧ アノテーションマニュアル試作版作成・ウェブ公開する。
- ⑨ インタフェースの開発・改良を続行する。
- ⑩ 国際シンポジウム(Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing)の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経た後に、海外の定評のある研究雑誌LILT(LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY)に提出する。
- ⑪ 日本語の統語論の教育に特化したExploring Japanese Syntax(仮題)を執筆し、この教材の練習問題をNPCMJコーパスを利用して解くための仕組みを模索する。
- ⑫ 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究(宮田Susanne教授との共同研究)を開始する。
- ⑬ 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究(宮田Susanne教授との共同研究)を開始する。
- ⑭ 日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究:複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
- ⑮ 2013年12月に開催したNINJAL国際シンポジウムMYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGESの研究成果をとりまとめ、論文集を編集する。
- ⑯ 2016年12月に開催したNINJAL国際シンポジウムMimetics in Japanese and other language of the worldの研究成果をとりまとめ、論文集を編集する。

#### 平成31年度:研究プロジェクトの拡充(4年目)

- ① プロジェクトHP(日英版)を開設・公開し、随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環としてPDフェローを雇用し、研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計4万文のデータを公開する。
- ⑦ 大学院生向けの統語コーパス利用講習会(チュートリアル)を開催。
- ⑧ 日本語の統語論の教育に特化したExploring Japanese Syntax(仮題)を刊行し、併せて、この教材の

練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みも公開する。

- ⑨ アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
- ⑩ 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究(宮田 Susanne 教授との共同研究)を継続し、CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携してデータを公開する。
- ⑪ 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究(宮田 Susanne 教授との共同研究)を継続する。
- ⑫ インタフェースの開発・改良を続行する。
- ⑬ 岡山大学(竹内研究室)と連携し、述語構造シソーラス(Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT))で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
- ⑭ 2013年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を完了・出版社(Oxford Univ. Press)に入稿する(刊行時期は出版社の都合によるもの)。
- ⑮ 2016年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を出版社(John Benjamins)に入稿する。(刊行時期は出版社の都合によるもの)。
- ⑯ 2017年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを完了し、海外の定評のある研究雑誌 LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY)に提出する。
- ⑰ 日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究:複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

#### 平成 32 年度：研究成果のとりまとめ（5年目）

- ① プロジェクト HP (日英版) を開設・公開し、随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 5 万文のデータを公開する。
- ⑦ 大学院生向けの統語コーパス利用講習会(チュートリアル)を開催する。
- ⑧ アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
- ⑨ インタフェースの開発・改良を続行する。
- ⑩ 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開(宮田 Susanne 教授との共同研究)
- ⑪ 述語と機能語に対して詳細な形態論情報の付与されたデータを公開(宮田 Susanne 教授との共同研究)
- ⑫ 岡山大学(竹内研究室)と連携し、述語構造シソーラス(Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT))で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。

- ⑬ 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し，「文型バンク」の開発・公開を進める。

#### 平成 33 年度：研究成果の公開（6 年目）

- ① プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し，随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し，研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し，アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し，若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し，合計 6 万文のデータを公開する。
- ⑦ 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
- ⑧ アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
- ⑨ 岡山大学（竹内研究室）と連携し，述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
- ⑩ 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
- ⑪ 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し，「文型バンク」の開発・公開を進める。

#### 【3 年までの成果物】

- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3 万文）を初心者から上級者まで様々な利用が可能な各種検索インタフェースと共に公開。

#### 【5 年までの成果物】

- ・ 海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：（NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing）の研究成果（LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY)）。
- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（5 万文）を初心者から上級者まで様々な利用が可能な各種検索インタフェースと共に公開。
- ・ 日本語の統語論の教育に特化した入門書 Exploring Japanese Syntax（仮題）の刊行
- ・ NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果（論文集）の刊行（Oxford Univ. Press）
- ・ NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果（論文集）の刊行（John Benjamins）

・日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し開発した「文型バンク」（ウェブ版）。

## 6年間のロードマップ

統語コーパス	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度
データ	<b>統語・意味解析コーパス(NPCMJ)を毎年1万文(計6万文)作成および一般公開</b>					
シンポジウム等	国内外の学会で研究発表	国際シンポジウム開催，国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表
	毎年2回公開研究発表会開催					
講習会等	毎年2回統語コーパス利用講習会					
刊行・出版			国際シンポジウムの成果を刊行，アノテーションマニュアル試作版作成	アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	啓蒙書・普及書を刊行，アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開

## II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,500千円

### 30年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために，プロジェクト共同研究者42人（アドバイザーを含む，うちPDフェロー1名，大学院生4名）の組織でコーパス開発とコーパスに基づく言語研究を遂行した。公開研究発表会を計2回開催し，さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回，企画・開催し，国内外で個別発表も行った。これらの企画において計26件の研究発表が行われた。

また，国外から刊行予定の①NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing, ② NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, ③ NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の3つの研究成果のとりまとめ，編集作業を行った。さらに，日本語統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) の執筆（岸本著）が終了し，この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解

くための仕組み（試作版）の構想を固めた（開発は来年度の予定）。

加えて、共同研究者の宮田 Susanne 教授の主導する CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携し、① 日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究、② CHILDES の仕組みを利用した NPCMJ に対する精密な形態論情報付与に関する研究を開始した。① の具体例として、大久保 (1967) のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた（来年度公開予定）。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

国内外の主要研究者から成るアドバイザーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。共同利用の推進のために、コーパスの構築の面において、NPCMJ コーパスに新たなデータ 1 万文を追加し、総データ量を 3 万文に増やし、公開した。また、コーパスの利用を推進するために NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で 3 回開催した（うち 2 回は NINJAL チュートリアル）。これらの講習会に 54 名の参加者（うち大学院生を含む学生 24 人）。さらに、日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進めた。初級の文型 200 件を格納し、インタフェースとともに公開した。大久保 (1967) のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた（来年度公開予定）。

## 3. 教育に関する計画

PD フェロー一人、および大学院生 4 名を非常勤研究員として雇用し、アノテーション作業や共同研究における発表の機会を提供することによって若手研究者を育成した。また、研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。プロジェクト非常勤研究員 2 名が九州大学（伊都キャンパス）で NPCMJ コーパスに関する集中講義（15 コマ分）を行った。さらに、統語コーパス利用講習会を 3 回開催し、コーパス利用に関するノーハウを提供した。

## 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インタフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。

## 5. グローバル化に関する計画

国際シンポジウム 3 件 (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing, MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, Mimetics in Japanese and other language of the world) の研究成果の編集作業を進めた。国際会議において研究成果を 3 件発表した。また、日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) の執筆を完了させ、出版社に入稿した（来年度刊行予定）。加えて、NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インタフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の 2 言語で作成され

ている。

## 6. その他

該当する活動なし。

## Ⅲ. 項目ごとの状況

### 1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、研究発表会を2回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回、企画・開催した。<ul style="list-style-type: none"><li>● 研究発表会</li><li>① 第1回研究発表会（平成30年6月22日、岡山大学 津島キャンパス工学部（参加者数8人、うち大学院生を含む学生1人）。</li><li>② 第2回研究発表会（平成31年1月27日、東北大学（参加者数16人、うち大学院生を含む学生0人）。</li><li>● 学会におけるワークショップ、シンポジウム</li><li>③ The English Linguistic Society of Japan 11th International Spring Forum, Hokkaido University. 2018年5月13日を企画・実施（発表の詳細は以下3.の⑬～⑯を参照）</li><li>④ 日本英語学会第36回大会シンポジウム「ツリーバンク開発と言語理論」（平成30年11月25日）横浜国立大学（参加者数24人）。</li></ul></li><li>2. 検索インタフェースのマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版を作成し、プロジェクトのホームページで公開した。</li><li>3. NPCMJ コーパスに基づく研究の成果として、国際学会および国内学会において計21件の発表を行った。また、論文5件を発表した。<ul style="list-style-type: none"><li>● 国際学会での成果発表：口頭発表及びポスター発表3件</li><li>● 国内学会での成果発表：口頭発表18件</li><li>● 論文刊行：5件</li></ul></li><li>4. H29年度に開催した国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを実施した。ほぼすべての論文について加筆・修正が必要との評価があり、2019年3月末までに改訂版を提出することを求めることになった。LILT への提出は来年度へ持ち越すこととなる。</li><li>5. MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を続行し、来年度中に出版社に提出する予定である。</li><li>6. 2016年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を編集し、出版社（John Benjamins）に入稿した。</li><li>7. 日本語統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax（仮題）の執筆が終了し、この教材の練習問題とそれらを NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みの試作版の構想を固めた。開発は来年度に</li></ol>	

なる。

## (2) 研究実施体制等に関する計画

1. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、8名のプロジェクト共同研究員（うちPDフェロー1名、大学院生4名）体制でコーパス開発と共同研究を推進した。
2. 本年は宮田 Susanne 教授を通じて、CHILDES と連携を深めることに専念した。この連携により、NPCMJ コーパスに対する精密な形態論情報付加を行う見通しがたった。また、大久保（1967）による国立国語研究所での研究成果（第一言語習得データ）にアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた。
3. 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、インタフェースの改良に関する研究を行い、パターンブラウザの試作版を公開した。さらに、上述の日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax（仮題）という教材の練習問題の作成および NPCMJ コーパスで解くための仕組みの試作版の構想を固めた。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<h3>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</h3> <ol style="list-style-type: none"><li>1. NPCMJ コーパスに新たなデータ 1 万文を追加し、総データ量を 3 万文に増やした。</li><li>2. NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で 3 回開催した（うち 2 回は NINJAL チュートリアル）。<ol style="list-style-type: none"><li>① 統語・意味解析コーパス (NPCMJ) 講習会 (NINJAL チュートリアル), 2019 年 1 月 26 日, 東北大学川内北キャンパス (参加者数 31 人, うち大学院生を含む学生 14 人)</li><li>② 統語・意味解析コーパス (NPCMJ) 講習会 (NINJAL チュートリアル), 2018 年 10 月 15 日, 福岡リファレンス駅東ビル (参加者数 14 人, うち大学院生を含む学生 5 人)</li><li>③ 統語・意味解析コーパス (NPCMJ) 講習会, 2018 年 6 月 21 日, 岡山大学津島キャンパス情報工学科 (参加者数 9 人, うち大学院生を含む学生 5 人)</li></ol></li><li>3. 日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ), 科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進めた。初級の文型 200 件を格納し、インタフェースとともに公開した。</li></ol> <h3>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</h3> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 国内外の主要研究者から成るアドバイザーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。詳細は以下の 3 を参照。</li><li>2. 国語研究所主催の NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」において発表を行った。</li><li>3. 新規共同研究として、宮田 Susanne 教授の主導する CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携し、① 日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究、② CHILDES の仕組みを利用した NPCMJ に対する精密な形態論情報付与に関する研究を開始した。また、③大久保（1967）による国立国語研究所での研究成果にアノテーションを付与し、CHILDES</li></ol>	

で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた。

### 3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b>	
<b>(2) 人材育成に関する計画</b>	
1. PD フェロー一人、および非常勤研究員を雇用し、アノテーション作業や共同研究を通じて若手研究者を育成した。	
2. 大学院生 4 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、公開研究会において、大学院生に発表の機会を提供した。	
3. 研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。	
4. 統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究を推進するために、統語コーパス利用講習会を 3 回開催した。(詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」(1) 2 の実施状況を参照)	

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b>	
<b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b>	
1. NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インタフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。	

### 5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 国際的協業に関する計画</b>	
1. スロベニア大学の研究者を 1 名外来研究員として受け入れた。	
<b>(2) 国際的発信に関する計画</b>	
1. 協定を締結した各大学の研究者と論文集の編集作業を進めた。	
2. 2017 年度に開催した国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果を論集としてとりまとめるための編集作業を進めた。査読結果ではほとんどの論文が加筆・修正が必要と評価され、現在著者による修正が行われている。来年度早々にこの作業を終え、Linguistic Issues in Language Technology (LiLT) に提出する予定である。また、日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) の執筆が完了し、出版社に入稿	

した。来年度刊行予定。加えて、2013年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を進め、今年度中の出版社への入稿を目指している。また、2016年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を出版社（John Benjamins）に入稿した。（刊行時期は出版社の都合によるもの）。

3. NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インタフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の2言語で作成されている。
4. 国際会議において研究成果を3件発表した。

## 6. その他

該当する活動なし。

## 平成30年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

研究プロジェクト実施の基盤となる日本語の統語・意味コーパス(NPCMJ コーパス)の開発は予定通り進展しており、1万文のアノテーション付きデータが追加された。統語情報に加えて意味情報を付するコーパスは世界的にも希少であり、コーパス言語学の展開への貢献が期待できる。コーパスを利用した研究成果としては国内外での学会発表21件、論文刊行5編に加えて、国際シンポジウムの成果をまとめた出版が3件進められている。また、言語学者の利用を想定したコーパス検索インタフェースのマニュアル作成と合わせて、国内学会および国語研究所主催の研究会・ワークショップ・シンポジウムを開催し、NPCMJ コーパスを利用した研究の拡大・促進を図っている。コーパスの普及を目的とした講習会/チュートリアルを3回開催するとともに、一般人を対象とした検索インタフェース・利用マニュアルの作成、ローマ字化および英語による検索インタフェース公開による国際的な利用促進も図っている。一方で、自然言語処理分野では大量の言語データと機械学習を利用した研究と応用が急速に進展・普及しており、今後はそれらとの連携の強化が望まれる。全体として、プロジェクトの研究は順調に進展していると判断できる。

### 《評価項目》

#### 1. 研究について

日本語の統語・意味コーパス(NPCMJ コーパス)の開発は予定通り進展しており、着実にアノテーション付きのデータの蓄積が進められている。統語情報に加えて意味情報を付するコーパスは世界的にも希少であり、コーパス言語学の展開への貢献が期待できる。コーパスを利用した研究については、言語学者の利用を想定したコーパス検索インタフェースのマニュアル作成と合わせて、国内学会および国語研究所主催の研究会・ワークショップ・シンポジウムを開催し、NPCMJ コーパスを利用した研究の拡大・促進を図っている。研究成果としては国内外での学会発表21件、論文刊行

5編に加えて、国際シンポジウムの成果をまとめた出版が複数進められている。このように、プロジェクトの研究は順調に進展していると判断できる。今後は、自然言語処理分野で中核となっている機械学習コミュニティとの連携の面でも強化を図ることを期待する。

## 2. 共同利用・共同研究について

NPCMJ コーパスに新たに一万文のデータを追加し、コーパスの拡充を着実に進めている。コーパス利用促進を目的としたNPCMJ コーパス講習会/チュートリアルを国内各地で3回開催し60名程度の参加者を集めている。国語研内部の別プロジェクトと共同で日本語学習者を対象とした文型バンクの開発を行っている。外部研究機関との連携としては、言語発達分野で国際的に広く利用されているCHILDESと連携して共同研究を開始している。コーパス研究の拡大への貢献が見込まれるため今後に期待する。このように、共同利用・共同研究について概ね順調に進展していると判断できる。コーパス研究の進展のために、国語研内での研究活動と合わせてコーパス利用拡大に向けた普及活動の着実な実施を期待する。

## 3. 教育について

コーパス講習会/チュートリアル開催によって研究プロジェクトの研究成果となるNPCMJ コーパスの利用普及を図っている。PDフェローおよび非常勤研究員を雇用するとともに、大学院生を共同研究員としてプロジェクトに加えており、若手研究者の育成を図っている。

## 4. 社会との連携及び社会貢献について

NPCMJ コーパスのオンライン公開、ドキュメント、ユーザマニュアルの充実を通じて研究者に限定されない幅広い人々によるコーパス利用の環境整備を行っている。今後は利用促進のための広報に期待する。

## 5. グローバル化について

外国からの滞在研究員1名を受け入れている。国際シンポジウムの成果をまとめて書籍として出版する活動が三件進行中である。NPCMJ コーパスのローマ字化/英語検索インターフェースが公開されている。グローバル化について着実に進行していると判断する。

## 6. その他特記事項

特になし。

# 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

## プロジェクトリーダー：木部 暢子

### I. プロジェクトの概要

#### 1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年、ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが、その中には日本で話されている8つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ、本プロジェクトでは、次のことを実施する。(1) 日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

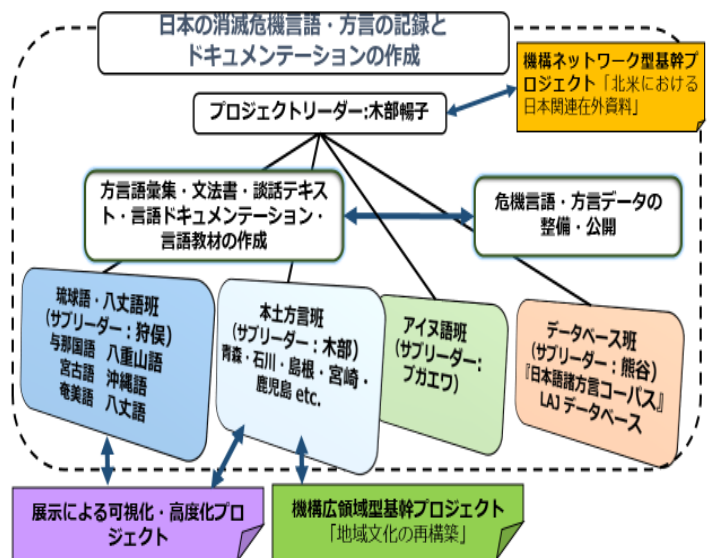
なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

#### 2. 年次計画（ロードマップ）

##### ● 全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- ・琉球語・八丈語班、本土方言班は6年間で、琉球24地点、八丈語、本土16地点（東北4地点、関東3地点、中部・関西3地点、中国・四国3地点、九州3地点）の語彙集・文法書・談話テキスト、言語ドキュメンテーション、言語教材を作成する。アイヌ語班はアイヌ語の口承文芸コーパスを作成する。
- ・データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」、「アイヌ語口承



文芸コーパス」, 「日本語諸方言コーパス」, 「『日本言語地図』データベース」の整備・公開を行う。

・研究成果として、以下のものを目指す。

書籍：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language*, 危機言語・方言に関する英文論文集, 『日本語の格』(仮題), 『日本語方言の動詞・形容詞(形態論)』(仮題), 『談話のなかの方言』, 『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『石川県白峰方言調査報告書』, 『愛知県木曾川方言調査報告書』, 『青森県むつ市方言調査報告書』, 『宮崎県椎葉村言語彙集』,

コーパス・データベース：『アイヌ語口承文芸コーパス』, 『日本語諸方言コーパス』, 「日本の危機言語・方言の音声データ」, 「『日本言語地図』データベース」,

その他：フィールド調査の手引き書, 各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション, 言語教材。

### ● 年次計画

#### 平成 28～29 年度 (1～2 年目)

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：「格と取り立て」, 「指示詞・代名詞」に関する研究会, コーパスに関する合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：「日本語諸方言コーパス」, 「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸データ」等を拡充・整備し, 公開する。
- ④ 地域との連携：「危機的な状況にある言語・方言サミット」(年1回), 「方言セミナー」(年1回)を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等を調査へ参加させる。フィールド調査の手引き書の準備を行う。
- ⑥ 成果：『日本語の格表現』(くろしお出版), 『かたりの中の方言』(勉誠出版)を出版する。『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『石川県白峰方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language* (30 年 4 月刊行予定), 『椎葉村方言語彙集』(31 年出版予定)の出版準備を行う。

#### 平成 30 年度 (3 年目)

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：国際シンポジウム“Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization.”, 「動詞・形容詞」に関する研究発表会を開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』モニター版を公開する。また, 「危機言語・方言」音声データ, 『アイヌ語口承文芸コーパス』, 「『日本言語地図』データベース」のデータ補充, および首都圏大学生調査の結果分布地図, 属性別集計表の作成。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」, (1 回)を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等を調査へ参加させる。『フィールド調査の手引き書』の作成を進める。
- ⑥ 成果：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language* の出版準備を行う。『日本語の格表現』(仮題), 『かたりの中の方言』(勉誠出版)を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材の刊行準備を進める。

### 平成 31～32 年度（4～5 年目）

- ① 調査：琉球語，八丈語，本土方言，アイヌ語の調査を行う。
- ② 研究会：「方言語彙集」，「文法記述」に関する研究会，コーパス合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』，「危機言語・方言」音声データ，『アイヌ語口承文芸コーパス』，『日本言語地図』データベース」のデータ等を整備・公開する。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」（年1回）を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生，PD 等の調査への参加。
- ⑥ 成果：『椎葉村方言語彙集』，論文集『方言の指示詞・代名詞』（仮題）を出版する。国際シンポジウムの発表に基づく危機言語・方言の英文論文集を出版する。

### 平成 33 年度（6 年目）

- ① 調査：次期準備調査を実施する。
- ② 研究会：研究成果報告会，コーパス合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：「日本語諸方言コーパス」を一般公開，「危機言語・方言音声データ」，「アイヌ語口承文芸コーパス」，『日本言語地図』データベース」のデータを補充・公開する。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」（年1回）を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生，PD 等の調査への参加。
- ⑥ 成果：各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材を刊行する。

### 6 年間のロードマップ

	28 年度	29 年度	30 年度	31 年度	32 年度	33 年度
調 査	琉球語，八丈語，アイヌ語，本土方言調査					
デ ー タ	『諸方言コーパス』データ整備		モニター版公開		データ整備	本公開
	方言コーパスを使った方言研究					
	危機言語・方言音声データ・アイヌ語口承文芸コーパス等整備・公開					
シンポジウム等	毎年，研究発表会，危機言語・方言サミット，コーパス合同シンポジウム，方言セミナー開催					
			国際シンポジウム開催			
刊行・出版	『久米島方言調査報告書』 『島根県隠岐の島方言語彙集』，『白峰方言調査報告書』等刊行		『愛知県木曾川方言調査報告書』『日本語の格表現』，『かたりの中の方言』	『椎葉村方言語彙集』， 危機言語・方言の英文 論文集，『方言の指示詞・ 代名詞』		各地の語彙集・文法書・ 談話テキスト・教材の 公開

## II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,319千円

### 30年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

【フィールドワーク】日本の危機言語・方言の記録・保存・公開のために、全国約40地点における「動詞・形容詞」の調査、青森県むつ市方言の合同調査等を実施、また、椎葉村との連携協定に基づく『椎葉村方言語彙集』作成のための調査を実施した。【研究発表会・講演会】5回の公開研究発表会・講演会を開催した(①動詞・形容詞(琉球諸語)、②動詞・形容詞(本土諸方言)、③フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史、④球諸語継承に向けた教育活動の事例報告(日本音声学会ワークショップ)、⑤Sherman WILCOX教授による講演 Sign linguistics)。【国際シンポジウム】8月にNINJAL International Symposium “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia”とそれに関連するイベントを開催した。また、ハワイ大学との協定に基づく講演会、ワークショップを開催した。【社会的意義】アイヌ語に関する研究が新聞各紙で取り上げられた。また、手話を含む危機言語の継承活動がNHKハートネットTVで取り上げられた。【大学との組織的な連携】東外大AA研LingDy3との協定によりクロスアポイントメントによる特任助教を雇用し、国際シンポジウム、弘前大学との連携授業等を実施した。【研究成果】研究成果として、プロジェクト全体で論文20件(ブックチャプターを含む)、図書・報告書5件、コーパス・データベース等5件、発表・講演85件、一般向け講演・セミナー13件として公開した(プロジェクトの企画によるもの、プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ)を公表した。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

【データベース等の構築・公開】「危機言語DB」のページで危機言語・方言のデータを公開した。本年度は基礎語彙のうち宮古本島(砂川、池間西原)、沖縄(伊平屋村田名)のデータを追加公開、自然談話のうち宮古島(本島)、多良間島のデータを追加公開した。また、『日本言語地図』の原データの公開を行う『日本言語地図データベース』のデータを40件追加して公開した。諸方言が横断的に検索できる『日本語諸方言コーパス(COJADS)』については、3年間のデータ整備を経て、47地点24時間の音声データによるモニター版を2019年3月に作成し、公開した。【データベース等を使った研究】上記のCOJADSやデータベースを使った研究発表を5件行なった。また、日本語言語資源の包括的検索システムの構築に向けて「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」、「コーパスアノテーション」、科研費基盤研究(A)、(B)と共同でコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」(9月7日)を開催した。

#### 3. 教育に関する計画

【大学との連携による授業】東京外大AA研と協力して、弘前大学との連携授業「地域文化振興実習」を担当した。内容は、言語調査の意義、調査の方法論、事前準備、データの書き起こし方法の4コマである。受講生のうち4人が青森県むつ市方言調査に参加した。【フィールドワーク支援】弘前大学の学生の他、むつ市方言調査に参加する学生を全国公募し、4人の学生・大学院生を調査に参加させた。また、若手研究者に対して語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。【発表

支援】8月のNINJAL International Symposiumの前日にポスター発表を開催し、公募による若手研究者20人に発表の場を提供した。また、1月12～13日のワークショップ（ハワイ大マノア校）に5人の非常勤研究員を派遣し、国際ワークショップの経験を積ませた。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

【地域社会との連携】宮崎県椎葉村との協定に基づき、村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査を実施した。また、今年度、新たに沖永良部島和泊町・知名町と連携協定を結び、言語復興活動を町と共同で実施することとした。今年度は和泊町国頭村集落の親子16人が言語継承活動の取組を発表するワークショップ「くんじゃい しまむにプロジェクト」を2月10日に国語研で開催した。

【一般向け講義・講演会等】文化庁、宮古島市等との共催で「危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島）」（11月24日）を開催した。また、まつえ市民大学と共同で出雲弁に関するシンポジウム「出雲方言の探究と保存継承活動の活発化に向けて」（12月1日）を開催した。【方言の展示】昨年度から「展示による可視化・高度化事業」と共同でモバイル型展示ユニットの作成と展示を行っている。今年度は神奈川大学、弘前大学、羽田空港国際線ターミナル、松江市、富山大学等で展示を行なった。【インターネットを通じた発信】ネットを通して危機言語・方言のデータや『日本語諸方言コーパス（COJADS）』、『日本語地域図データベース』のデータを公開した。

#### 5. グローバル化に関する計画

【国際シンポジウム等】8月6～8日に国語研で、琉球・日本・北東アジア地域の危機言語を対象とするシンポジウム NINJAL International Symposium “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia.” を東京外大AA研、科研費基盤研究(S)と共同で開催した。これに関連して、8月5日に危機言語に関するポスター発表、およびハワイ大学ヒロ校 ŌHARA Yumiko氏による“A brief introduction to the immersion classroom: A case of Hawaiian language” を、8月9～10日にブリティッシュ コロンビア大学 Mark Turin氏によるドキュメンテーションのワークショップ “Developing Digital Tools for Language Revitalization” を開催した。【協定に基づく講演会】国際連携協定に基づき、8月9日に国語研で、ハワイ大学マノア校 FUKUDA Shin'ichirō氏による協定締結記念講演会を開催した。また、1月にハワイ大学マノア校で危機言語に関するワークショップ “The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop” を開催した。【英文ウェブサイトの整備・充実等】報告書、および危機言語・方言のデータを英訳し、ホームページで発信した。

#### 6. その他

該当する活動なし。

### Ⅲ. 項目ごとの状況

#### 1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>● フィールドワーク</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 日本の危機言語・方言の語彙集，文法書，談話テキストを作成するために，共同研究者が分担して，全国約 40 地点において調査を実施した。今年度のテーマは「動詞・形容詞」である。</li><li>2. 一地点の方言を集中的に調査・記録するため，青森県むつ市で合同調査を実施した（機構広領域連携型プロジェクト「地域文化の再構築」，弘前大学と共同実施）。調査日は8月30～31日，参加者は27人（うち大学院生4人，公募の学生4人，弘前大学学生4人）。弘前大学川瀬卓准教授（日本語学），歴博小池淳一教授（民俗学）も調査に参加した。調査項目は指示詞，動詞活用等の文法項目，基礎語彙600単語とその例文である。報告書は2019年度に刊行する予定である。</li><li>3. 宮崎県椎葉村との協定に基づき，『椎葉村方言語彙集』作成のための調査を実施した（広領域連携型プロジェクト「地域文化」と共同実施）。今年度は事業の最終年度に当たる。これまでの調査でデータが不足している松尾，尾手納，向山日当（5月23～25日，参加者7人），鹿野遊（9月29～30日，参加者5人）で補充調査を行なった。</li></ol> <p>● 公開研究発表会・講演会，国際シンポジウム</p> <ol style="list-style-type: none"><li>4. 全国40地点調査に関連して，「<u>動詞・形容詞</u>」に関する公開研究発表会を2回開催した。1回目は「動詞・形容詞（琉球諸語）」（6月17日，国立国語研究所）で，参加者数45人（うち学生4人），発表件数6件，2回目は「動詞・形容詞（本土諸方言）」（3月10日，国立国語研究所）で，参加者数71人（うち学生8人），発表件数6件であった。2回目の研究発表会に合わせて，ワークショップ「基礎語彙の収集と処理」（3月9日，国立国語研究所）を開催した。参加者26人であった。</li><li>5. プロジェクトの成果の海外発信と海外の研究者との連携を進めるために，<u>NINJAL International Symposium “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization”</u>，ポスター発表，ハワイ語のイメージングプログラム，言語ドキュメンテーションのワークショップを開催した。（詳細は5.（1）グローバル化に関する目標を達成するための措置（2）1を参照）</li><li>6. 琉球語に関する研究成果を学界に向けて発信するために，特任助教青井隼人が中心となって第32回日本音声学会全国大会ワークショップで「琉球諸語継承に向けた教育活動の事例報告」（9月16日，沖縄国際大学）を発表した。</li><li>7. 琉球語の調査研究をもとに<u>日琉祖語を考える公開研究発表会「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」</u>をオープンハウスの一環として開催した（12月22～23日，国立国語研究所，科研費基盤研究（B）と共催）。参加者数89人（うち国外機関所属者数3人，学生数10人），総発表件数9件（うち国外機関所属者発表件数2件）。</li><li>8. 今年度から手話の研究者が本プロジェクトに参加し，<u>手話に関する研究をプロジェクトに取り入れる</u>こととした。それに関連して，12月10日に Sherman WILCOX（アメリカ ニューメキシコ大学教授）による講演会 “Sign linguistics for documentation: From theory to fieldwork” を本プロジェクトの主催で開催した（国立国語研究所多目的室）。</li></ol>	

● 研究成果の公表

9. 前年度に実施した愛知県木曾川方言合同調査の報告書を3月に刊行した。
10. 椎葉村の補充調査の結果を3月に作成し、椎葉村教育委員会へ提出した。全地域のデータをまとめた『宮崎県椎葉村方言語彙集』の原稿は、椎葉村との協議により、2019年度に作成することとなった。
11. 28年度のシンポジウムをもとにした『日本語の格表現』（くろしお出版）、機構の連携研究の成果をもとにした『かたりの中の方言』（勉誠出版）の編集作業は、「展示による可視化・高度化事業」と『諸方言コーパス』の作成作業のために遅れている。4月に出版社へ原稿を入稿し、2019年度の刊行を目指す。
12. 首都圏大学生調査の結果について、データ更新と集計表を3月にWebサイトで公開した。
13. プロジェクトの研究成果を、共同研究員のものも含めて、論文20件（ブックチャプターを含む）、図書・報告書5件、コーパス・データベース等5件、発表・講演85件、一般向け講演・セミナー13件として公開した（プロジェクトの企画によるもの、プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。

● 教材及び教育プログラムの開発

14. 昨年度の愛知県立大学でのフィールドワークの講義、および今年度の弘前大学「地域文化振興実習」の講義（詳細は3教育に関する計画（1）1.参照）をもとに、東外大AA研LingDy3と共同で『フィールドワークの手引き書』の作成を進めている。

● 受賞

15. 東外大AA研特任研究員／国語研特任助教 青井隼人が琉球諸語の音韻・音声に関する研究で2018年度仲宗根政善研究奨励賞を受賞した。（7月7日受賞式）
16. 共同研究員／学振PD（国語研）の坂井美日が日本言語学会2018年春季大会の発表「九州方言における主語標示の使い分けと動作主性」により大会発表賞を受賞した。（11月18日受賞式）

● 新聞、テレビでの紹介

17. 読売新聞「アイヌ語 民話で深く理解」（7月30日）、朝日新聞「孤立した言語 蓄積は膨大」（10月24日）等、全部で12件の取材記事が掲載された。
18. 危機言語（手話を含む）の復興がNHKハートネットTV「故郷の言葉を守りたい～日本の“消滅危機言語”～」(10月17日、24日)で放映された。木部が解説者として出演し、沖永良部島下平川における山田の復興活動が取り上げられた。

(2) 研究実施体制等に関する計画

● 大学との組織的な連携

1. プロジェクトを推進するために、国内外の研究者72人をプロジェクト共同研究員として組織した。うち大学院生4人、日本学術振興会特別研究員4人、国外機関所属者3人である。
2. 東外大AA研LingDy3との協定に基づき、クロスアポイントメントにより特任助教1人（青井隼人）を雇用し、NINJAL国際シンポジウム、弘前大学との連携授業、音声学会シンポジウム等を実施した。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p><b>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</b></p> <p>● データベース等の構築・公開</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「<u>危機言語DB</u>」のウェブページを5月にリニューアルし、ページデザインと検索機能を改良した。今年度は、基礎語彙のうち宮古本島（砂川、池間西原）、沖縄（伊平屋村田名）のデータを追加公開、自然談話のうち宮古島（本島）、多良間島のデータを追加公開した。琉球語のデータの整備を優先させたため、島根県出雲方言のデータは来年度、整備することとなった。</li> <li>2. 『<u>アイヌ語口承文芸コーパス</u>』のデータの拡充は、アイヌ民族博物館や文化庁のアイヌ語データベース業務のために、予定していた作業者の確保が難しくなり、今年度は実施できなかった。それに代えて、<u>モバイル型展示ユニット「アイヌ語とアイヌの民話」</u>を作成した。</li> <li>3. 『<u>日本語地図</u>』の原データの公開を行う『<u>日本語地図データベース</u>』の40項目のデータを3月に追加・公開した。</li> <li>4. 諸方言が横断的に検索できる『<u>日本語諸方言コーパス (COJADS)</u>』については、3年間のデータ整備を経て、47地点24時間の音声データによるモニター版を2019年3月に公開した（登録受け付けは4月下旬から）。</li> <li>5. 共同研究員の小西いずみが本プロジェクトの調査項目を参考にして、「いずこに」のページで「富山県朝日町笹川方言」の音声データを公開した。</li> </ol> <p>● データベース等を使った研究成果等</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6. 宮崎シーガイアで開催されたLREC (The Language Resources and Evaluation Conference, 5月9日) 等COJADSや危機言語データベースを使った研究発表5件行なった。また、COJADSを使った論文を1件公開した。</li> <li>7. コーパス合同シンポジウム「コーパスにみる日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」(9月7日, 国語研), NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」(12月16日, 東京証券会館) のワークショップにおいて、COJADSを使った研究を発表した（詳細は以下の(2)2参照）。</li> <li>8. その他、研究発表会「日本語諸方言コーパスデータを使った方言の分析」を開催した（9月7日, 国語研, 科研費(A)と共同開催）。参加者31人（うち学生2人）、発表件数4件（うち学生1人）。</li> </ol> <p><b>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</b></p> <p>● 共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 琉球大学との交流協定に基づき、琉球大学に「沖縄における消滅危機言語・方言の調査・保存に関する研究」を事業委託し、沖縄県伊江島等の言語を記録した。</li> </ol> <p>● プロジェクト合同の研究集会</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2. 日本語言語資源の包括的検索システムの構築に向けて、「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」, 「コーパスアノテーション」, 科研費基盤研究(A), 基盤研究(B)と共同でコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」を開催した（9月7日, 国語研）。</li> </ol>	

### 3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p><b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 大学と連携して実施する授業やフィールドワーク</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <u>弘前大学との連携授業「地域文化振興実習」を東外大 AA 研と協力して2回4コマ担当した。</u>講義内容は、1回目（5月28日）が品川大輔（東外大）「言語調査の実際」、青井隼人（東京外大特任研究員／国語研特任助教）「言語（音声）学的調査の方法論」、2回目（6月4日）が木部暢子「調査の事前準備について」「東北方言の音韻・音声の特徴とその書き起こし方法について」である。</li> <li>2. 上記の授業と合わせて、<u>青森県むつ市方言調査を弘前大学と共同で実施し、受講生のうち4人がこれに参加した。</u></li> </ol> <p><b>(2) 人材育成に関する計画</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● プロジェクト非常勤研究員の雇用</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 若手研究者を育成するために、PD フェロー1人、非常勤研究員を7人雇用した。</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>2. 大学院生、学振PDに国際シンポジウムやフィールドワークの機会を提供し、実践をとおして若手研究者の育成を行なった。大学院生、学振PDの参加状況は以下のとおりである。             <ol style="list-style-type: none"> <li>① NINJAL 国際シンポジウムの前日（8月5日）のポスター発表を公募し、若手研究者20人が発表した。</li> <li>② 1月12～13日のWorkshop（ハワイ大マノア校）で非常勤研究員5人が発表した。</li> <li>③ むつ市方言調査に非常勤研究員4人、<u>全国公募の学生・大学院生4人が参加した。</u>なお、公募の学生に対しては、<u>調査前に事前研修を実施した。</u></li> </ol> </li> <li>3. 若手研究者に対して、語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。</li> </ol>	

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p><b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 平成26年度から、<u>宮崎県椎葉村と協定を結び、『椎葉村方言語彙集』の作成を実施している。</u>今年度は事業の最終年度にあたるため、補充調査を行なった。椎葉村との協議により、『宮崎県椎葉村方言語彙集』は、2019年度に刊行することとなった。</li> <li>2. (2) 研究成果の社会への普及に関する計画の「展示による研究成果の発信」へ移動。</li> <li>3. 今年度、新たに<u>沖永良部島の和泊町、知名町と連携協定を結び、方言復興活動を町と共同で実施することとなった。</u>また、和泊町国頭村集落の親子16人が言語継承活動の取組を発表するワークショップ「<u>くんじゃいしまむにプロジェクト</u>」を2月10日に国語研で開催した。</li> </ol> <p><b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 一般向け講義・講演会等</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 危機言語・方言の保存・継承のために、文化庁、宮古島市等との共催で11月24日にマティダ市民劇場（宮古島市文化ホール）で「<u>危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島）</u>」（主催：文化庁、沖縄県、宮古島市、宮古島市教育委員会、国立国語研究所、琉球大学、北海道大学アイヌ・先住民研究センター）を</li> </ol>	

開催した。参加者は約400人、発表2件、講演1件、その他6件で、木部が危機的な状況にある言語・方言の現況報告を行い、田窪が基調講演「ことばと生きる、ことばを残す」を行なった。

2. まつえ市民大学サポーターの会と共同で、12月1日に出雲弁シンポジウム「出雲方言の探究と保存継承活動の活発化に向けて」を開催した（松江市市民活動センター、広領域連携型PJと共同）。参加者60人（うち学生1人）、木部、友定、平子、小西、野間の4人が発表した。
3. その他、与那国語に関する講座「二日で学ぶ与那国語」（2月17～18日、東洋文庫アカデミア）、「与那国語の動詞・形容詞の活用パラダイム：動詞を使えるようになるために」（11月18日、よなぐにはーげんクラブ）を開催し、東京と与那国で言語復興支援を行った。

● 展示による研究成果の発信

4. 昨年度から「展示による可視化・高度化事業」と共同で、危機言語・方言の保存と継承活動に展示の手法を取り入れている。今年度はモバイル型展示ユニットを4台作成した「日本海のことばと文化」「消滅の危機に瀕した言語・方言」「日本語の歴史と方言」「アイヌ語とアイヌの民話」。また、モバイル型展示ユニットを使った展示を8回開催した。①神奈川大学（5月7～25日、歴博と共同開催）、②弘前大学（5月28～6月15日）、③羽田空港国際線ターミナル（8月24日～9月14日、歴博と共同開催）、④松江市市民活動フェスタ（9月25日、まつえ市民大学サポーターの会と共同開催）、⑤鹿児島大学・人間文化研究機構協定締結記念シンポジウム（9月29日、鹿児島大学）、⑥大学共同利用機関シンポジウム2018（10月14日、名古屋市科学館）、⑦国語研オープンハウス（12月22日）、⑧富山大学図書館（2月12～19日）。

● インターネット等を通じた研究成果の社会への発信

5. 『日本語諸方言コーパス (COJADS)』モニター版を3月に作成した（調整のため公開は4月下旬）。（2. 共同利用・共同研究に関する計画（1）5参照）
6. 「日本の危機言語・方言」のデータ、『日本語地図データベース』等のデータを増補し、ホームページで公開した。（2. 共同利用・共同研究に関する計画（1）1～4参照）
7. 上記の活動をとおして、地方自治体や文化団体、一般市民に危機言語・方言の記録・保存・復興の啓蒙活動を行なった。

## 5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p><b>(1) 国際的協業に関する計画</b></p> <p>● 海外の研究者の受入</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 海外の研究者3人が共同研究員として参加し、8月の国際シンポジウムや12月の公開シンポジウムのアドバイザーや発表者をつとめた。また、1人が8月の方言調査に参加した。</li> </ol> <p><b>(2) 国際的発信に関する計画</b></p> <p>● 国際シンポジウムの開催</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. プロジェクトの成果の海外発信と海外の研究者との連携を進めるために、以下の国際シンポジウム、ワークショップを開催した。</li> </ol> <p>①日本と北東アジアの危機言語と言語復興をテーマとする NINJAL International Symposium “Approaches</p>	

to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization” を国語研で開催した（8月6～8日，東外大学AA研 LingDy3，科研費基盤研究(S) との共催）。参加者数は122人（うち国外機関所属者19人，学生25人），発表件数は29件（うち国外機関所属者発表件数9件）である。

②シンポジウムの前日（8月5日）に若手研究者による公募のポスター発表を開催した。応募のうち20件を採択した（うち国外機関所属者発表件数5件，学生発表件数7件）。（資5.2）

③また，シンポジウムの前日（8月5日）にハワイ大学ヒロ校 ŌHARA Yumiko 氏によるハワイ語の復興ワークショップ “A brief introduction to the immersion classroom: A case of Hawaiian language” を開催した。

④シンポジウムの次の日（8月9～10日）にブリティッシュ コロンビア大学の Mark Turin 氏によるドキュメンテーションのワークショップ “Developing Digital Tools for Language Revitalization: Demystifying Coding, Apps and Web Platforms” を開催した。

2. 前年度に締結したハワイ大学マノア校との連携協定に基づき，以下の講演会，ワークショップを開催した。

①8月9日に国語研で，ハワイ大学マノア校 FUKUDA Shin' ichirō 氏による協定締結記念講演会 “Experimental syntactic research at University of Hawai'i at Mānoa: an overview and case studies.”（ハワイ大学マノア校での実験を通じた統語研究活動：概観と実例）を開催した。

②1月12～13日にハワイ大学マノア校で，“The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop: Grammatical Descriptions of Endangered and Understudied Languages and Dialects in East Asia and Beyond” を開催した（琉球諸語研との共催）。参加者数は58人，発表は26件（うち国外機関所属者発表件数8人，学生7人），ポスター発表11件である。

● 英語による研究成果の発信

3. ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language* の編集作業を進めた。

4. 8月の国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集を Mouton 社から刊行することになり，その準備を進めた。

● 英文ウェブサイトの整備・充実等

5. 報告書，および危機言語・方言のデータを英訳し，ホームページで発信した。

## 6. その他

該当する活動なし。

## 平成30年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

評価項目のいずれにおいても，それぞれ十分な成果をあげており，A評価が妥当であると考えられる。昨年に続き社会貢献，および今年度新たに力を入れた研究の国際発信において，成果が充実

している。研究面において特筆される点は、まず、諸方言の横断的検索が行える『日本語諸方言コーパス (COJADS)』が公開されたことである。47 地点 24 時間の音声データと文字化資料が収録され、中納言の形態素解析タグが付された共通語訳から KWIC 索引の作成 (音声付き) が可能になった。次に、語彙集、文法書、談話テキストを作成するための調査が、全国 40 地点で実施されたことである。1980 年代に地域誌の枠組みで行われた各地方言の記述からすでに 40 年近くを経ている。新しい言語研究の方法でとりくむ、現代方言の記述が進められることの意義は大きい。プロジェクトの後半を迎えるにあたり、著述面での成果をさらにあげることが期待される。

## 《評価項目》

### 1. 研究について

当初の計画として、研究水準及び研究の成果等に関して 12 項目、また、研究実施体制等に関して 2 項目、合計 14 項目の目標が立てられているが、いずれの項目においてもほぼ計画どおりに実施され、十分な成果をあげている。「動詞・形容詞」を年度のテーマに掲げて行った 40 地点にわたるフィールドワークの展開と、地点別の記述的研究は着実に行われており、シンポジウム等の口頭発表および複数の報告書として WEB 上でも公開されている。方言コーパスの整備公開も予定通り着実に進められている。方言コーパスを使った研究が始まったが、始動直後であるため関係論文数がやや少ない。次年度からは、広く斯界に方言コーパスの利活用を呼びかける方策がほしい。ちなみに、本年度出版予定の報告書『椎葉村方言語彙集』の刊行は次年度となったが、さらなる補充調査の必要性があるため問題とはならない。前年度刊行予定であった『日本語の格表現』『かたりの中の方言』の編集作業が遅れている事情は十分に理解できるが、次年度には刊行されることが望ましい。

### 2. 共同利用・共同研究について

データベースの構築・公開及び講習会・講演会の開催について、また、共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携、プロジェクト合同の研究集会について、いずれの項目もバランスよく十分な成果をあげている。方言コーパスを使った研究発表は活発に行われたため、今後は、論文化されることが重要になろう。公開後の『日本語諸方言コーパス』を用いた研究論文の産出量を、プロジェクト員、一般利用者ともに増やすためには、当該コーパス構築の目的と設計理念、および活用可能性について、丁寧な説明を施すことが重要となろう。また、共同利用の趣旨からいえば、作成公開されたデータベースが、実際にどの程度閲覧され、どのように利用されているかを把握する意識も重要であろう。

### 3. 教育について

研究過程及び研究成果の教育的普及は十分に行われ、大学院等への教育協力及び人材育成に関して、成果をあげている。弘前大学および東京外国語大学 AA 研と連携した授業のみならず、方言調査の実施に際して、全国公募を行ったうえで参加者の学生・大学院生に事前研修を行い、諸大学の学生に懇切な教育機会を設けた。また、若手研究者に対しても調査旅費を援助し、語彙集・文法書・談話テキスト・言語教材の作成を経験する研究教育の機会を設けたことも評価される。実践を通じた若手育成の成果は今後長い時間を経て現れることと信じる。公募によるポスター発表を国際シン

ポジウム開催時期と合わせて設けていることにも、実践から研究へと導く、若手研究者育成への好ましい視野のもちかたが知られる。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献について

地域社会との連携及び研究成果の社会への普及については、高い成果をあげている。新たな地域連携を行うとともに、これまで継続してきた地域連携活動を丁寧に深めたことも高く評価される。地域連携は一朝一夕には成らず、相互の信頼関係を深めていく過程が重要である。言語研究に不可欠な地域理解を地道に重ねることによって、今後も、さらに質の高い研究と地域への還元が可能になっていくであろう。今期の地域活動には、研究面の活動、地域言語の理解を助ける活動、地域言語の継承を助ける活動の3種類がみられた。これらを、与那国、沖永良部島、宮古島、宮崎県椎葉村、鹿児島市、松江市、富山市、神奈川、羽田空港国際ターミナル、国立国語研究所オープンハウス、弘前市というように、地点を広げて展開した。今後は、各地の記述的研究の深化と並行させて、地域言語に関する3種類の活動を行うべき地点の吟味を行うことで、一層の活動の進展を期待したい。

#### 5. グローバル化について

海外の組織との連携及び研究成果の国際的発信においては精力的に進められ、高い成果をあげている。海外の研究者3名を共同研究員に迎え、危機言語・方言に関する共同研究を推進した。研究成果の国際発信に関しては、国際シンポジウム1件、ワークショップ3件、協定締結記念講演1件を行った。ちなみに、シンポジウムの前日に行った若手研究者を対象とする公募のポスター発表では、採択20件のうち12件が国外機関所属者、学生の発表であったことを例にとっても、こうした活動が国際発信とともに、若手研究者の教育や国際交流の機会としても機能するよう配慮されていることは高く評価される。出版編集についても、予定通り、今後2冊を上梓する準備が進められた。WEBに掲げられた報告書、および危機言語・方言のデータの英訳も進められた。

#### 6. その他特記事項

WEB上に置かれた報告書の英訳が進んでいることと合わせて、中国語、韓国語、ロシア語への翻訳を加える予算措置をとることが望ましい。これにより、消滅危機言語・方言をテーマとした、東アジア圏の研究者交流と共同研究への場を作る足掛かりとしたい。多言語環境をWEB上につくることは、日本語そのものの継承と発信にとっても望ましいことと考える。

## 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

### I. プロジェクトの概要

#### 1. 目的及び特色

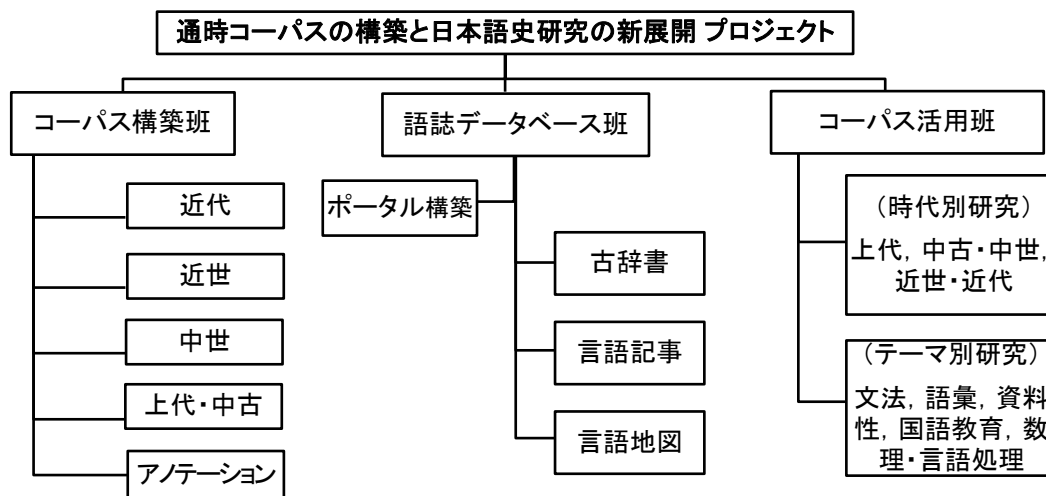
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリシタン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

## 2. 年次計画（ロードマップ）

### ● 全体計画・研究組織



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古，中世，近世，近代の時代ごとにグループを置き，プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。「語誌データベース班」は，コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書，言語記事，言語地図のグループを置き，各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き，コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は，時代別に上代，中古・中世，近世・近代の研究グループを置き，コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に，文法，語彙，数理・言語処理の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか，資料性，アノテーションのグループを置き，それぞれコーパスに追加する資料，アノテーションに関する研究を行う。このほか，人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー，PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

### ● 年次計画

※各年，研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。

#### 平成28年度（1年目）

- ①「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」，「明治・大正編Ⅰ雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
- ②日本語学会でワークショップを開催。

#### 平成29年度（2年目）

- ①「奈良時代編Ⅰ万葉集」，「室町時代編Ⅱキリシタン資料」，「江戸時代編Ⅰ洒落本」を公開。

#### 平成30年度（3年目）

- ①「江戸時代編Ⅱ人情本」，「明治・大正編Ⅱ教科書」・「和歌集編（八代集）」を公開。
- ②古辞書データベースの試作版を公開。
- ③書き言葉コーパス入門書を出版。

#### 平成31年度（4年目）

- ①「江戸時代編Ⅲ近松」，「奈良時代編Ⅱ宣命」を公開。

### 平成 32 年度（5 年目）

- ①「明治・大正編Ⅲ文学作品」，「鎌倉時代編Ⅲ軍記」を公開。
- ②語誌情報ポータルサイトの公開。
- ③研究論文集の出版。

### 平成 33 年度（6 年目）

- ①『日本語歴史コーパス』（奈良時代～明治・大正時代）の拡張完了。
- ②語誌情報ポータルサイトの完成。

#### ● 3 年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

- ①「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」「室町時代編Ⅱキリシタン資料」「奈良時代編Ⅰ万葉集」「明治・大正編Ⅰ雑誌」「明治・大正編Ⅱ教科書」，「江戸時代編Ⅰ洒落本」「江戸時代編Ⅱ人情本」，「和歌集編（八代集）」
- ②語誌データベース班は，語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は，ワークショップ・公開研究会を 2 回以上，国際シンポジウムを 1 回開催し，書籍 1 冊を刊行する。また，プロジェクト全体として一般向けの NINJAL フォーラムを 1 回開催する。

#### ● 5 年目までの成果物

- ①コーパス構築班は，奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は，各種語誌データベースを構築し，語誌情報のポータルサイトを公開する。コーパス活用班は，国際シンポジウムを 1 回開催し，研究論文集を 1 冊以上出版する。

## II. 30 年度活動概要

30 年度予算総額 28,500 千円

### 30 年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

プロジェクトで主催した NINJAL-Oxford「通時コーパス」国際シンポジウム（9 月 8，9 日），「通時コーパス」シンポジウム 2019（3 月 9 日）のほか，共催を含め計 4 回のシンポジウムを開催した。また，通時コーパス活用班のグループ研究発表会を 5 回，『日本語歴史コーパス』の講習会（チュートリアル）を 3 回開催した。

研究成果を，書籍 1 件，論文・ブックチャプター等 18 件，発表・講演 51 件，コーパス・データベース等 12 件として公開した（プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。うち 1 件が学会ベストポスター賞を受賞した。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

・『日本語歴史コーパス』『明治・大正編Ⅱ教科書』を整備し，10 月に公開した。また，「江戸時代編Ⅱ人

情本」 「明治・大正編Ⅲ 明治初期口語資料」 「和歌集編（八代集）」 を新規に、また「東洋学芸雑誌」を追加した「明治・大正編 雑誌」を3月に公開した。

- ・語誌データベースの試作版を構築し、3月に公開した。
- ・「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」(ONCOJ) のアップデートを行った。
- ・大英図書館所蔵 天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像データを Web 上で公開し「室町時代編Ⅱキリシタン資料」と連携した。

### 3. 教育に関する計画

- ・PD フェローを1名、非常勤研究員を3名雇用しコーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行った。また、大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ学会参加費を補助するなど、若手研究者への支援を行った。このうち、片山久留美プロジェクト非常勤研究員らの研究発表が情報処理学会・人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞した(重出)。
- ・書籍『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究—』(朝倉書店)を刊行した(公募型プロジェクトと共同)。

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。新規の申し込みユーザー数は3934、検案件数は約26万であった。
- ・中世文語(説話・随筆) UniDic について AI TOKYO LAB 社に商用利用を許諾した。
- ・中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会(国語教育活用ワークショップ)を開催した。
- ・駒澤大学の公開講座「日本語の千年—コーパスで解き明かすことばの生態—」においてプロジェクトメンバーで分担し全8回の下記の市民向け講義を行った。
- ・国立国語研究所主催の第13回 NINJAL フォーラム「日本語の変化を探る」の企画・発表を行った。

### 5. グローバル化に関する計画

- ・オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で ONCOJ のアップデートを行い、共催した NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウムで研究発表を行った。
- ・北京日本学研究中心において11月20日に NINJAL セミナー「国語研究所の言語資源」を開催し多数の参加を得た。

### 6. その他

該当する活動なし。

### Ⅲ. 項目ごとの状況

#### 1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"><li>プロジェクト研究成果を、<u>書籍1件、論文・ブックチャプター等18件、発表・講演51件、コーパス・データベース等12件として公開した。</u>(原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むものに限った)</li><li>古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備を行ない、<u>語誌データベースの試作版を構築・公開した。</u>また、『語彙研究文献語別目録』の電子化を行った。</li><li><u>共催を含むシンポジウム計4回のほか、通時コーパス活用班のグループ研究発表会を6回開催した</u>(下記参照)。<ul style="list-style-type: none"><li>・ 30年6月9日 近世・近代グループ・文体・資料性グループ合同研究発表会、明治大学中野キャンパス</li><li>・ 30年8月21日 近世・近代グループ・中古・中世グループ合同研究会、国語研</li><li>・ 30年12月23日 通時コーパス 近世・近代グループ研究発表会、明治大学中野キャンパス</li><li>・ 31年2月2日 第3回 国語教育活用ワークショップ(国語教育グループ※領域指定型プロジェクト「古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」と共催)、埼玉大学</li><li>・ 31年2月22日 語彙・意味グループ・文体・資料性グループ合同研究発表会、東洋大学</li><li>・ 31年3月8日 中古・中世グループ研究発表会、国語研</li></ul></li><li>オックスフォード大学東洋学部と共催で30年9月8,9日に<u>国際会議「NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム」を開催し</u>, 87人(うち海外7人, 大学院生14人)の参加があった(国語研)。</li><li>プロジェクト全体の研究発表会として31年3月9日に「<u>通時コーパス</u>」シンポジウム2019を開催し, 113人(うち大学院生21人)の参加があった。 ※会話コーパスプロジェクトとの共催</li><li>コーパス関係の所内プロジェクトや科研費プロジェクトと合同で30年9月7日に<u>合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」</u>を国語研で開催した。発表6件, 参加者は, 83人(うち海外1人, 大学院生15人)であった。</li><li>『日本語歴史コーパス』利用の講習会(チュートリアル)を3回行った。<ul style="list-style-type: none"><li>・ 30年4月24日, 九州大学</li><li>・ 30年8月22,23日, 国語研</li><li>・ 31年2月2日, 埼玉大学</li></ul></li></ol> <p>このほか、他のプロジェクトとの共催で2件のシンポジウムを開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 科研費基盤(B)「平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立」(代表者:池田証壽)と合同で30年8月25,26日に<u>国際シンポジウム「古辞書研究の射程」</u>を国語研で開催した。発表6件, 参加者は59人(うち海外7人, 大学院生7人)であった。</li><li>・ 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法プロジェクト」(文法研究班「とりたて表現」と合同で31年1月13日に <u>NINJAL シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア —文法史研究・通時的対照研究を中心に—」</u>を国語研で開催した。発表7件, 参加者は98人(うち海外2人, 大学院生20人)であった。</li></ul> <p>このほか、通時コーパス活用班が、日本語学会2018年度春季大会ワークショップ「日本語史研究と</p>	

コーパス活用—その利点と注意点—」を開催した。

- ・上記の研究成果のうち、共同研究員の研究発表が情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞した。 [3 (2) 4. =14 ページ参照]

## (2) 研究実施体制等に関する計画

1. 『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者 83 人をプロジェクト共同研究者として組織して研究活動を行った (国内 80 人, 海外 4 人)。
2. 『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究者 4 名を雇用し、関連するプロジェクト・科研費による 2 名とあわせ、合計 6 名でコーパス構築を行った。
3. 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。
4. 「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートとこれを活用した研究を推進し、NINJAL- Oxford 国際シンポジウムを開催するなど、英国オックスフォード大学との連携協定のもとで共同研究を推進した。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価

計画を大きく上回って実施した

### (1) 共同利用・共同研究に関する計画

1. 『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅱ人情本」を整備し、3月26日に公開した。
2. 『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅱ教科書」を整備し、10月1日に公開した。
3. 語誌データベースの試作版を構築し、3月29日に公開した。
  - ・語誌データベースのうち「言語地図データベース」の画像データの追加公開を行った。
4. 関連する科研費研究との協力により、『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅲ 明治初期口語資料」を構築し、3月26日に公開した。  
また、「東洋学芸雑誌」をコーパスとして整備し、『日本語歴史コーパス』「明治・大正編 雑誌」に追加して3月26日に公開した。
  - ・『日本語歴史コーパス』利用した研究業績リストをアップデートして公開した。
5. 『日本語歴史コーパス』「和歌集編 (八代集)」を整備し、予定を繰り上げて3月26日に公開した。  
また、『日本語歴史コーパス』「奈良時代編Ⅱ 宣命」, 「江戸時代編Ⅲ 近松」, 「明治・大正編Ⅳ 文学作品」のデータを整備し、平成31年度以降に公開するための準備を行った。
6. [1 (1) 7. =50 ページ参照]。
7. [1 (1) 3. =50 ページ参照]。

### (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

8. [1 (2) 4. 参照]。この共同研究の成果として、「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」(ONCOJ)のアップデートを行った。
9. [1 (2) 3. 参照]。『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅱ 人情本」の整備はこのプロジェクトとの共同で行った。

10. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター (CODH) との共同で、近代語のコーパスの整備と活用に関する研究を実施した。

計画に含まれなかった共同利用関係の大きな成果として、次のものがある。

- ・大英図書館との覚書にもとづき、大英図書館所蔵 天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像データを Web 上で公開した。また、『日本語歴史コーパス』「室町時代編Ⅱキリシタン資料」から当該ページ画像にリンクを行った。

なお、他の(2)プロジェクト合同の研究集会として下記の4回を開催した。〔1 (1) =50 ページ参照、再掲〕

- ・ 科研費基盤 (B) 「平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立」(代表者:池田証壽) と合同で国際シンポジウム「古辞書研究の射程」30年8月25, 26日
- ・ コーパス関係の所内プロジェクトや科研費プロジェクトと合同で合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」30年9月7日
- ・ オックスフォード大学東洋学部と共催で「NINJAL- Oxford 通時コーパス国際シンポジウム」30年9月8, 9日・国語研。
- ・ 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法プロジェクト」(文法研究班「とりたて表現」) と合同でNINJAL シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」31年1月13日
- ・ 会話コーパスプロジェクトとの共催で「通時コーパス」シンポジウム2019, 31年3月9日

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

『日本語歴史コーパス』「和歌集編(八代集)」の公開を前倒して行ったほか、大英図書館との協力にもとづき天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像データを国語研ウェブページ上で公開し、コーパスとの連携を行った。これらの点から全体として計画を大きく上回る成果を得たと考えSと自己評価する。

### 3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
	<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. イタリア・パヴィア大学より、ファン・シャンシャン氏を特別共同利用研究員として受け入れた。<ul style="list-style-type: none"><li>・ <u>公募型プロジェクトと共同でコーパスを活用した国語・古典教育に関する書籍『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究—』(朝倉書店)を刊行した。</u></li></ul></li></ol> <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. PD フェローを1名、非常勤研究員を3名雇用し、コーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行った。</li><li>2. 大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。</li><li>3. コーパス活用班研究会、「通時コーパス」シンポジウム等において、大学院生に発表の機会を提供し旅</li></ol>

費，英文校正等の補助を行った。

4. 若手研究者に対して学会発表（国際学会出張）等の経費の援助を行った。

その研究成果のうち、片山久留美プロジェクト非常勤研究員らの研究発表が情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞した。

5. [1 (1) 7. =50 ページ参照]

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b>	
1. (株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して公開した『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクのメンテナンスを行った（SSL 対応）。	
2. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）との共同で、八木書店・日本近代文学館と覚書にもとづき、近代文献の OCR に関する研究のためのデータ利用環境を整備した。	
<b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b>	
1. 『日本語歴史コーパス』を拡充し、 <u>コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。新規の申し込みユーザー数は 3934 人、検索件数は約 26 万件であった。</u>	
2. 歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備をコーパス開発センターと協力して行い、インターネット上で無償にて公開した。 このうち、 <u>中世文語（説話・随筆）UniDic について AI TOKYO LAB 社より商用利用申し込みがあり許諾した。</u>	
3. <u>中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の大学院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を開催した（2月2日・埼玉大学）。</u> ・ <u>駒澤大学の公開講座「日本語の千年 —コーパスで解き明かすことばの生態—」においてプロジェクトメンバーで分担し全8回の下記の市民向け講義を行った。</u> 変体仮名 10月6日，平仮名・片仮名 10月13日，コーパス 10月20日，上代・中古 10月27日，中世・近世 11月10日，近代 11月17日，訓点資料 11月24日，古辞書 ・ <u>国立国語研究所主催の第13回 NINJAL フォーラム「日本語の変化を探る」（11月4日）の企画・発表を行った。</u>	

#### 5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<b>(1) 国際的協業に関する計画</b>	
1. オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で「 <u>オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス</u> 」のアップデートを行い、共催した NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウムでこれを活用した研究発表を行った。	
2. <u>北京日本学研究中心において 11月20日に NINJAL セミナー「国語研究所の言語資源」を開催した。</u>	

北京の13大学より69名（うち大学院生51名）の参加があった。

2. 海外の研究者4人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進した。  
・ハワイ大学ハミルトン図書館において日系移民の日本語教科書に関する資料調査・写真撮影を行った。

## （2）国際的発信に関する計画

1. [1 (1) 4. =50 ページ参照]。
2. 国際学会において『日本語歴史コーパス』に関する発表を行った。
3. 『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて、英文 Web ページを作成し情報を発信した。

## 6. その他

該当する活動なし。

## 平成30年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

従来の日本語史研究が、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであったことの反省をふまえ、通時コーパスを構築し活用することによって、個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にし、さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入して、従来行えなかった視点からの研究を展開するという、所期の目的に照らして、その根幹たる『日本語歴史コーパス』が、必要な整備も適宜かつ随時加えられながら各時代の諸資料について着々と公開されてきて、それが平成30年度においても、当初の計画を超えるかたちで継続していることは高く評価できる。

また、研究活動、成果の共同利用・共同研究、教育、社会連携・社会貢献、グローバル化の諸側面からみて、大きくとまではいかないものの、相応の計画以上の成果が上がっているところが認められる。

よって、「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の平成30年度の評価は、「計画を上回って実施している」とした。なお、若干の留意点はあるかと思われるので、次年度以降に対応頂きたい。

### 《評価項目》

#### 1. 研究について

研究成果として、書籍1件、論文・ブックチャプター等18件、発表・講演51件、コーパス・データベース等12件が公開されている（プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）ことは、旺盛な研究活動として評価できる。また、プロジェクト主催によるシンポジウム・研究発表会・講習会も活発に開催され、研究ならびにその発信が着実に進められていることが諒解できる。

また、本プロジェクトの特性として、『日本語歴史コーパス』の整備・公開も研究活動と不即不離の関係にあり、その成果としての、「明治・大正編Ⅱ教科書」の整備・公開、「江戸時代編Ⅱ人情本」「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」「和歌集編（八代集）」の新規追加、さらには、明治10年代雑誌の不足を補うべく「東洋学芸雑誌」を追加した「明治・大正編雑誌」の公開等は、いずれも盛んな研究活動の証左として評価できる。

なお、研究組織のなかで、現状の「語誌データベース班」の位置づけが、名称・構成も含め、若干分かりづらいように思われる。古辞書や言語記事また言語地図の情報が、『日本語歴史コーパス』とどう関連づけられる見込なのかなどについてもっと説明があってもよいように思われた。

## 2. 共同利用・共同研究について

英国オックスフォード大学との連携協定によるオックスフォード・NINJAL「上代語コーパス」のアップデート、人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織との連携による『日本語歴史コーパス』『江戸時代編Ⅱ人情本』の整備、情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）との共同による近代語のコーパスの整備と活用に関する研究等、共同利用・共同研究の実が着実に上がっていると評価できる。また、大英図書館との覚書にもとづき、大英図書館所蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』ならびに「難語句解」の、装丁のレベルから確認しうる精緻なカラー画像データをWeb上で公開し、『日本語歴史コーパス』『室町時代編Ⅱキリシタン資料』から当該ページ画像にリンクを行ったことは、計画以上の出来事として特筆に値する。

## 3. 教育について

若手のPDフェローを1名、非常勤研究員を3名雇用し、コーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行ったこと、大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参加させたこと、コーパス活用班研究会、「通時コーパス」シンポジウム等において大学院生に発表の機会を提供し旅費、英文校正等の補助を行ったこと、若手研究者に対して学会発表（国際学会出張）等の経費の援助を行ったこと等は、いずれも若手教育への取り組みとして評価できる。また、そのなかから片山久留美プロジェクト非常勤研究員らの研究発表が情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞したことは、計画以上の出来事として特筆すべきものである。

なお、海外の大学からの共同利用研究員の受け入れも計画通り行われていることが述べられているが、それが、具体的にどう先方機関の機能強化に資しているのかまで言及してほしい（受け入れ実績だけでは、2の「共同利用・共同研究」との差が明確にならない）。

## 4. 社会との連携及び社会貢献について

(株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して公開した『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクのメンテナンスを行ったこと、情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センターとの共同で、八木書店・日本近代文学館と、覚書に

もとづき近代文献の OCR に関する研究のためのデータ利用環境を整備したこと、『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償公開したこと、歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備をコーパス開発センターと協力して行いインターネット上で無償にて公開したこと、各種ワークショップ・市民講座・NINJAL フォーラムを企画・実行したことを鑑みれば、社会との連携及び社会貢献を盛んに行っていることが伺える。

また、書籍『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究—』（朝倉書店）を刊行したことは、教育という面からの社会貢献と言ってもよいと思われる。

さらに、中世文語（説話・随筆）UniDic が AI TOKYO LAB 社から商用利用申請があつ（て許諾）したことは、同 UniDic の優秀さを証してあまりある。

## 5. グローバル化について

オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートを行い、共催した NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウムでこれを活用した研究発表を行ったこと、北京日本学研究中心において 11 月 20 日に NINJAL セミナー「国語研究所の言語資源」を開催し、北京の 13 大学より多数の参加者があつたこと、海外の研究者 4 人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進したこと等は、国際的な協業の推進として評価でき、国際会議「NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム」を開催し、プロジェクトの研究成果を発信したこと、国際学会において『日本語歴史コーパス』に関する発表を行ったこと、『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて、英文 Web ページを作成し情報を発信したこと等は、国際的な発信として評価できる。

なお、「グローバル化」というときには、発信内容がどれほど評価・受容されたかが問題となるかと思われるので、こういった反響があつたのかについてもコメントがほしい。

## 6. その他特記事項

特になし。

# 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

## I. プロジェクトの概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1) 多様な日常場面の会話 200 時間を収めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性を研究するレジスター班、(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の四つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950 年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

### 2. 年次計画 (ロードマップ)

#### ● 全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたって図に示す 4 つの班を組織して研究を推進する。

#### 【コーパス構築班】

多様な場面の日常会話を収めた『日本語日常会話コーパス』を構築し、次の通り公開する。

平成 30 年度：50 時間の会話の映像・音声・転記・短単位データをモニター公開 (31, 32 年度も継続して公開)

平成 33 年度：200 時間分の会話の映像・音声・転記・短単位データに加え、コアデータ 20 時間には人手で各種アノテーション (長単位・文節・発話単位・係り受け・対話行為など) を付与して本公開

### 【3つの研究班】

各班の研究に必要となるコーパス・データベース・アノテーションを随時整備し、各班のテーマの研究を推進する。

構築したコーパス・データベースについては以下の通り公開する。

平成 28 年度：『名大会話コーパス』中納言版・

ひまわり版を一般公開（レジスター班）

平成 29 年度：『国会会議録』ひまわり版を一般公開（経年変化班）

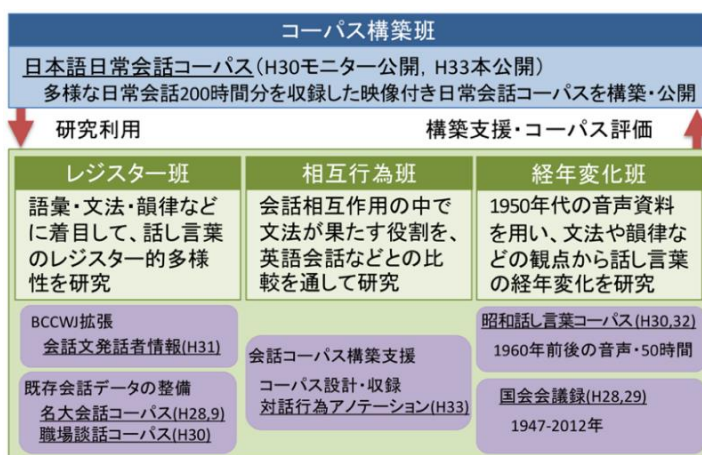
平成 30 年度：『現日研・職場談話コーパス』中納言版を一般公開

平成 30 年度：『昭和話し言葉コーパス』独話 25 時間ひまわり版をモニター公開（経年変化班）

平成 31 年度：BCCWJ 中納言版 会話文発話者情報の拡張（レジスター班）

平成 32 年度：『昭和話し言葉コーパス』50 時間ひまわり版を本公開（経年変化班）

各班の研究成果をとりまとめて論文集を編纂し、平成 33 年度末までに 1 冊以上刊行する。



### ● 年次計画

28 年度	会話コーパス整備  その他のデータ整備  研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の開始 アノテーション仕様策定・自動付与システム整備 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成開始 [国会会議録検索システム] 構築・公開 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 [名大会話コーパス] 形態論情報付与 班ごとに研究会合を持ち研究を始動 シンポジウム 1 回, 班合同研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催 『名大会話コーパス』一般公開 (形態論情報付きテキスト検索版)
29 年度	会話コーパス整備  その他のデータ整備  研究 成果発表 若手育成	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正開始 プロジェクト内部のデータ公開 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成継続 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続 既存データを中心とする予備研究を推進 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催

30年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>その他のデータ整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正継続</p> <p>[昭和話し言葉コーパス] アノテーション開始, モニター公開準備</p> <p>[BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始</p> <p>既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開</p> <p>シンポジウム・ワークショップ3回開催</p> <p>フォーラム(日本語の変化を探る)1回開催</p> <p>コーパス講習会2回開催</p> <p>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開</p> <p>『昭和話し言葉コーパス』25時間モニター公開(うち許諾が取れたもの)</p> <p>『現日研・職場談話コーパス』一般公開</p>
31年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>その他のデータ整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正継続</p> <p>[昭和話し言葉コーパス] アノテーション継続</p> <p>既存データにモニター公開データを加えて研究を開始・コーパス評価</p> <p>シンポジウム3回開催</p> <p>コーパス講習会2回開催</p> <p>『BCCWJ 発話者情報』一般公開(中納言版)</p> <p>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開(継続)</p> <p>『昭和話し言葉コーパス』モニター公開(継続)</p>
32年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正継続</p> <p>既存データにモニター公開データを加えて研究を推進・コーパス評価</p> <p>シンポジウム2回開催</p> <p>コーパス講習会2回開催</p> <p>『昭和話し言葉コーパス』本公開</p> <p>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開(継続)</p>
33年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>成果物公開</p>	<p>公開準備(データ統合・検証, 個人情報処理など)</p> <p>研究成果のとりまとめ</p> <p>シンポジウム1回開催</p> <p>『日本語日常会話コーパス』本公開</p> <p>論文集の刊行1冊以上</p>

## II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,500千円

### 30年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

・構築中の『日本語日常会話コーパス』を昨年度, 本プロジェクトおよび領域指定型プロジェクト「創発

参与」のメンバーに限定公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせて研究を推進した。その成果報告としてシンポジウム「日常会話コーパス」IVを31年3月4日に国語研講堂で開催した。

- ・『日本語日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議 LREC にて国際ワークショップ `Language and Body in Real Life` を30年5月7日に開催した。Multimodal Corpora2018 と共同開催することで日常会話のマルチモーダル分析についての議論も深めた。
- ・話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム `EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium` を創発参与プロジェクトと合同で31年3月11日に国語研講堂で開催した。Keevallik 氏による招待講演も行き、相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた。
- ・『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を対象にデータの仕様や特徴を報告書としてとりまとめ、ホームページで公開した。
- ・以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文8件、報告書1冊、発表・講演62件、データベース等6件（うち3件はプロジェクト内限定）として公開した。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・構築中の『日本語日常会話コーパス』のうち50時間の会話を対象に、30年12月4日にモニター公開を開始した。本コーパスは映像・音声データを含め多角的に分析できる世界でも類を見ないコーパスであり、言語学や日本語学に留まらず、日本語教育や国語教育、社会学、認知科学、情報工学、人工知能、産業界など、幅広い分野の研究者からの利用申請があった。
- ・1950年代から1970年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料『昭和話し言葉コーパス』のうち、当時の所員による講演を中心とする17時間の独話を対象に、30年3月29日にモニター公開を開始した。
- ・『女性のことば・男性のことば-職場編-』（ひつじ書房）のデータをコーパスとして再整備し、出版社の許諾を得た上で、『現日研・職場談話コーパス』としてオンライン検索システム「中納言」にて2018年8月20日に一般公開した。
- ・コーパス関係のプロジェクトや科研と合同で、30年9月7日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション-モダリティ-」を国語研で開催し、プロジェクト間の連携を深めた。
- ・「通時コーパス」プロジェクトが31年3月9日に開催した「通時コーパス」シンポジウム2019において本プロジェクトは共催として関わり、共同でテーマセッション『歴史的音源資料と日本語研究』を企画して連携を深めた。

## 3. 教育に関する計画

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象に、第5回コーパス利用講習会（検索システム「ひまわり」「中納言」の2コース）を2018年9月3日に、第6回コーパス利用講習会（検索システム「ひまわり」）を2018年3月3日に開催した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。
- ・プロジェクトの共同研究員が、お茶の水女子大学の演習において、『日本語日常会話コーパス』プロジェクト内限定公開データを用いて日常生活の話し言葉を対象とする演習を実施した。コーパス構築班は、

全文検索システムの提供やデータの活用方法のアドバイスなどの支援を行った

- ・共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を提供し、コーパスを活用した研究を支援することによって、博士論文1本(千葉大学)、修士論文2本(アルバータ大学・早稲田大学)、卒業論文3本(お茶の水女子大学)の成果に結びついた。
- ・共同研究員として大学院生5名をプロジェクトに参画させ、コーパスに基づく定量的分析方法を教授するなど大学院生の研究を支援した。また大学院生を含む若手の非常勤研究員を対象に、会話データを優先的に研究利用できるようにすると同時に、データベース設計やSQL, Rを用いた統計分析など、コーパスの活用方法について実践的に学ぶ勉強会を開催した。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に公開し、合計で7233件の新規利用申請があった。
- ・「通時コーパス」プロジェクトと共同で、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラム「日本語の変化を探る」を30年11月4日に一橋講堂で開催した。

#### 5. グローバル化に関する計画

- ・『日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議LRECにて国際ワークショップ‘Language and Body in Real Life’を開催した。
- ・話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム‘EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium’を創発参与プロジェクトと合同で31年3月11日に国語研講堂で開催した。Keevallik氏による招待講演も行い、会話相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた。
- ・海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。

#### 6. その他

該当する活動なし。

### Ⅲ. 項目ごとの状況

#### 1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</b> [公開研究発表会・講演会、国際シンポジウム]	
1. 構築中の『日本語日常会話コーパス』を昨年度、本プロジェクトおよび領域指定型プロジェクト「創発参与」のメンバーに限定公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせて研究を推進した。その成果報告として、 <u>シンポジウム「日常会話コーパス」IV</u> を「創発参与」プロジェクトと合同で31年3月4日に国語研講堂で開催した。口頭発表5件、ポスター発表22件、デモンストレーション1件、参加者	

は155名（うち学生18名）であった。

2. 話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム`EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium` を、創発参与プロジェクトと合同で31年3月11日に国語研講堂で開催した。Keevalik氏による招待講演も行い、会話相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた。参加者は46名（うち学生7名）であった。
3. 『日本語日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議LRECで国際ワークショップ`Language and Body in Real Life` を30年5月7日に開催した。Multimodal Corpora2018と共同開催することで日常会話のマルチモーダル分析についての議論も深めた。プロジェクトからはリーダーの小磯を含め5名が発表した。参加者は35名（海外機関所属者20名、学生3名）であった。
4. 『現日研・職場談話コーパス』中納言版の一般公開に合わせ、同コーパス公開記念シンポジウムを30年9月3日に国語研講堂で開催した。構築中の『日本語日常会話コーパス』で拡充予定の職場会話の収録法や設計などについて、職場データの構築者らと議論した。参加者は64名（海外機関所属者1名、学生17名）であった。
5. 30年9月7日にコーパス合同シンポジウムを開催した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。
6. 話し言葉の経年変化研究について議論を深めるために、招待講演者2名を迎え、公開研究会を平成30年11月24日に国語研多目的室で開催した。参加者は20名（学生1名）であった。

[フィールド調査]

7. 調査協力者7名を対象とする会話の収録調査を実施し、個人密着法による収録調査（合計40名、合計約590時間、コーパス格納データ180時間相当）を終えた。職場会話など不足する場面を検討し、平成31年度の調査計画（残り20時間分）を立てた。

[研究成果の公表]

8. 構築中の『日本語日常会話コーパス』『昭和話し言葉コーパス』の一部をモニター公開、『現日研・職場談話コーパス』中納言版を一般公開した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。
9. 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を対象にデータの仕様や特徴を報告書としてとりまとめ、ホームページで公開した。
10. 以上の研究成果は、論文8件、報告書1冊、発表・講演62件、データベース等6件（うち3件はプロジェクト内限定）として公開した。
11. 『日本語日常会話コーパス』は、多様な日常会話を、映像まで含め収録・公開するというものであり、世界的に見ても新しい取り組みである。コーパスの設計や法的・倫理的対応方針などについて国際会議LRECでも注目された。

## (2) 研究実施体制等に関する計画

1. コーパスに基づく話し言葉研究を推進するために、国内外の研究者45名をプロジェクト共同研究員として組織した。今年度は、日本語学（音声・語彙・文法・談話）、自然言語処理、音声工学の分野の研究者の拡充を図った。
2. プロジェクトの共同研究員が、お茶の水女子大学の現代日本語学演習において、『日本語日常会話コーパス』プロジェクト内限定公開データを用いて日常生活の話し言葉を対象とする演習を実施した。コー

パス構築班は、全文検索システム・テスト版の提供やコーパス活用方法のアドバイスなどの支援を行った。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
[データベース等の構築・公開]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『日本語日常会話コーパス』のうち50時間の会話を対象に、30年12月4日にモニター公開を開始した。形態論情報での検索が可能なオンライン検索システム「中納言」での公開（検索システムはコーパス開発センターと共同で開発）と、映像音声データを含むハードディスクでの公開（HDD版）の2つを採用した。中納言版（完全無償）については1221件の新規契約が、HDD版（実費負担）については170件の新規契約申請があった。</li> <li>2. 『日本語日常会話コーパス』についてはこのほか、本公開の準備として、データ収録・転記・アノテーション作業を進めた。アノテーションとしては、これまで進めてきた短単位・談話行為（ISO24617-2日本語拡張版）に加え、長単位・文節に着手した。また係り受け・述語項構造については、コーパス開発センターと共同で方針を検討した。</li> <li>3. 1950年代から1970年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料『昭和話し言葉コーパス』のうち、当時の所員による講演などを中心とする17時間の独話を対象に、30年3月29日にモニター公開を開始した。また会話25時間の整備を継続し、本公開の準備を進めた。</li> <li>4. BCCWJにおける会話文（2557ファイル分）に対する発話者情報（話者名・性別・年代）の付与作業を終え、プロジェクトメンバーに限定して31年3月25日に公開した。また31年度の一般公開に向け、コーパス開発センターと共同で検索システム「中納言」での公開方法について検討した。</li> <li>5. 『女性のことば・男性のことば-職場編-』（ひつじ書房）のデータをコーパスとして再整備し、出版社の許諾を得た上で、『現日研・職場談話コーパス』としてオンライン検索システム「中納言」にて2018年8月20日に一般公開した（検索システムはコーパス開発センターと共同で開発）。280件の新規契約があった。</li> </ol>	
[データベース等に関する講習会]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>6. プロジェクトで整備公開したコーパスを対象とする講習会として、<u>第5回コーパス利用講習会</u>（検索システム「ひまわり」「中納言」の2コース）を2018年9月3日に、<u>第6回コーパス利用講習会</u>（検索システム「ひまわり」）を2018年3月3日に開催した、それぞれ30名、24名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。</li> <li>7. 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の利用講習会を3月3日に開催し、24名が参加した。</li> </ol>	
[データベース等を使った研究成果]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>8. プロジェクトで整備した上記コーパスを用いた研究発表を以下の通り実施した（研究成果の一部を抜粋）。[1] LREC2018：6件，[2] Symposium `Annotation of speech corpora`：1件，[3] 職場談話コーパス公開記念シンポジウム：4件，[4] 言語資源活用ワークショップ8件，[6] NINJALシンポジウム：3件，[5]シンポジウム「日常会話コーパス」IV：29件，ほか音響学会・計量国語学会・文法学会・言</li> </ol>	

語処理学会などで発表。

9. 30年12月に公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版は、日常生活における言葉の特徴や言語行動を、映像・音声データを含め多角的に分析できる世界でも類を見ないコーパスであり、言語学や日本語学に留まらず、日本語教育や国語教育、社会学、認知科学、情報工学、人工知能、産業界など、幅広い分野の研究者からの利用申請があった。
10. 既公開の『名大会話コーパス』は、会話研究・日本語教育研究において広く利用されており、今年度、「中納言」版は3578件の新規契約が、ひまわりパッケージ版は254件の新規利用があった。平成28年4月のプロジェクト開始時点では、「中納言」で検索可能な日本語母語話者の会話コーパスは存在しなかったが、今年度公開した『職場談話コーパス』や『日本語日常会話コーパス』モニター版とあわせ、コーパスに基づく会話研究の基盤が整備された。

## (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. プロジェクト間の連携を深め、コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるために、「方言コーパス」、「通時コーパス」、「学習者コーパス」、「コーパスアノテーション」など、コーパス構築に関わる複数のプロジェクトと合同でシンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション-モダリティ-」を30年9月7日に国語研講堂で開催した。参加者は83名（うち学生15名、国外機関所属者1名）であった。「通時コーパス」プロジェクトが31年3月9日に開催した「通時コーパスシンポジウム2019」において、本プロジェクトは共催として関わり、共同でテーマセッション『歴史的音源資料と日本語研究』を企画してプロジェクト間の連携を深めた。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

平成28年度の計画段階では、『日本語日常会話コーパス』の音声・映像データのモニター公開は平成31年度に予定していたが（「平成28年度実施計画・年次計画（ロードマップ）」参照）、関連分野の研究者からの公開への強い要望を受け、平成28～30年度において予定を上回るペースでコーパス構築を進めた結果、1年前倒しで音声・映像データを含めて公開することができた。

## 3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b>	
<b>(2) 人材育成に関する計画</b>	
[プロジェクト非常勤研究員の雇用]	
1. 若手研究者を育成するために、非常勤研究員（PDフェロー）を1名、プロジェクト非常勤研究員を5名雇用した。	
[大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加等・発表機会の提供・研究費の支援]	
2. 共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を提供し、コーパスを活用した研究を支援することによって、博士論文1本（千葉大学）、修士論文2本（アルバータ大学・早稲田大	

学)、卒業論文3本(お茶の水女子大学)の成果に結びついた。

3. 大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、会話データを優先的に研究利用できるようにすると同時に、データベース設計やSQL、Rによる統計分析などコーパスの活用方法について実践的に学ぶ勉強会を開催することによって、若手研究者の研究活動を支援した。
4. 若手の非常勤研究員および大学院生の共同研究員6名に対し、シンポジウム「日常会話コーパス」IV(31年3月4日)で発表の機会を提供した。
5. 若手の非常勤研究員1名に対し、国際会議での発表の経費を援助した。

[講習会]

6. 若手研究者を主対象に、コーパス利用に関する講習会を9月3日と3月3日に開催した。(参加者数など詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照)
7. 学生などの初学者を対象に、コーパスなどのデジタル言語資源の研究活用方法を学ぶ「言語研究のためのデジタル研究入門ワークショップ」に共催として関わり、話し言葉コーパスの活用に関わる方法論について講義した。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b> 特になし。	
<b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b> [一般向け講義・講演会等]	
1. 「通時コーパス」プロジェクトと共同し、日本語の変化をテーマとする <u>一般向けのフォーラム「日本語の変化を探る」</u> を30年11月4日に一橋講堂で開催した。本プロジェクトで構築中の『昭和話し言葉コーパス』などを活用し、話し言葉の変化をテーマに講演した。参加者は357名であった。	
[インターネット等を通じた研究成果の社会への発信]	
2. プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信し、合計で7233件の新規利用申請があった。(詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照)。	
3. コーパス利用講習会の資料をプロジェクトのホームページを通じて一般に発信した。	

#### 5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 国際的協業に関する計画</b> [海外の研究者の受入]	
1. 海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、日常会話コーパスを用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。	
<b>(2) 国際的発信に関する計画</b>	

[国際シンポジウムの開催]

1. 『日本語日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議 LREC にて国際ワークショップを開催した（詳細は「1. 研究に関する計画」を参照）。
2. 話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム`EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium` を開催し、会話相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた（詳細は「1. 研究に関する計画」を参照）。

## 6. その他

該当する活動なし。

## 平成30年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおり実施している

研究については、コーパスの開発と公開を予定通り進め、国内向けおよび国際的な学術集会をそれぞれ複数開催して成果発信や研究交流に務めている。特に『日本語日常会話コーパス』は世界的にも新規性が高い内容であり、一般の人々がデータの収録や承諾書の収集をすることによって自然な日常会話を収録するという方法に関しても注目に値する。

共同利用・共同研究については、『日本語日常会話コーパス』と『昭和話し言葉コーパス』を各々部分的にモニター公開し、BCCWJ 会話文発話者情報の一般公開の準備を進め、『現日研・職場談話コーパス』を一般公開した。また、これらを含むコーパスの利用に関する講習会や、コーパス構築に関わる他のプロジェクトと合同の研究集会を開催した。

教育については、若手研究者の雇用と学生のプロジェクトへの参画、彼らへの発表の機会の提供、チュートリアル等の開催、コーパスの提供などを引き続き計画通り行なっている。

社会との連携及び社会貢献については、日本語の変化に関する一般向けのフォーラムを開催し、本プロジェクトの知見に基づいて講演した。『日本語日常会話コーパス』等のコーパスやコーパス利用講習会の資料をホームページで一般公開している。

グローバル化については、海外在住の研究者によるコーパスの評価、『日本語日常会話コーパス』に係る成果発信と研究連携のために国際ワークショップおよび話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウムを開いた。

以上すべての項目にわたってプロジェクトが計画通り実施されていると考えられる。今後のコーパスの開発・改良のため、特に利用者の多いコーパスに関してその利用状況を調査し利用者のニーズや評価を分析してみると良いのではないかと。

報告書の中で1~5に関する記述が重複していてややわかりにくい。もちろんコーパスやデータベースにはいろいろな側面があるが、たとえば研究に関してはデータの種類や集め方やアノテーション

ョンの内容に重点を置き、共同利用・共同研究に関しては公開や講習会に重点を置いて記述するなど、1～5の区別をわかりやすく書いていただけると有難い。

## 《評価項目》

### 1. 研究について

コーパスの開発を予定通り進め、コーパス3件とデータベース3件を公開するとともに、国内シンポジウム3回、国内研究会1回、国際シンポジウムと国際ワークショップ各1回を開催して、開発したコーパスを用いた研究成果の発信や関連テーマに関する研究交流に務めている。報告書のWeb公開や、論文、書籍、学会発表等でも研究成果を積極的に発信している。

特に『日本語日常会話コーパス』は映像も含む日常会話のデータであるという点で世界的にも新しく、コーパスの設計や法的・倫理的対応方針も注目されており、また利用希望も多く寄せられている。報告書の中では明示的に触れられていないが、研究者が現場に介在せず一般の人々がデータの収録や承諾書の収集をすることによって自然な日常会話を収録するという方法も良好に実践されている。

### 2. 共同利用・共同研究について

『日本語日常会話コーパス』を「中納言」およびハードディスクによって部分的にモニター公開し、多くの新規利用者を得た。また、『昭和話し言葉コーパス』の一部のモニター公開を開始した。BCCWJへのアノテーションをプロジェクト内で限定公開し、次年度の一般公開に向けて準備を進めている。『女性のことば・男性のことば 職場編』のデータを『現日研・職場談話コーパス』として再整備し、「中納言」で一般公開した。これらを含むコーパスの利用に関して3回の講習会を開催し、その資料をWebで公開した。

並行して、コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるため、コーパス構築に関わる他の複数のプロジェクトと合同のシンポジウムを開催した。また、「通時コーパスシンポジウム2019」を「通時コーパス」プロジェクトと共催して連携を深めた。

### 3. 教育について

ポスドクを含む若手研究員の雇用や国際会議での発表費用の援助などの経済的支援、『日本語日常会話コーパス』等のデータの活用法を実践的に学べる場や研究発表の機会を多く提供している。また、初学者がデジタル言語資源の研究利用について学ぶためのワークショップを共催し、話し言葉コーパスの活用法について講義するなど、計画通り若手研究者の育成に務めていると言える。

### 4. 社会との連携及び社会貢献について

「通時コーパス」プロジェクトと共同で日本語の変化に関する一般向けのフォーラムを開催し、本プロジェクトで構築中のコーパスなどの知見に基づいて講演した。『日本語日常会話コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』をインターネットにより一般に公開し、多くの新規利用申請を受けた。他にも、コーパス利用講習会の資料もホー

ムページで一般公開するなど，広く社会に向けて研究成果を発信していると認められる。産業界や地域社会との連携の可能性もあるかも知れない。

#### 5. グローバル化について

海外在住の研究者をプロジェクト共同研究員としてコーパスを評価してもらっている。国際学術集会としては、『日本語日常会話コーパス』に係る成果発信と研究連携のために国際ワークショップを開催し，また話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウムを開いた。

#### 6. その他特記事項

特になし。

# 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

## I. プロジェクトの概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

### 2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

学習者のコミュニケーション	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度
日本語使用班 自然会話コース (宇佐美班)	294 会話を公開	333 会話を所内先行公開	データ拡充 30年:13 会話(26 人分), 31年:22 会話(44 人分) 32年:23 会話(46 人分), 33年:22 会話(44 人分)			本格公開 400 会話(800 人分)
日本語学習者 コース (野山班・石黒班)	「多言語母語の日本語学習者横断コース(I-JAS)」データ公開 第1次(28年)225 名分 第2次(29年)225 名分		「I-JAS」データ公開 第3次 210 名分	「I-JAS」データ公開(完了) 第4次 215 名分 第5次 175 名分	「I-JAS」既公開データの確認・修正 コースの維持・運用	
	「北京日本語学習者縦断コース(B-JAS)」データ収集				「B-JAS」データ公開	
日本語理解班 読解・聴解コース (野田班・石黒班)	「日本語非母語話者の読解コース」	データ公開 45 件	データ公開 (30年度:40 件, 31年度:20 件, 32年度:10 件)			本格公開
	「聴解コース」	データ公開(31年度:20 件, 32年度:30 件)				
	「日本語学習者の文章理解過程データベース」	データ試験公開 (3 名分)	データ公開			本格公開
リソース開発班 基本動詞辞典 (パルデシ班)	毎年 15 見出しをウェブ公開					
ウェブ版教材の開発 (野田班)		教材公開 (読解・聴解計 28 件)	毎年, 5 件(読解, 聴解の合計)の教材を公開			本格公開
国際シンポジウム等		INJAL 国際シンポジウム(ICPLJ)開催			国際シンポジウム開催	
日本語使用班 (宇佐美班)	講習会を年 3 回以上開催 シンポジウムを年 2 回開催		毎年, 講習会を 2 回, シンポジウムを 2 回開催			
日本語使用班 (野山班・石黒班)	ワークショップを年 1 回以上開催					
日本語理解班 (野田班・石黒班)	NINJAL チュートリアル開催	毎年, シンポジウムを開催				
基本動詞辞典 (パルデシ班)	毎年 1 回公開研究発表会を開催					
			海外でチュートリアルを実施			
刊行・出版		学習者の作文能力に関する論文集刊行	学習者の会話能力に関する論文集, 読解活動に関する教師指導書刊行	学習者の読解過程, 基本動詞辞典に関する論文集刊行	学習者の読解過程に関する論文集, 読解教材開発に関する研究書刊行	学習者の日本語習得過程, 聴解過程に関する論文集刊行

### 平成 28 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ⑤ウェブ版読解教材の開発に着手する。

### 平成 29 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ⑤ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ⑥NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) を開催する。

### 平成 30 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ⑤ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ⑥学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ⑦学習者の読解活動に関する教師指導書を刊行する。

### 平成 31 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ⑤ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ⑥学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

### 平成 32 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ⑤ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ⑥学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ⑦読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ⑧日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

## 平成 33 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ③日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ⑤ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ⑥学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ⑦学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

## II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,500 千円

### 30年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

プロジェクトを推進するために、国内外の日本語教育研究者 149 名で 3 つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。また、プロジェクトの所内メンバーが 4 冊の研究論文集の編集を行い、1 冊の研究論文集を刊行した。

- ・日本語学習者の読解活動を分析した論文集『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』（石黒圭編，ココ出版）を刊行した（2018 年 6 月刊行）。
- ・プロジェクトの共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で論文 21 件（ブックチャプター含む）、図書 1 冊，データベース 7 件，学術発表・学術講演 72 件，一般向け講演・セミナー 12 件，講習・チュートリアル 13 件を公開・刊行した。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

日本語使用班は、2 件のコーパス構築を前年度から継続して行い、6 件の講習会と 4 件のシンポジウムを行った。

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスである『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）所内先行リリース版（2017 年度）』にさらに整備，修正を行い、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』333 会話（延べ 666 人のデータ）を一般公開した。また，シンポジウムを 2 件，BTSJ の活用方法講習会を 3 回（参加者合計 77 名，うち国外機関所属者 6 名，学生 33 名）行った。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスである『I-JAS（International corpus of Japanese As a Second language）多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築を前年度から継続して行い，2018 年 5 月 21 日に，第三次公開として 210 名分の発話データを公開した。また，2018 年 4 月 30 日にシンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる－横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴－」を開催し（参加者 138 名，うち国外機関所属者 6 名，学生 51 名），I-JAS と B-JAS のデータを用いた講演と研究発表を行った。さらに，2018 年 12 月 22 日，「第四回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム－第二言語習得における語彙の役割－」を開催し，シンポジウムには 110 名の

参加者（うち、国外機関所属者 5 名、学生 33 名）を得た。ワークショップ（講習会）はこの回を含め、計 3 回行った。

- ・連携協定を結んでいる北京日本語学研究センターと共同で、日本語習得過程に関するデータ収集を春と秋に行った（国内 1 回、海外 2 回）。

日本語理解班は、2 件のコーパス構築を前年度から継続して行った。

- ・日本語学習者の読解コーパスとして、『日本語非母語話者の読解コーパス』と『日本語学習者の文章理解過程データベース』を前年度から継続して構築した。構築のためのデータ収集を行うとともに、前者は 30 件のコーパスデータ、後者は 60 名分のコーパスデータを公開した。

リソース開発班では、3 件の辞典・教材の作成を継続し、データの追加公開を行った。また、シンポジウム 1 件を開催、論文集 1 冊の編集を進めた。

- ・オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成を継続し、2019 年 3 月に 15 見出しを追加する予定。また、2018 年 12 月に 17 見出しの音声コンテンツ、27 見出しにミニアニメコンテンツを追加した。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、「ホテル検索サイト」シリーズ 5 レッスン、「旅行のパンフレット」シリーズ 1 レッスン、「通商白書」シリーズ 3 レッスン、「人的資源関連の研究論文」シリーズ 4 レッスンの教材合計 13 レッスンの教材を公開した。
- ・ウェブ版聴解教材の開発を継続した。

連携協定を結んでいる北京日本学研究中心・国際交流基金日本語国際センターともさらに共同研究を進めた。上述の、北京日本語学研究センターと共同調査によるデータ収集、および合同シンポジウムの開催のみならず、下記のような進展も見られた。

- ・北京日本学研究中心・国際交流基金日本語国際センターと共催で 2018 年 7 月 31 日に国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ—」を開催した。
- ・国際交流基金日本語国際センターと協力し、論文集『コミュニケーションのための日本語聴解教材の作成』（野田尚史・中尾有岐編、ひつじ書房）の編集を進めた。

### 3. 教育に関する計画

- ・PD フェローを 2 名雇用し、日本語教育に関する研究指導を行った。さらに、大学院生 11 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
- ・12 名の大学院生をコーパスの構築作業に参加させ、コーパスを用いた研究の指導を行った。

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

外国人にとってわかりやすい日本語という視点を取り入れたビジネス日本語のプロジェクトを、企業関係者を中心とした日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、2 件の学会発表を行った。

また、日本語教師セミナーを国内 1 回、国外 2 回の計 3 回開催した。国内では、「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」を国立国語研究所で行い、129 名（うち国外機関所属者 3 名、学生 12 名）が参加した。国外では、「自然会話コーパスを活用した日本語教育」を 2 回オーストラリアで行い、計 58 名（うち国外機関所属者 23 名、学生 5 名）が参加した。

その他、2018 年 6 月 9 日にシンポジウム「ピア・リーディング授業の考え方」（国立国語研究所）を開

催し、参加者は161名（国外機関所属者7名、学生41名）を得た。さらに、日本語教師や大学教員を主な対象とした講演を3件行った。

### 5. グローバル化に関する計画

海外在住の研究者44名を共同研究員として加え、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。また、連携協定を結んでいる北京日本学研究中心とは、共同で日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を行い、2件のシンポジウムを開催し（詳細は、「2. 共同利用・共同研究に関する計画」参照）、オンライン日本語基本動詞ハンドブックおよび日本語文型バンクについては、海外5カ所でそれぞれデモ発表を行った。プロジェクトに関わる国際会議は合計で、学術発表・学術講演が33件、一般向け講演・セミナーが3件、講習・チュートリアルが7件であった。

### 6. その他

『みんなの日本語 初級 I, II 翻訳・文法解説』のマラーティー語版を2018年12月22日に Sachi Prakashan 出版からインド・プネーで刊行した。

## III. 項目ごとの状況

### 1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</b>	
1. 下記の論文集の編集を進めた。	
・野山広編『 <u>地域に定住する外国人の日本語会話習得と言語生活（仮題）</u> 』（ココ出版）（2019年7月入稿、2020年1月刊行予定）	
2. 下記の教師指導論文集の編集を進め、刊行した。	
『 <u>どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学</u> 』（石黒圭編、ココ出版）（2018年6月刊行）。	
3. オンライン日本語基本動詞ハンドブックに関しては、本年度は公開研究会を開催せず、プロジェクトの成果を論集としてまとめることにした。	
・プラシャント・パルデシ、靱山洋介、砂川有里子、今井新悟、今村泰也 編『 <u>多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用</u> 』（開拓社）の編集作業を開始した（2019年11月刊行予定）	
4. その他、下記の論文集の刊行準備を進めた。	
・野田尚史・迫田久美子編『 <u>学習者コーパスと日本語教育研究</u> 』（くろしお出版）（入稿終了、2019年5月刊行予定）	
・野田尚史編『 <u>日本語学習者の読解過程</u> 』（ココ出版）（2019年5月入稿、2019年11月刊行予定）。	
5. プロジェクト共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で論文21件（ブックチャプター含む）、図書1冊、データベース7件、学術発表・学術講演72件、一般向け講演・セミナー12件、講習・チュートリアル13件をそれぞれ公開・刊行した。	

## (2) 研究実施体制等に関する計画

1. プロジェクトを推進するために、国内外の日本語教育研究者 149 名で3つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。
2. 本プロジェクトの研究遂行のために、PD フェローを2名、プロジェクト非常勤研究員を12名、技術補佐員を7名雇用した。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価

計画を上回って実施した

### (1) 共同利用・共同研究に関する計画

1. 下記のデータの一般公開，追加，および講習会，シンポジウムを行った。
  - ・『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）所内先行リリース版（2017年度）』にさらに整備，修正を行い，『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018年版』333 会話（延べ666人のデータ）として2018年8月31日に一般公開した。
  - ・『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018年版』に新たに13会話（26人分）の追加データを作成した（公開は2019年度）。
  - ・「BTSJ 活用方法講習会」を3回（2018年7月14日，東京外国語大学，2018年12月8日（2回実施），国立国語研究所）行った。参加者は，7月14日が47名（うち，国外機関所属者3名，学生20名），12月8日の初級者向け・既修者向けの2回が計30名（うち，国外機関所属者3名，学生13名）であった。
  - ・2018年6月23日に「第3回会話・談話研究シンポジウム『AIと言語研究（1）－ポライトネスとAI－』（国立国語研究所）（担当：宇佐美まゆみ）を開催し，参加者は57名（国外機関所属者4名，学生20名）であった。
  - ・2018年7月14日にシンポジウム「自然会話分析と言語社会心理学（東京外国語大学）（担当：宇佐美まゆみ）を開催し，参加者は47名（国外機関所属者3名，学生20名）であった。
2. 下記のデータの公開に加え，2件のシンポジウムを開催した。
  - ・平成30年度は，多言語を母語とする日本語学習者コーパス（I-JAS）の構築の3年目に着手し，三次公開（2018年5月21日）を行った。今回は，日本語学習者210名分（中国語母語話者50名，ベトナム語母語話者35名，ハンガリー語母語話者35名，スペイン語母語話者35名，ロシア語母語話者35名，国内教室環境学習者10名，国内自然環境学習者10名）のデータを公開した。
  - ・2018年4月30日に，シンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる－横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴－」（国立国語研究所）を開催した。第一部は「多言語を母語とする日本語学習者コーパス（I-JAS）」のデータを用いた基調講演1件とB-JASの紹介，第二部はB-JASのデータを用いた研究発表3件を行った。参加者は138名（うち国外機関所属者6名，学生51名）であった。
  - ・2018年12月22日に，「第四回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム－第二言語習得における語彙の役割－」（東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター）を行った。シンポジウムの参加者は110名（うち，国外機関所属者5名，学生33名）であった。

- ・I-JAS ワークショップは、計3回（2018年10月12日横浜国立大学で1回、2018年12月23日上記「第四回学習者コーパス・ワークショップ」で2回）実施した。参加者は、10月12日が17名（うち、学生16名）、12月23日の初心者向け・既修者向けの2回が計48名（うち、国外機関所属者2名、学生17名）であった。

3. 下記のデータの公開を行った。

- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、著作権使用の許諾を得られなかったものを除き、「日本語非母語話者の読解コーパス」30件を公開した。
- ・「日本語学習者の文章理解過程データベース」の構築を継続し、60名分のコーパスデータを公開した。

4. オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成を継続し、2019年3月に15見出しを追加公開した。また、30年12月に17見出しの音声コンテンツ、27見出しにミニアニメコンテンツを追加した。

5. ウェブ版読解教材の開発を継続し、「ホテル検索サイト」シリーズ5レッスン、「旅行のパンフレット」シリーズ1レッスン、「通商白書」シリーズ3レッスン、「人的資源関連の研究論文」シリーズ4レッスンの教材合計13レッスンの教材を公開した。ウェブ版聴解教材の開発も継続した。

**(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画**

1. 連携協定を結んでいる北京日本語学研究センターと共同で春と秋にデータの収集を行ったほか、研究成果を発表する合同シンポジウムを開催した。

- ・2018年4月23日に北京師範大学において（中国帰国者対象、担当：石黒圭）、2018年4月28日～29日に国立国語研究所において（日本留学生対象、担当：布施悠子、田中啓行）、2018年9月8日、9日に北京師範大学において（担当：野山広、布施悠子）、それぞれ「北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）」のデータ収集を行った。
- ・2018年4月30日に、I-JASとB-JASのデータを用いたシンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる－横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴－」（国立国語研究所）を北京日本語学研究センターと合同で開催した。詳細は、本欄の項目（1）の2.を参照。

2. 連携協定を結んでいる国際交流基金日本語国際センターと論文集刊行の準備を進め、また、共催でシンポジウムを開催した。

- ・野田尚史と国際交流基金日本語国際センターの中尾有岐との共編で論文集『コミュニケーションのための日本語聴解教材の作成』（ひつじ書房）の編集を進めた。
- ・連携協定を結んでいる北京日本学研究中心・国際交流基金日本語国際センターと共催で2018年7月31日に国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて－学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ－」（国際交流基金日本語国際センター）（企画者：野田尚史）を開催した。参加者は113名（うち国外機関所属者19名、学生34名）であった。

**3. 教育に関する計画**

自己点検評価	計画どおりに実施した
<b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b>	
1. 12名の大学院生をコーパスの構築作業に参加させ、コーパスを用いた研究の指導を行った。	

## (2) 人材育成に関する計画

1. プロジェクト常勤研究員 (PD フェロー) を 2 名雇用し、日本語教育に関する研究指導を行った。
2. 大学院生 11 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。

## 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

### (1) 産業界や地域社会との連携に関する計画

1. 日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、富士通研究所のメンバーと学会におけるパネル発表 2 件を行った。

### (2) 研究成果の社会への普及に関する計画

1. 日本語教師等を対象とする研修会を国外で 2 回、国内で 1 回開催した。
  - ・ 2018 年 11 月 1 日に日本語教師セミナー「自然会話コーパスを活用した日本語教育」(国際交流基金シドニー日本文化センター) (担当: 宇佐美まゆみ) を行い、38 名 (うち国外機関所属者 3 名, 学生 2 名) が参加した。
  - ・ 2018 年 11 月 5 日に日本語教師セミナー「自然会話コーパスを活用した日本語教育」(メルボルン大学) (担当: 宇佐美まゆみ) を行い、20 名 (うち国外機関所属者 20 名, 学生 3 名) が参加した。
  - ・ 2019 年 2 月 9 日に日本語教師セミナー「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」(国立国語研究所) (担当: 野田尚史) を行い、129 名 (うち国外機関所属者 3 名, 学生 12 名) が参加した。
2. 2018 年 6 月 9 日に日本語教師を主な対象としたシンポジウム「ピア・リーディング授業の組み立て方」(国立国語研究所) を開催し、参加者は 161 名 (国外機関所属者 7 名, 学生 41 名) であった (担当: 石黒圭)。
3. 2018 年 9 月 29 日に日本語教師を主な対象とした研究発表会「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(国立国語研究所) を開催し、参加者は 45 名 (国外機関所属者 3 名, 学生 4 名) であった (担当: 野田尚史)。

## 5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

### (1) 国際的協業に関する計画

1. 海外在住の研究者 44 名を共同研究員として加え、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。
2. 北京日本語学研究センターと共同で春と秋にデータの収集を行ったほか、研究成果を発表するシンポジウムを共同で 2 件開催した。
  - ・「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)」のためのデータ収集を行った。詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画 (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画」参照。
  - ・ 2018 年 4 月 30 日に、北京日本学研究中心と共同でシンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる－横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴－」(国立国語研究所) を開催した。詳細

は「2. 共同利用・共同研究に関する計画 (1) 共同利用・共同研究に関する計画」参照。  
・2018年7月31日に、北京日本学研究中心と共催で国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて―学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ―」を開催した。詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画 (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画」参照。

## (2) 国際的発信に関する計画

1. オンライン日本語基本動詞ハンドブックおよび日本語文型バンクについて、2018年12月25日にインドのチェンナイで、2019年3月5日に台湾の台北で、2019年3月15日にカンボジアのプノンペンで、2019年3月22日にボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボで、2019年3月26日にセルビアのベオグラードで、それぞれデモ発表を行った。
2. プロジェクトに関わる国際会議は合計で、学術発表・学術講演が33件、一般向け講演・セミナーが3件、講習・チュートリアルが7件であった。

## 6. その他

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトおよび科研課題番号18H03575(準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発)と連携し、日本語文型バンクの開発・補充を続行した。今後追加予定の中・上級の文型の整理・分類・意味記述、用例作成の準備作業を進める(担当: プラシヤント・パルデシ)。

## 平成30年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることであり、3つのサブプロジェクトすなわち、①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を軸とした「日本語学習者の日本語使用の解明」、②読解や聴解の過程を可視化することを軸とした「日本語学習者の日本語理解の解明」、③大規模コーパスを利用した音声付きオンライン辞典の作成と②の結果に基づいたウェブ版教材サンプルを作成する「日本語学習のためのリソース開発」で構成されている。2018年度は上記プロジェクトの3年目に当たる。

以下にみるように、いずれの評価項目においても十分な成果をあげており、「A評価」が妥当であると考えられる。とりわけ活動実績の量的側面・連携体制構築の側面・社会的国際的連携の側面において充実した成果がみられる。他方、学習者教育や指導者育成教育などに関わる側面においては具体的な関わり方(院生や若手研究者をプロジェクトに参画させ指導するというあり方以上・以外の多様なあり方)の工夫も含めてさらなる工夫が期待される。

## 《評価項目》

### 1. 研究について

(1) 研究水準及び研究の成果に関しては、2冊の論集の刊行準備、1件の研究発表会の開催が計画されていたが、計画を上回る5冊の論集の刊行ないしはその準備が進められており、また、論文21件、図書1冊、データベース7件、学術発表・学術講演72件、一般向け講演・セミナー12件、広州・チュートリアル13件の公開・刊行が行われており、十二分な成果が上げられている。ただ、2018年度開催予定だったオンライン日本語基本動詞ハンドブックに関する公開研究発表会が開催されず当該内容に関わる論集の刊行準備に代替されたが、オンラインハンドブックであることを踏まえれば、できればワークショップ形式なども含めた公開の発表会等を開催することが望ましいのではないかと。(2) 研究実施体制等に関しては、2項目が計画されていたが、いずれにおいても計画を上回る規模の人員を組織化しており十分な成果をあげている。

### 2. 共同利用・共同研究について

(1) 共同利用・共同研究に関しては、公開の機会を5件にまとめて計画していたが、十二分な成果をあげている。特に上記①に関わる「自然会話コーパス」と「学習者コーパス」(様々な言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパス)の構築に関わって、追加データの公開や講習会やシンポジウムの開催など成果を計画以上に蓄積しており、また②に関わる「読解コーパス」の構築作業、③に関わるハンドブック作成・教材開発に関しても継続して研究を進め成果の追加公開が続いており、十分に評価できる。(2) 実施体制等に関しては、内外の研究機関との共同研究の継続が計画されていたが、データ収集の継続に加えてシンポジウムの合同開催も行われ、充実した活動が行われた。

### 3. 教育について

(1) 大学院等への教育協力に関しては2件の計画があった。研究所としての評価方法の変更に伴って1件のみの実施報告に止まっているが、その1件に関しては計画どおりの院生指導が行われた。(2) 人材育成に関しては2件の計画があったが、共に計画を上回る人員の指導・育成を行っており計画どおりの成果を挙げていると考えられる。ただ、実際の指導・育成の内容については、プロジェクトへの「雇用・参加・研究指導」以上の具体的内容とその教育的効果や成果がはっきりせず、報告書の記述に改善を求めたい。日本語教育学に関わる学術的・教育実践的研究の深化については、日本国内のみならず海外の大学院生や若手研究者等の人材育成も喫緊の課題であり、その社会的要請に対してどのような具体的応答が可能かについても、プロジェクトの視野に含めても良いのではないかと考える。

### 4. 社会との連携及び社会貢献について

(1) 産業界・地域社会との連携及び(2) 社会への普及に関しては、日本語教師セミナー・シンポジウム・研究発表会が計画を上回る回数と規模で開催され、連携・普及の側面において十二分の成果をあげている。ただ、日本語教育や多文化共生に関わる社会状況の流動化は、内外を問わず、関連事業への参入企業・業種の多様化を伴っており、本プロジェクトによって構築されているコー

パスデータの利活用の可能性を積極的に発信していくことも必要ではないか。教材開発・研修（コンサルタント）・人材派遣事業関連の機関・企業などとの連携や本プロジェクトの研究成果の普及に関して一層の工夫を期待したい。

## 5. グローバル化について

（1）国際的協業については2項目、（2）国際的発信については1項目が計画されていたが、計画以上の事業を実施しており、十分な成果をあげている。特に連携協定を結んでいる北京外国語研究センターとの共同作業によるデータ収集やシンポジウムの共同開催などの協業は、密度が高いと評価できる。また、南アジア国際共同ネットワーク構築の一環として、オンライン日本語基本動詞ハンドブック及び日本語文型バンクについてのデモ発表の機会を、日本語教育学に関わる学術研究や日本語教育の実践・普及に関して発展途上の主要地域であるカンボジアのプノンペン、ボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボ、セルビアのベオグラードで開催したことはグローバル化の観点から高く評価できる。多くの地域での開催も期待したい。プロジェクトに関わる国際会議も、学術発表・学術講演 33 件、一般向け講演・セミナー3 件、講習・チュートリアル7 件、計 43 件が開催され、充実した実績を蓄積しており、高く評価できる。

## 6. その他特記事項

特になし。

コーパス開発センター  
センター長：前川 喜久雄

## I. 30年度活動概要

30年度予算総額 69,432 (58,432+11,000) 千円

### 30年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

所内の専任職員・研究員でジャーナル論文 5+1 件, 国語研論集 3 件, 国際会議発表 15 件。  
言語資源活用ワークショップ 2018 を開催。「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の維持管理を実施。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

UniDic (形態素)・Universal Dependencies (係り受け)・分類語彙表(意味)に関する研究を共同研究者と推進。

「中納言」講義用アカウントの枠組を構築。

#### 3. 教育に関する計画

「Praat」「中納言」「梵天」講習会を実施。所内若手研究者向けにオフィスアワーを設定。

言語資源活用ワークショップ 2018 に学生を対象とした優秀発表賞を設定。

茨城大学の修士学生 1 名をインターンシップとして受け入れ。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

ワークスアプリケーションズ徳島人工知能 NLP 研究所と共同研究を開始。

日本語語彙の分散表現データのモデルを公開。中京大学において開催された国語科の教員免許講習への協力。

#### 5. グローバル化に関する計画

Academia Sinica との共同研究を推進。LREC-2018 にて Special Session を実施。CoNLL-2018 Shared Task に係り受けのデータを提供。

#### 6. その他

所内のコーパス開発プロジェクトの支援を実施。

## II. 項目ごとの状況

### 1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. 所内の専任職員・研究員で査読付きジャーナル論文 5 件, 国語研論集 3 件, 国際会議発表 15 件, 解説論文 (日本語の研究 1 件) の業績。 業績の内訳は【項番 2. (1) 1.】【項番 2. (1) 2.】など。 言語処理学会第 25 回年次大会にて言語資源賞を受賞。また言語処理学会論文誌「自然言語処理」2018 年度優秀論文賞を受賞。 2019 年度にもジャーナル論文 5 件, 国際会議発表 3 件予定。 上の業績とは別に音声学会の国際発信事業の一環として, 過去の Best Paper 2 編が英訳され学会誌『音声研究』に掲載された。</p> <p>2. 「言語資源活用ワークショップ 2018」を 9/4, 5 に開催。</p> <p>3. 「コーパスとしてのウェブテキスト活用シンポジウム」9/6 に開催。</p> <p>4. 3. の 3 日間の参加者数 延べ 385 人, 異なり 223 人 昨年度までの発表論文集 (2016 年 48 件, 2017 年 37 件) 機関リポジトリにより公開。今年度分も機関リポジトリに公開予定 (64 件)。</p> <p>● 分類語彙表 (意味) に関連する言語資源の整備を行い, 国際会議も含めた場で発表・公開を行った 【項番 2. (1) 1. に関連事項】</p> <p>● Universal Dependencies (係り受け) に関連する言語資源の整備を行い, 通言語的なアノテーション基準策定に参画し, 並列構造について提言を行った。 【項番 2. (1) 2. に関連事項】 【項番 5. (1) 2. に関連事項】</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <p>1. UniDic (形態素) については, ワークスアプリケーションズと共同研究協定を行いながら, 関連する言語資源の整備を進めている。日本語の Universal Dependencies (係り受け) データを日本 IBM・NTT CS 研・NII・NAIST・京都大学と産学連携の枠組で整備・公開した。分類語彙表 (意味) については茨城大学とともに言語資源整備を進めている。音声アラインメントについては京都大学の技術支援を受けている。また, 今年度はじめて茨城大学からインターンシップの学生 (大学側で単位認定) を 1 名受け入れた。</p> <p>2. 「少納言」「中納言」「梵天」の維持管理を行った。 『日本語歴史コーパス』については言語変化研究領域と, 『名大会話コーパス』『現日研・職場談話コーパス』『日本語日常会話コーパス』については音声言語研究領域と, 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』については, 日本語教育研究領域と, 『日本語諸方言コーパス』については言語変異研究領域と共同で, オンライン検索システム「中納言」にて公開している。 「梵天」についてはビデオ教材を整備するとともに, 3 回講習会を実施した (参加者 44 名, 学生 19 名, 国外 2 名)。</p>	

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおり実施した
<p><b>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</b></p> <p>1. Universal Dependencies に関連したジャーナル論文を共同研究員とともに執筆  「Universal Dependencies 日本語コーパス」  浅原・金山・宮尾・田中・大村・村脇・松本（自然言語処理 2019年3月号）【項番1. (1) 1. の一部】</p> <p>Universal Dependencies に関連した国際会議発表を共同研究員とともに3件発表（LREC-2018 1件，Workshop on Universal Dependencies 2件）</p> <p>分類語彙表に関連した国際会議発表を共同研究員とともに4件行った（LREC-2018 1件，JADH-2018 2件，PACLIC 32 1件）【項番1. (1) 1. の一部】。</p> <p>2. CoNLL-2018 Shared Task に日本語データを提供した。</p> <p>3. 6/16に Universal Dependencies に関する公開研究会を実施（参加者26名）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の言語資源整備に関してガラパゴス化（日本国内で孤立した最適化）が進まないように通言語的なアノテーション研究の動向を調査しながら，日本語特有の問題について積極的に対外発表を行った。同じ主辞後置言語の韓国語の研究者とともに Universal Dependencies における東アジア言語で共通する問題について対外的に提言を行った。【項番1. (1) 1. の一部】</li> <li>・分類語彙表を中心とした言語資源として，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」「日本語歴史コーパス」に対するアノテーション・UniDic-分類語彙表番号対応表に関する発表を国際会議も含めて行った。【項番1. (1) 1. の一部】</li> </ul> <p><b>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</b></p> <p>「中納言」の「講義用アカウント」の発行の枠組を構築した。中京大学・東京学芸大学で試験的に利用した。</p>	

## 3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画をどおり実施した
<p><b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b></p> <p>1. 中京大学・東京学芸大学において中納言講習会・梵天講習会を実施した。</p> <p><b>(2) 人材育成に関する計画</b></p> <p>1. プロジェクト非常勤研究員を5名雇用（内，大学院在学中1名・大学院休学中1名）。1名が今年度中に学位取得予定。</p> <p>2. 大学院生5名が共同研究員として参加。</p> <p>3. 言語資源活用ワークショップ 2018 における若手向け優秀発表賞を授与。</p> <p>4. 所内の若手研究者の研究支援のために，研究相談の場として，オフィスアワーを設定（利用17件）。</p> <p>5. 茨城大学の修士学生1名をインターンシップとして受け入れ（茨城大学で単位認定）。</p>	

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおり実施した
<p><b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b></p> <p>1. UniDic (形態素) に関しては後述するワークスアプリケーションズとの協業で言語資源の整備を進めている。</p> <p>Universal Dependencies (係り受け) については, 日本 IBM・NTT CS 研・NII・NAIST・京都大学と産学連携の枠組で言語資源の整備を進めている。</p> <p>分類語彙表 (意味) については, 茨城大学とともに言語資源の整備を進めている。</p> <p>音声アラインメントについては京都大学からの技術提供を受けている。</p> <p>2. Google 社からの申し入れのあった共同研究については進捗なし (年度内に Google 社と BCCWJ の利用契約予定)</p> <p>3. ワークスアプリケーションズ徳島人工知能 NLP 研究所との共同研究を 10 月に開始。「複数粒度の分割結果に基づく日本語単語分散表現」モデルをオープンデータとして無償公開 (2019 年 3 月)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Microsoft の検索ツール Bing に UniDic-cwj version 2.2.0 を提供</li> </ul> <p><b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b></p> <p>1. UniDic の語彙素を 6355 語彙素追加 (2019 年 3 月 31 日現在)</p> <p>UniDic-分類語彙表番号対応表を公開し, 可能な語義を枚挙する解析器を公開。</p> <p>『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表アノテーションデータを公開。</p> <p>分類語彙表に対する反対語情報付与・単語親密度情報付与・岩波国語辞典語義との対応表の整備を進めており, 2019 年中に公開予定。</p> <p>2. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』契約申込数 33 件『日本語話し言葉コーパス』契約申込数 54 件 (2019 年 3 月 31 日現在)</p> <p>3. コーパス頒布用の契約書発行システムの整備を進め 9 月より運用開始。</p> <p>4. 日本語語彙の分散表現データ (word2vec のモデル) を公開 (公開後 137 名に配布)。</p> <p>高エネ研との機構間連携プロジェクトにより Poincare embedding (双曲空間への単語埋め込み) の技術を検討。</p> <p>大阪大・お茶の水女子大とともに BERT のモデル構築の検討を開始。</p> <p>ワークスアプリケーションズとともに新しい分散表現データを構築, 公開。</p> <p>5. 「梵天」の講習会ビデオを拡充した。現在 10 本のビデオを公開中。</p> <p>6. 中京大学において, 国語科の教員免許講習への協力を行った。</p>	

## 5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p><b>(1) 国際的協業に関する計画</b></p> <p>1. Academia Sinica との共同研究を進めた。 5月に国内で打ち合わせ 10月に前川・浅原が訪問（所長裁量経費による）</p> <p>2. 国際的な係り受けツリーバンクプロジェクト Universal Dependencies に参画しており、世界2位の規模の言語資源を公開。</p> <p><b>(2) 国際的発信に関する計画</b></p> <p>1. LREC-2018 で Special Session 実施（2018年5月）【項番1.（1）の一部】</p> <p>2. コーパス開発センター専任職員・研究員で15件の国際会議発表を行った。【項番1.（1）再掲】</p> <p>3. パージング（係り受け解析）の世界的な評価型ワークショップ CoNLL-2018 Shared Task にデータを提供した。【項番2.（1）再掲】</p> <p>4. 第11回国際計量学会 IQLA（2020年開催）を招致し、国語研での開催が確定した。</p>	

## 6. その他

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>1. 所内のコーパス開発プロジェクト支援のために、所内全体で利用可能なジャパンナレッジを10件購入した。次年度以降、研究図書室と共同で購入する。</p> <p>2. 所内のコーパス開発プロジェクト支援のために、形態論情報データベースの保守管理を行った。</p>	

## 平成30年度の評価

### 《評価結果》

計画を上回って実施している

### (総括)

研究面ではジャーナル論文発表、国際会議発表を多数行い、学会優秀論文賞受賞など高い研究成果をあげている。また、形態素、係り受け、意味、音声アラインメントの各分野において、大学、公的研究機関、企業との連携体制の下で言語資源の整備を着実に進めているばかりでなく、コーパス普及を目的とした検索ツールの公開・維持管理、教材作成、講習会実施を積極的に進めている。国際会議への関与も積極的であり、特別セッションの企画実施、評価データ提供など国語研のプレゼンス向上に貢献している。コーパス開発研究センターの活動は計画を上回って実施していると判断される。

## 《各項目別》

### 1. 研究について

ジャーナル論文5件をはじめとする研究発表を行い、学会優秀論文賞を受賞するなど高い研究成果をあげている。言語資源活用促進を目的としたワークショップ。シンポジウムを開催してコーパスの利用拡大を図っている。形態素、係り受け、意味、音声アラインメントの各分野において、大学、公的研究機関、企業との連携体制の下で言語資源の整備を着実に進めるとともに、コーパス検索ツールの公開・維持管理と普及のためのビデオ教材制作、講習会実施を行っている。このように研究活動では高い成果を生んでいると評価する。

### 2. 共同利用・共同研究について

共同研究については共同研究員としてプロジェクトに参加している大学院生と共同の研究が中心となっている。また、通言語的なコーパスアノテーションを意識した韓国語研究者との共同研究を実施しているが、これはコーパス研究の国際化を見据えた優れた取り組みである。中京大学・東京学芸大学においてコーパス検索ツール「中納言」のための講義用アカウントの試験的発行を行っているが、これもコーパス普及のために期待される取り組みである。

### 3. 教育について

非常勤研究員の雇用、大学院生の共同研究員としてのプロジェクト参加、インターン受け入れなどの方法で若手研究者の育成を図っている。

### 4. 社会との連携及び社会貢献について

形態素、係り受け、意味、音声アラインメントの各分野において、大学、公的研究機関、企業との連携体制の下で言語資源の整備を着実に進めている。Microsoft社へのUniDicの提供、ワークスアプリケーションズと共同の日本語単語分散表現モデルの開発を公開など、外部機関との積極的な連携関係の下に新しいデータの開発と、国語研内で開発された言語資源の公開・活用が有効に進められている。

### 5. グローバル化について

国外研究機関との共同研究推進が進行している。言語資源に関する代表的な国際会議 LREC において特別セッションを企画実施、国際会議での積極的な発表、国際ワークショップへの評価データ提供などを通じて多様で充実した国際的活動を展開しており、高く評価できる。

### 6. その他特記事項

特になし。

研究情報発信センター  
センター長：石黒 圭

I. 30年度活動概要

30年度予算総額 34,400 千円

30年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

所蔵資料の配信システムや公開コンテンツについて研究発表を7件行い、所蔵データベースの解説を専門書籍に掲載した。また、所蔵する音声・映像資料をめぐり、所内の複数のプロジェクトと連携し、共同利用体制を強化した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

所管するデータベース類について、コンテンツの再配置を行い、合理化に寄与した。「日本語研究・日本語教育文献データベース」への新規データの追加、研究資料室収蔵の音源・映像のデジタル化及びデータベース化、「研究資料室収蔵資料データベース」の充実を、当初の予定を上回るペースで積極的に推進した。また、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、国語研刊行物のデータ整備・登録を進め、オープンアクセス方針並びに実施要領を全所的な合意の下、作成した。国立国会図書館の「ジャパンサーチ」試験版において、国語研所蔵のデータベースを公開した。さらに、情報・システム機構に対し、研究資料室が所蔵・公開する社会調査データセットの情報を提供し、その利活用を一層図れる環境を整えた。

3. 教育に関する計画

センターの研究発信業務強化のため、プロジェクト非常勤研究員2名を雇用し、その育成に務めた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

『国立国語研究所論集』を2回、オンラインと冊子体の両形態で発行するとともに、円滑な発行を維持できるよう、編集体制の見直しを行った。

5. グローバル化に関する計画

特になし。

6. その他

ネットワーク・サーバ運用保守業務及びサポートデスク業務、及び仮想基盤の保守切れに伴う仮想基盤機器のリプレイス及び仮想サーバの移行を適切に実施した。

## II. 項目ごとの状況

### 1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</b> 1. 所蔵資料の配信システムのみならず、社会調査のデータセット等公開コンテンツについて研究発表を7件行った。 2. 「鶴岡調査データベース ver. 2.0 解説 (改訂版)」が『社会言語科学の源流を追う』(2018年9月18日、ひつじ書房)に全文収録された。 <b>(2) 研究実施体制等に関する計画</b> 1. 研究情報発信センターが所蔵する音声・映像資料を活用する日常会話コーパス、危機言語両プロジェクトと連携し、共同研究体制を強化した。	

### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
<b>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</b> 1. 所管するデータベース類 20 点について、アクセス及び管理を容易にするためにコンテンツの再配置(サーバ移行)を行った。これに伴い、合理化のため 3 サーバを廃止した。また、セキュリティ向上のため、所管する 4 サーバに対して、SSL 対応とソフトウェアのバージョンアップを実施した。 2. 新規データを 4 回追加 (約 3,500 件) した。総件数は 25 万 2 千件。外国語雑誌オンライン・ジャーナルの追加を継続し、Web 上で公開されている韓国学会誌掲載論文についてもデータ追加を行った。論文本文 PDF へのリンク情報の付与・点検については、今までの大学学術機関リポジトリ掲載論文に加え、学会誌掲載論文 (約 2,000 件) について新規リンク付けを行った。総リンク件数は 2 万 4 千件。『国語年鑑』遡及分図書については、1961 年版～1989 年版までの 29 冊 (約 19,000 件) のデータ追加を行った。また日本語学会秋季大会でブース発表を行い、利用者からの希望により、論文集等の図書に掲載された論文のデータ追加のための準備を開始した。 3. 研究資料室収蔵の音源・映像について、2,087 点のデジタル化を進めた (オープンリール録音 190 点、DAT テープ 900 点、カセットテープ 509 点、ミニデジタルビデオテープ 273 点、8 ミリビデオテープ 149 点、ユーマチック 66 点)。また、所内専用試視聴システム「研究資料室所蔵音源データベース」「研究資料室所蔵映像データベース」の増補収録を行った (音声 5,307 点、映像 296 点)。利便性向上のため、「研究資料室所蔵音源データベース」「研究資料室所蔵映像データベース」を統合した新所内専用試視聴システムの開発を行った。「室所蔵映像データベース」を統合した新所内専用試視聴システムの開発を行った。 4. 研究資料室収蔵資料の各目録の整備を進め、2018 年 7 月 20 日に「中央資料庫映画台本所蔵リスト」を公開した。また、「研究資料室収蔵資料データベース」に新規公開資料群 5 点を加えるなど、資料群概要記述の充実を図った。 5. 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、 ・ オープンアクセス方針策定に向け、研究情報発信センター運営委員会リポジトリ推進部会を設けて	

検討を行い、執行部・専任研究職員への説明を経て、方針を策定するとともに実施要領を作成した。

- ・国語研刊行物について、本文PDFおよびメタデータの整備を進め、リポジトリに登録し、DOIガイドラインに沿ってDOIを付与した（計621件：「日本語科学」260件、「日本語教育論集」61件、「国立国語研究所国語辞典編集資料」12件、「ことばの研究」90件、等）。

6. 「日本語観国際センサス」の回答データセットを2018年9月19日に公開した。
7. 「「国語力観」に関する全国調査」の回答データセットを2018年11月28日に公開した。
8. 国立国会図書館による国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」試験版において、国語研所蔵の次の四つのデータベースを、2019年2月27日に公開した。
  - ・『方言文法全国地図』地図画像
  - ・『日本言語地図』地図画像
  - ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文
  - ・国立国語研究所学術情報リポジトリ

## (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. 情報・システム機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターが開発を進めている「人間・社会データ・コンプライアンス管理プラットフォーム」での言語調査データ活用に向けて、研究資料室が所蔵・公開する社会調査データセットの情報を提供した。

## 「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

Sと自己評価した根拠は次のとおりである。

- ①海外の日本語関係の文献、特に韓国学会誌掲載論文を追加し、研究者コミュニティの要望の強かった論文集等の図書にある論文データに着手できたことで、「日本語研究・日本語教育文献データベース」(Web)におけるCiNiiにはない国語研の独自性をさらに強化することができたため。
- ②オープンアクセス方針および実施要領について、当初は着手を予定していたものの、研究情報発信センター運営委員会を中心に、執行部・専任研究職員の集まる会議体での計5回の検討を経て、全所的な理解を得つつ方針ならびに実施要領を作成することができたため。
- ③研究資料室が収蔵する資料の公開を進め、予定のない「日本語観国際センサス」「国語力観」に関する全国調査」の回答データセットを公開したため。
- ④国立国会図書館による国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」試験版において、『方言文法全国地図』『日本言語地図』など、国語研所蔵の四つのデータベースを公開し、大学・研究所等の共同利用により広く供することができたため。
- ⑤情報・システム機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターに対し、研究資料室が所蔵・公開する社会調査データセットの情報を提供することで、その利活用を一層図れる環境が整ったため。

### 3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画がないので記載なし
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
(2) 人材育成に関する計画	
1. 社会調査のデータセット公開のため、プロジェクト非常勤研究員1名を雇用し、「日本語研究・日本語教育文献データベース」の登録範囲拡張のため、プロジェクト非常勤研究員1名を雇用し、その育成に務めた。	

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおり実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
1. 『国立国語研究所論集』第15号(2018年7月)と第16号(2018年10月)をオンラインと冊子体の両形態で発行した。また、円滑な発行を維持すべく、投稿申込制を廃止し、投稿締切の回数を増やすことにより、原稿の多寡に影響を受けにくい体制とした。	

### 5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画がないので記載なし
(1) 国際的協業に関する計画	
(2) 国際的発信に関する計画	

### 6. その他

ネットワーク・サーバの運用保守及びサポートデスク業務を、年間を通じて実施した。また、仮想基盤リプレイスにおいても、当初計画の通り2018年8月に設置・移行を完了し、新システムを稼働させた。
--

## 平成30年度の評価

### 《評価結果》

計画を上回って実施している

## (総括)

センター主管の研究としては特筆すべき成果は見当たらないが、データベースサーバの見直し、データベースへの新規データ追加、音源・映像データのデジタル化/データベース化などを通じて研究データベースの着実な拡充と安定した運用を図るとともに、所蔵資料の各種目録の整備を行い、学術情報リポジトリのオープンアクセス化の検討を通じて研究資料情報公開体制の強化に務めている。また「方言文法全国地図」「日本語地図」の地図画像公開などを通じて大学・研究機関の共同利用に資するデータ公開を積極的に実施している。研究情報の整理、追加、公開に関して着実に活動を進め、計画を上回って実施していると判断できる。今後は研究情報発信に加えて利用度把握を行い、情報発信方針策定に活用することを期待する。

## 《各項目別》

### 1. 研究について

研究所所蔵資料の配信システムおよび公開コンテンツに関する研究発表を7件行っている。鶴岡調査データベースの解説がひつじ書房刊行の書籍に収録されている。これらは解説的性格であり研究成果の質としてはやや物足りなく感じる。センター所蔵の音声・映像資料を活用する研究所内の研究プロジェクトとの連携体制を強化している。

### 2. 共同利用・共同研究について

所管するデータベースコンテンツの再配置、日本語研究・日本語教育文献データベースをはじめとする各種データベースへの新規データ追加、音源・映像データのデジタル化/データベース化などを通じて研究データベースの着実な拡充を図っている。研究資料室所蔵資料の各種目録の整備、学術情報リポジトリのオープンアクセス化の検討を通じて研究資料情報公開体制の強化に務めている。また、「日本語観国際センサス」「国語力観」の回答データセット公開、「方言文法全国地図」「日本語地図」の地図画像公開などを通じて大学・研究機関の共同利用に資するデータ公開を実施している。研究情報の整理、追加、公開に関して着実に活動を進め、充実した研究情報発信を実現している。さらに発信情報の利用度把握を進めることを期待する。

### 3. 教育について

非常勤研究員2名を雇用し、データの公開および拡充に当たるとともに育成を行っている。

### 4. 社会との連携及び社会貢献について

特になし。

### 5. グローバル化について

特になし。

### 6. その他特記事項

特になし。

## 平成 30 年度「管理業務」に関する評価シート

### 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

#### 1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

##### 【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

##### 【実績】

- ・運営会議において、外部委員から研究所の研究活動の広報について意見等をいただき、以下のとおり見直しを図った。
- ・ホームページの見やすさの向上させるため、更新情報やイベント情報、関連行事、その他国語研の研究活動に関する情報を SNS（ツイッター）で発信することにより、認知率やホームページ訪問数が向上した。
- ・その他、研究教育職員の選考について審議した。

#### 2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

##### 【計画】

機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究プロジェクトを研究系とセンターにより推進し、国際学術機関等の連携及び国際協力の推進を国際連携室において図る。また、研究事業の進捗状況に関する情報を IR 推進室において管理する。

##### 【実績】

- ・共同研究プロジェクトを推進するために、コーパス開発センター運営委員会、研究情報発信センター運営委員会に加え、新たに情報基盤運用委員会を設置し、プロジェクトが共同で利用するサーバの導入等、言語資源の構築と発信のためのインフラを安定的に運用する体制を整えた。また、コーパス開発センターでは研究系と協力して、コーパス・言語資源に関わるプロジェクト内外の成果を発表できる場として「言語資源活用ワークショップ 2018」を開催した。
- ・国際連携室において、国際連携協定締結の手続きを示したフローを作成し、30 年度に 5 件の連携協定を締結した。
- ・IR 推進室に特任専門職員 1 名を配置し、情報収集のフォーマットを整備し、随時情報収集を行うとともに、これらの情報を将来計画委員会を始めとする諸委員会の検討に反映させ、組織・運営の改善と強化に役立てた。

#### 3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

##### 【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

##### 【実績】

- ・西東京地区国立大学法人等主催研修への参加

西東京地区国立大学法人等共同開催の職員研修 3 件に職員を参加させた。①西東京地区国立大学法人等初任職員研修（H30. 5. 30～6. 1, 参加者 3 名）②平成 30 年度文部科学省西東京地区生涯生活設計セミナー（H30. 9. 20, 参加者 2 名）③西東京地区国立大学法人等中堅職員研修（H30. 10. 15～

10.17, 参加者2名)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・本研究所が、西東京地区国立大学法人等共同開催研修の実施・運営機関となったため、研修内容の企画・立案を行い本研究所で研修を開催した。今年度は、「働き方改革関連法」が成立したことに伴い、各法人の役員、部課長及び人事労務担当者を対象として、時間外労働規制、同一労働同一賃金などをテーマに、法改正内容や実務対応策等について社労士を講師として研修を実施した。(開催日：H30.11.28開催, 参加機関：15機関, 参加者(全体)：42名)</li> <li>・人間文化研究機構本部主催研修への参加 <ul style="list-style-type: none"> <li>人間文化研究機構本部主催による以下の研修へ職員を参加させた。①人間文化研究機構ワークライフバランス研修(H30.7.30開催, 参加者5名)②平成30年度人間文化研究機構事務系職員の人事被評定者研修(H31.3.11開催, 参加者4名)③平成30年度ハラスメント防止研修 ※人間文化研究機構と自然科学研究機構の共催(H31.2.4, H31.2.12の2回開催, 参加者：42名)</li> </ul> </li> </ul>	
自己点検評価	計画どおり実施した

## 《評価結果》

### 計画どおりに実施している

組織運営の改善に関しては、運営会議を開催し、外部委員からの意見を受け、ホームページの見やすさの向上に努め、ホームページ訪問者数の増加などの効果を上げたことは評価できる。教育研究組織の見なおしに関しては、共同研究プロジェクト推進会議で基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認し、プロジェクト間の意思の疎通を図ったことは評価できる。また、国際連携についても海外研究機関と共同研究実施し、新たに海外学術交流協定を締結したことは評価してよい。事務等の効率化・合理化に関しては、西東京地区国立大学法人等主催研修への参加、研修内容の企画・立案、さらに本研究所で研修を開催したことは評価に値する。また、人間文化研究機構本部主催研修への参加を通じてワークライフバランスの改善、ハラスメント防止に務めたことも評価できる。

## 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

### 1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度80%以上にするため、競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

#### 【実績】

- ・平成30年度に配分された科研費(新規及び継続課題)に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者33名のうち31名が参加した(参加率93.9%)。
- ・近隣の研究機関と合同で科研費説明会(9月28日)を開催した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、常勤・非常勤を問わず全研究者を参加対象とした科研費申請準備会議を開催(10月17, 18日)し、申請者が他分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行い、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した(平成31年度

分申請 40 件)。

- ・『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語日常会話コーパス (モニター版)』の有償頒布を行い、総額 13,258 千円となる収入を得た。

## 2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

### 【計画】

(1) 一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

### 【実績】

- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。
- ・昨年に引き続き複数年契約を実施している契約に関して、仕様の見直しにより、「施設常駐管理・空調設備保守点検・消防設備等点検・清掃環境衛生」の各業務委託契約について経費を削減した。
- ・昨年に引き続き複写機に関しては、賃貸借契約と保守契約の一本化、複数年契約の締結により経費を削減した。
- ・従来1つの会議において実施していたペーパーレス会議を3つに拡大し消耗品の節約と労務の軽減に努めた。

### 【計画】

(2) 業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人件費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

### 【実績】

- ・7,8月の2ヶ月間、管理部職員を対象に「ゆう活 (夏の生活スタイル変革)」を実施。実施者に対して定時時刻で帰宅するよう促す他、会議の設定時間や一定の時間以降に仕事の発注を行わないよう全職員へ働きかけるなどして超過勤務の抑制を図り、職員のワークライフバランスに努めた。
- ・毎週、水曜日に定時退勤日の所内放送及びメールでの周知で意識啓発を促し、超過勤務の削減を図った。
- ・施設管理業務及びネットワーク管理業務について、専門業者に外部委託を行い、引続き管理業務の効率を図った。
- ・フレックスタイム制度の所内導入について、ワーキンググループを設置し、検討を行うとともに、職員の勤怠管理の適正化及び事務の効率化を図るため、勤怠管理システムの導入に向けて情報収集を行った。

自己点検評価

計画どおり実施した

## 《評価結果》

### 計画を上回って実施している

外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関しては、科研費への常勤研究者の参加率が93.9%に達し、初期の目標を上回ったこと、また当研究所作成コーパスの有償頒布で総額 13,258

千円となる収入を得たことは大いに評価してよい。経費の抑制に関しては、研究所内のさまざまな場所に電力節減・夏期の軽装励行のポスターを掲示しコスト意識・省エネ意識の徹底を図り、さまざまな業務契約・機器の保守契約の見なおし、ペーパーレス会議の推進などで経費削減に取り組んだことは評価できる。また、施設管理業務及びネットワーク管理業務で専門業者に外部委託を行い、管理業務の効率化を進め、7,8月の2ヶ月間、管理部職員に定時時刻で帰宅を促し超過勤務の抑制を図り、フレックスタイム制度の所内導入について情報収集を行い、検討し、全体的な業務合理化を進め、経費削減に取り組んだことは評価できる。

## 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

### 1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

#### 【実績】

- ・所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員6人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議と連携して開催し、PDCAサイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家8名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

### 2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

#### 【実績】

- ・国立国語研究所では、月2回メールマガジンを配信した他、ポータルサイト「ことばの研究館」を開設し、動画を含めた各種情報の発信を行った。さらに、大学の機能強化に努めるべくサイトの英文化を進めるとともに、研究資料室で保管されている過去の研究資料のデジタル化・データベース化、研究図書室の「日本語史研究資料」のウェブによる発信を進めた。また、一般向けの研究情報誌「ことばの波止場」を年2（30年9月、31年3月）に刊行した。
- ・研究成果を広く一般市民に発信するために、第13回NINJALフォーラム「日本語の変化を探る」（30年11月4日、一橋講堂）を開催した。参加者は357人であった。また、研究所創立70周年・移管10周年記念事業の一環として、オープンハウス2018を開催した（30年12月22日）。ポスター発表38件、シンポジウム2件を行い、参加者は150人（うち小中高生4人、大学・大学院生30人、一般116人）であった。その他、駒澤大学の公開講座「日本語の千年 ―コーパスで解き明かすことばの生態―」においてプロジェクトメンバーが全8回の市民向け講義を行った。小・中学生を対象とする催しとして「ニホンゴ探検」（30年7月14日）とNINJALジュニアプログラム（出前授業型プログラム）を開催した。「ニホンゴ探検」の参加者は357人で、毎年増加している。
- ・中学生～高校生を対象とする催しとして職業発見プログラムを7件、小学生を対象としたジュニア

<p>プログラムを2件開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学生から一般市民までを対象とする「読んで楽しめる研究情報誌」として『国立国語研究所ことばの波止場』を年2回刊行した。内容はvol. 4が「特集：言語資源の整備と研究成果発信」（30年9月発行）、vol. 5が「特集：研究プロジェクト紹介①言語変異と言語変化」（31年3月発行）である</li> <li>・一般市民に研究活動や研究内容をわかりやすく発信するためのポータルサイトを開設し、「ことば研究館」「ことばの疑問」等44件の記事を掲載した。</li> <li>・機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」により、モバイル型展示ユニットを使った展示を8回開催した（神奈川大学（5月7～25日、歴博と共同）、弘前大学（5月28～6月15日）、羽田空港国際線ターミナル（8月24日～9月～14日、歴博と共同）、まつえ市市民活動フェスタ（9月25日）、鹿児島大学・人間文化研究機構協定締結記念シンポジウム（9月29日、鹿児島大学）、大学共同利用機関シンポジウム2018（10月14日、名古屋市科学館）、国語研オープンハウス（12月22日）、富山大学（2月12～19日））。弘前大学、松江市、富山大学では展示にあわせて講義・講演を行った。</li> <li>・放送大学の新チャンネル開設記念企画として国立国語研究所の特集番組2本を共同で制作し、放送大学で放映された。また、動画は放送大学の教育用コンテンツとして利用されている。</li> </ul>	
自己点検評価	計画どおり実施した

## 《評価結果》

### 計画を上回って実施している

評価の充実に関しては、所内に自己点検・評価委員会に設置し、自己点検・評価の実施し、さらに所外の専門家8名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施したことは評価できる。情報公開や情報発信等の推進に関しては、月2回のメールマガジンの配信、ポータルサイト「ことばの研究館」の開設、サイトの英文化の推進、研究資料室で保管されている過去の研究資料のデジタル化・データベース化、一般向けの研究情報誌「ことばの波止場」の刊行、一般市民を対象としたNINJALフォーラム「日本語の変化を探る」の開催、研究所創立70周年・移管10周年記念事業の一環としてのオープンハウス2018の開催、さらに小・中学生を対象とする催しとして「ニホンゴ探検」、放送大学との国立国語研究所の特集番組2本を共同制作・放映など、さまざまな情報発信の企画が行われたことは高い評価に値する。

### その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置を達成するための措置

#### 1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

##### 【計画】

施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

##### 【実績】

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定、通路の補修等）により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。

- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。
- ・研究所施設を関連学会等外部団体に貸出し収益の改善を図ると共に既存施設の活用を促した。

## 2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

### 【計画】

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

### 【実績】

- ・防災訓練を今年度から立川消防署の指導の下、研究所内で防災訓練を実施し、所内での避難訓練・安否確認を行う他、消火活動訓練、応急救護訓練を実施した。(平成30年11月12日)
- ・災害時、職員一人一人が安全確保を図るための手順や、具体的な対応について参考となるよう、留意事項をとりまとめた携帯型の防災ポケットマニュアルを作成、配布した。(平成31年3月)

## 3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

### 【計画】

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

### 【実績】

- ・情報セキュリティ研修(DVD, e-learning研修)を実施(平成30年8月22日～平成31年1月8日)。
- ・「人を対象とする研究に関する研究倫理審査」を24件実施した。
- ・30.9.14に4機構合同個人情報保護研修に個人情報保護責任者に7名を参加させることにより、個人情報保護に関する意識高揚を図った。
- ・本部主催の研修に対象者を参加させるとともに、主にCSIRT構成員を自然科学研究機構情報セキュリティ研修(8月27日)、国立大学法人等CSIRT研修(9月13,14日)、国立大学法人等情報セキュリティ監査担当者研修(11月19日)に参加させた。
- ・日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を新規採用の研究者33名に受講させるとともに、採用時オリエンテーションを実施した。また、人間文化研究機構平成30年度コンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会(11月26日)に参加させた。

自己点検評価

計画どおり実施した

## 《評価結果》

### 計画どおりに実施している

施設設備の整備・活用等に関しては、施設・設備の点検が計画的に行われ、職員・利用者の適切な予防安全が計られ、電力節減など省エネに勤めるとともに、研究所施設を外部団体に貸出し収益の改善を図るなど施設の活用を務めたことは評価できる。安全管理に関しては、立川消防署の指導のもと防災訓練を実施し、また災害時に職員の安全確保を図るための携帯型の防災ポケットマニ

アルを作成，配布したことは評価できる。法令遵守等に関しては，公的研究費の適正使用に関する研修や研究倫理教育等を実施し，情報セキュリティに関する研修を行ったことは評価できる。

#### **【総合評価】**

業務運営の改善及び効率化，財務内容の改善，自己点検・評価及び当該状況に係わる情報の提供，その他業務運営のすべての項目に渡って，管理業務はほぼ計画通りか，計画を上回る結果を上げている。全体的にきわめて良好な業務運営が行われていると評価できる。

## 2. 資 料

## 国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 坂原 茂 東京大学名誉教授  
専門： フランス語学，認知言語学
- 小野 正弘 明治大学教授  
専門： 国語学・日本語史
- 上山 あゆみ 九州大学教授  
専門： 生成文法・日本語統語論
- 沖 裕子 信州大学教授  
専門： 談話，方言，日本語教育
- 片桐 恭弘 公立はこだて未来大学学長  
専門： 情報科学，社会言語学
- 砂川 裕一 国際交流基金日本語国際センター所長  
専門： 哲学，比較文化基礎論，言語文化教育論，日本語日本事情教育論
- 橋田 浩一 東京大学教授  
専門： 自然言語処理
- 森山 卓郎 早稲田大学教授  
専門： 日本語学，日本語文法

任期：平成30年10月1日～令和2年9月30日（2年）

◎委員長 ○副委員長

## 国立国語研究所平成30年度業務の実績に関する評価の実施について

### 1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

### 2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、平成30年度の計画及びその実施状況が記入された「30年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「管理業務」）の内容を検証した。

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次の通りである。

点検項目	観 点
研究成果 (研究) (共同利用)	研究業績の量的側面 ・ どれだけ論文等のアウトプットがあるか
研究水準 (研究) (共同利用)	研究業績の質的側面 ・ どれほど学術的意義や社会的意義があるか
研究体制 (研究) (共同利用)	研究推進にあたっての制度的側面 ・ どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか
教育	研究過程及び研究成果の教育的普及 ・ どれほど大学等の機能強化に貢献しているか
人材育成	若手研究者の育成、及び社会人の学び直し ・ どれだけ受け入れて取り組んでいるか
社会連携	自治体・産業界との連携など社会との協業 ・ どれほど社会と連携しているか
社会貢献	研究成果の社会への普及 ・ どれほど社会に向けて発信しているか
国際連携	研究体制における国際的協業 ・ どれだけ海外の組織と連携しているか
国際発信	研究過程及び研究成果の国際的発信 ・ どれだけ国際的に発信しているか
その他特記事項	

機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧

研究系	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・対照研究領域	対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法	対照言語学	窪菌 晴夫
理論・対照研究領域	統語・意味解析コーパスの開発と言語研究	統語コーパス	プラシャント・パ ルデシ
言語変異研究領域	日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成	危機言語・方言	木部 暢子
言語変化研究領域	通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開	通時コーパス	小木曾 智信
音声言語研究領域	大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究	日常会話コーパス	小磯 花絵
日本語教育研究領域	日本語学習者のコミュニケーションの多角的な解明	学習者のコミュニケーション	石黒 圭

## 国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月 1日  
国語研規程第7号  
改正 平成28年 4月 1日

### (趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第1号）第15条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

### (任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

### (組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

### (任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

### (委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

### (議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

### (意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

### (外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

### (庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか，外部評価の実施に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附 則

この規程は，平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は，平成28年4月1日から施行する。

## 令和元年度国立国語研究所外部評価委員会ヒアリング

日 時： 令和元年 5 月 14 日（火） 14:00 ～ 17:10

場 所： 国立国語研究所 1 階大会議室

ヒアリング事項：

1. 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法
2. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究
3. 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成
4. 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開
5. 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究
6. 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明
7. コーパス開発センター
8. 研究情報発信センター

資 料：

1. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（対照言語学：平成 30 年度）
2. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（統語コーパス：平成 30 年度）
3. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（危機言語・方言：平成 30 年度）
4. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（通時コーパス：平成 30 年度）
5. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（日常会話コーパス：平成 30 年度）
6. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（学習者のコミュニケーション：平成 30 年度）
7. 自己点検報告書（コーパス開発センター：平成 30 年度）
8. 自己点検報告書（研究情報発信センター：平成 30 年度）

国立国語研究所外部評価委員会【平成30年度実績評価】（第1回）

日 時： 令和元年5月31日（木）メール審議

議 事：

1. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価について
2. その他

資 料：

1. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価報告書（案）
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間実績報告書

## 国立国語研究所外部評価委員会【平成30年度実績評価】（第2回）

日 時： 令和元年8月1日（木）14：00～16：00

場 所： TKP 東京駅前セントラルカンファレンスセンター 11階「カンファレンスルーム 11C」

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成30年度共同研究プロジェクト評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価について
4. 平成30年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 平成30年度「組織・運営」, 「管理業務」の評価について
6. その他

資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（平成31年4月1日現在）
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
- 3-1. 前回議事概要（案）（平成30年6月29日）
- 3-2. 前回議事概要（案）（令和元年5月31日）
4. 国立国語研究所プロジェクト別 平成30年度評価担当
- 5-1～5-6. 平成30年度共同研究プロジェクト自己点検報告書  
平成30年度共同研究プロジェクト評価シート
6. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価報告書
- 7-1～7-2. 平成30年度国立国語研究所2センターに関する実績報告書  
平成30年度国立国語研究所2センターに関する評価結果
8. 平成30年度「組織・運営」, 「管理業務」に関する評価結果
9. 平成30年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
10. 4年目終了時評価作業スケジュール